
東方否意狼

目だま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方否意狼

【Nコード】

N7842N

【作者名】

目だま

【あらすじ】

さてさて、これは一人の少年が歩む奇妙な物語。

不慮の事故を発端に過去 それも人類が生まれるよりもはるか昔へ。原因不明予測不能。第二の生はよりもよって人間ですらない真つ黒な獣。

一体、彼はどうなっていくか、どんな物語を歩んでいくのか

それは、神以外、与り知らぬ話でございます。

タイトル変更。旧タイトル『東方妖狼紀』、現在のタイトルは『とうほういないおおかみ』とお読み下さい。

注意

- ・これは『上海アリス幻楽団』によるゲーム『東方project』の二次創作です。
- ・東方キャラの設定は基本的に二次設定です。
- ・一度リメイクしました。設定が変わっているので注意して下さい。今度はまともだと良いなあ（願望）
- ・この作品は作者の勢いとノリと思いつきで構成されています。
- ・主人公は強キャラです。でもオリキャラはバグキャラです。そしてその内の一人(?)は最強です。
- ・オリキャラが出ます。むしろ最初はオリキャラしかいません。最初は東方の皮を被った何かです。

以上の点に気を付け、用法、用量を守り正しくお読みください。

再びなプロローグ（前書き）

皆様、お久しぶりで御座います。目だまです。

此度、黒歴史と言っても良い今作を、一から書き直すことを勝手に決意しました。本当に申し訳有りません。

変更点としては、シナリオの大幅な書き換え、あるキャラの順番が増加、オリキャラ複数追加、時系列の変更、細々とした設定の変更、etc etc。

そして物語の序盤が東方の皮を被った何かに……。

コラボ企画に参加してるのに何やってんだと思いますが、しばらくは最優先で更新させていただきます。本当に申し訳有りません。

再びなプロローグ

人は孤独を嫌う。痛みを嫌がる。死を恐れる。

それは当然だと思っ。

ありがちな事を言えば、どんな人でも一人では生きていけない。

別に、食べ物がどうこうとかさうのではなく、単純に一人では何れ壊れてしまおうと言う意味で。直接的でなくても、ネットでもゲームでも何でも構わないが、人と繋がっていようとする。それはある意味本能だと思う。知らない土地で一人で迷子になると不安になるとか、そんな感じ。

死や痛みははもつと単純だ。

死は未知だ。誰にも分からない。人にとって、未知とは何よりも恐ろしい。故に、好奇心はその未知を既知に変えようとする。そして、痛みはその先に死を連想させる。

ならば、人との繋がりを、世界との繋がりをすらも消し、痛みを十分に感じ、死に至ってしまった俺は、狂わずにいられるのだろうか。

「それで、俺はどうなるんですか？」

「何か落ち着いてないか？」

「厨二な独白したら落ち着きました」

俺がそう言うと、俺の前に立つ大男は溜め息を吐いて呆れた様な目を向けてくる。

「珍しいな、お前。こう言う事になったら、何か変な叫び声上げて喜ぶか、泣きながら発狂するかのどっちかなんだが……」

いや、それどっちも変わらないと思う。発狂は喜びの余りだろうし。

「で、詳しい説明してもらえますか？ 閻魔様」

何故俺が閻魔と名乗る大男と対談をしていたのか、それを説明するために俺の体感時間で数時間前まで遡ろう。

いつもの様に母親に叩き起こされ、両親と朝食を食い、迎えに来た友人二人と平凡な公立高校へ行き、いつもの様に恙無く授業を受けたその帰り道の事だ。

「あー、もう学校嫌だ。引き籠もってニートしたい……」

思いつきり猫背で、あからさまにだれてますと言う感じで歩く俺。

「あ、そう言えば、永夜抄どうだった？」

その俺の隣を歩く友人兼幼馴染 流瀬宗一。背が高い、イ

ケメン、頭が良い、一級フラグ建築士、鈍感と言う何処の主人公？と聞きたくなる様な奴。たまに主人公補正が付いてるんじゃないかと本気で疑ってしまう。でも俺なんか目じゃない程のオタク。と言

うか俺にそつち関係を仕込んだ奴。俗に言う残念なイケメン。なのに人気。イケメンってずるい。

「無理。ノーマルで死んだ」

「相変わらずゲーム下手だな」

余計なお世話だこの野郎。今回のちゃんとイージーはクリアしたんだぞ!!

「下手の横好き乙」

言い返せない自分が憎い。

「あの、永夜抄って何ですか？」

そう言っつて口を挟むのは高校になって宗一の奴が面白そうだからつて言う理由で俺に引き合わせた隣のクラスの女子。名前は……ごめんまだ覚えてないや。蛙と蛇の髪飾り付けてて、近所いや隣町だっけ？まあそこら辺の神社で巫女かなんかやってるらしい。そもそも家の事情とかであんまり学校に出てこないから俺は宗一越しにしか接点が無いのだ。

「東方Projectって言っつて、なんだっけ上海アリス幻樂團？が出してるゲームの事だよ」

「お前にしては良く覚えてたな。簡単に言えば、敵が撃ってくる弾幕を避ける弾幕シューティングゲームつて言うジャンルの同人ゲームだ。漫画とかもあるけどな」

「はあ……つまりインベーダーゲームみたいな物なんですね」

その一言に宗一が固まった。取り敢えず、ご愁傷様。

「じゃあ、俺先に帰るから」

「おう。君はちょっとこっちでOHANASHIしようか」

「え、え？ 私何か言いました？ ちょ、流瀬君！？ 肩、肩痛いですって！！」

ああなつた宗一はそう簡単には止まらない。まあ、運がよければ一時間程度で開放されるだろう。俺の時は家だって所為で夜まで行ったからなあ……。

「まっ、でも良いだろ」

俺の長年の地味キャラのカンがアイツは宗一に惚れていると告げているし、一緒にいれるのは悪い事じゃないだろ。そんな事考えながら、二人をおいて信号が青になったのを確認し、交差点を渡る。ゴシャツ、と。

俺は、初めて人の肉が潰れる音を聞いた。

あまりにも突然過ぎて訳が分からないが、その音が自分から発せられた事だけは理解できた。視界が定まらず天と地を交互に写す。地面に何度かバウンドして、ようやく止まったと思つた次は信じられない程の激痛。痛すぎて何処が痛いのが分からない。息が苦しい。叫ぼうとしても声が出ない。

(あー……、名前、覚えとけば良かったかなあ……)

瞼を閉じた訳でもないのに暗くなっていく視界の中で、最後に思つたのはそんな事だった。

「と、ここまで覚えています」

「……お前、よくそこまで覚えてたな」

何処まで覚えている？ と聞かれたので、多分死ぬ間際の感触や感覚までも鮮明に語ったら閻魔様にドン引きされた。

閻魔様曰く、信号無視をした2トントラックが俺に激突。ゴミ屑の様に宙を舞い、地面に叩き付けられたそう。その時の俺の姿は、脳漿は飛び出し内蔵は破裂し、骨は砕け皮膚を突き破り大量に出血しているスプラッタ映画も真つ青な死体だったそう。

確かにそんな中で意識を保っていた俺すげえ……。

「で、別にそれが閻魔様の所為とか、そんなテンプレは無いんですよっ。」

「ああ。他の神は暇潰しとかで勝手に殺す様な事例もあるが、お前は違う。アレは純然たる事故だ」

と言うか、そんなテンプレ本当にあるのか……。小説の中だけだと思っていた。

「奴ら、俺になんの断りも無く勝手にやって俺には後始末だけやらせやがる……！！特にゼウスだあのジジイ！！今年に入ってもう三回目だぞ！？ 地獄に叩き落してやるうかあの無能め！！」

閻魔様はストレス社会に生きてるらしい。と言うか、ゼウス何やってんの？ 神話でも色々やらかしてたのは知ってるけど、現代でも？

「最近じゃあのスキマが神隠しまでやってるしよお……！！ やっ

「はあその担当が映姫だけってのはきつかったか……」

「は、はあ……？」

えっと……スキマ？ 神隠し？ 確かに最近行方不明者が出てたのは知ってるけど、何故その二つの単語が出てくる。え？ あるの？ 幻想郷あるの？

「っと、話が反れたな。まあ、お前の死自体に問題は無い。問題は死んだ後だ」

「尋ねたい事は山ほどあるが、どうせ死んだんだから関係無いと割り切ろう。」

「ああ、でも宗一の奴は幻想入りとかしそうだな。それを追ってあの子も、……っとリア充爆発しろ！！……何か空しい。鬱だ死ぬ……あ、俺もう死んだんだった。」

「おい、大丈夫か？」

「あー……平気です」

「百面相している俺を閻魔様が心配してくれる。顔怖いけど、良い人だ閻魔様。」

「ならいいが……単刀直入に言うぞ。お前は这个世界の輪廻から外れた」

「へーそうで……す……か？」

「おい、今何て言ったこの人。」

「原因はお前にあった何らかの能力の暴走。恐らくだが、比較的近い平行世界に転生する事になるだろう」

「ハア！？」

俺に能力！？そんな物発動したためしがないぞ！！

「時間が無くなってきた。質問は一切認めん。お前の今世の記憶はそのままにしておく。俺も出来る限りを尽くして探してやるが、どんな世界でも頑張って生きろ」

「ちょ、何言つて
「時間だ」

余りの急展開に付いていけなくなった俺は閻魔様にもっと詳しい事を聞こうとするが、閻魔様の一言で光に包まれ、意識が遠退いて行く。

次に目が覚めた時には、鬱蒼と生い茂る森の中にいましたとさ。

狼の新しい命と生活

アルーヒ、モリノナーカー、イヌサーンニ、デアーツタ。

「いや、さすがにこれは……」

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！！

『閻魔様とのドキドキ死後対談の後、目を覚ますと森の中にいた』

な、何を言ってるのか、わからねーと思うが俺にもわからねー。

これだけでも十分に恐ろしいのに、さらにもう一つ。

取り敢えず、ジツとしても仕方が無いと思って立とうとしたら立てなかった。仕方なく四つん這いで歩いたんだが、妙に歩きやすい。まあ、いいかと森の中を歩き続けると大きな川を見つけた。物凄く綺麗な川だ。今時こんな川もあるんだなーと感心しながら、喉の渴きを潤すために川を覗き込んだら、そこに写っていたのは、俺の顔じゃなく真つ黒な目つきの悪い犬つぽい何かの顔が映りこんでいた。

「何ぞこれ……」

リアルに頭がどうにかなりそうだ……。

何度瞬きしても、後ろを振り返っても見ても、写っているのは俺の顔ではなく犬の顔だ。いや、そもそも何故気付かなかった。

視線をすぐ下に向ければ、見えるのは肌色の見慣れた手ではなく、獣つぽい真つ黒の毛に覆われた前足。顔を後に向ければ、同じく真つ黒な毛に覆われた胴体に後ろ足、更に尻尾。……あ、自分で動かせる。

「つまり、俺は人ではなく犬（？）として生を受けた、と」

正直、何でいきなり成体なのかとか、犬の体なのにどうやって声出してるんだろう、など疑問は尽きないが、今は。

「何でああ—————ッ!!!!!!!!!!」

思いっきり叫ぼう。

取り敢えず、今の現状を確認すると、この森の中には人のおいが全くしない。むしろ獣臭い。つまり、俺はこれから野性の中で生きていかなければならん訳だ。

「どうしよう……」

川からさほど離れていない森の中、前足の爪で顔をポリポリと掻きながら悩む。

我ながらシユールな画だと思うが、誰も居ないんだ。気にする必要は無い。

体に異常は無い。それどころか、感覚的なスペックに関しては向上している様だ。嗅覚は言つに及ばず、味覚、更には気配察知まで出来る様に。視界が狭まっていないのが一番の謎だが、まあ、得をしたと考えておこう。

運動性能もいくつか試したが、走る速さや体力も明らかに上昇。物を持つ事が出来ないのは不便だが、その内考えれば良いだろう。

「問題は、飯だよな……」

「こちらら今時の普通の高校生だ。狩りのやり方なんか……いや、知らない事も無いけど、動物の狩りは知らない。」

だが案ずる事無かれ。

「ここで何故この体が既に成体程の大きさなのか、と言う疑問に着目しよう。」

普通に転生すれば、恐らくは幼い状態のはずだ。だが、俺は成体つまり、今の状態は俗に言う憑依状態であり、上手くいけば体の持ち主の知識を使えるかもしれない、と。人間、追い込まれば考えが浮かぶものだ和我ながら感心した。二次創作読んでてよかった！ じゃないと憑依なんて知らなかったし。

教えてくれた宗一に今日この時だけ感謝しつつ、目を閉じる。

闇の中に落ちていく様な、夢を見ている様な感覚の中、集中力を出来る限り引き出し、記憶を探っていく。

そんな中で、頭に思い浮かぶ事が二つ、全く意識していないにも拘らず、口から出ていた。

「『肯定と否定を操る程度の能力』……『畏れを抱かせる程度の能力』……って」

また 東方 か !!

「ハッ……!!?」

思わず心の中で叫んだ所為で集中力が切れてしまった。

この内のどつちかが閻魔様の言っていた輪廻から外れた理由だろ

う。て言うか、能力二つってありえるのか？宗一、取り敢えず電波でも良いからお前の見解を聞かせろ……って、そんな事はどうでも良い。今の問題は、結局狩りの方法が分から無かったと言う事だが……。

「まあ、いざとなれば木の実でも食うか」

と言う事で結論を出した。

「何とかなるぞ」

……良い言葉だ。

「寿命って、何なんだろうな……」

『んなもん、こっちが知りたいツスよ。何年生きてんスか？』

「……五十年？」

『大将、もしかして狼じゃなかったりしません？』

「俺が知りたいよ」

俺がこの森　　正確には山に来て早五十年、結構なんとかなるもんだと証明された。

この山、木は多くせに食べる木の実が異様に少ない。最初の方は我慢していたがすぐに飢えてしまい、近くに居た小鹿を、殺した。

初めて、自分の牙で。テレビでやっていた動物の狩りを思い出して、見よう見真似で、自らの牙で相手の首の皮を衝き破り、肉を断ち骨を砕いた。

正直、今でも得物を殺す感覚は苦手だ。肉も決して美味しいと思えない。それでも、今まで全て食ってきた、決して残さない様に。自己満足の感情論だったが、まあ、やらないよりはマシだと思っている。

その間、当然俺自身が狙われた事もあったが、それでも約五十年、生き抜いた。その内この森の主として扱われてきたが、それが大体十年前の話だ。

今、俺が住処としているのは頂上付近にある岩で出来た穴倉。因みに、あの時の川はこの穴倉から真っ直ぐ下った麓に存在している。穴倉で寝転んでいる俺の顔のすぐ側に居る奴に目を向けた。

『？ どうかしたんすか大将』

「……………いや、何でもない」

俺の視線に気付き、こっちに顔を向けてくるリス　　名をクルミ。名前は女の物だが、性別はオス（確めた訳じゃないが、多分そうだろう）。何故か俺の言葉を理解し、俺の事を大将と呼ぶ訳の分からん奴だ。ついでに、ずっと犬だと思っていた俺に狼だと教えただ奴でもある。

こいつと会ったのは数ヶ月前、十数年の研究により使用法が判明した『畏れを抱かせる程度の能力』を使い、狩りをしていると、何故か俺に『俺を大将の僕しもへにしてくれ！！』と言ってきた。本当に訳が分からん。

『そう言えば、大将。例の『肯定と否定を操る程度の能力』ってのは使えたんすか？』

「……………まだ」

『大将にも出来ない事つてあるんすねえ……』

しみじみと言うクルミ。お前は俺を何だと思っているんだ。ただのしがない狼に何を期待してるんだよ、お前は。

話は変わるが、さつきも言った通り、『畏れを抱かせる程度の能力』の方はある程度分かっている。使い方は簡単、相手に敵意を持ってばいい。それだけで、自分より格下の相手は俺を恐怖し、畏れる。自分と同等か、それ以上の相手には真正面からは効かないが、隙を突いたり、一瞬でも恐怖を覚えさせれば、発動可能だ。能力による畏れは相手の身を縛り付け、例え逃げたとしてもその畏れはその身に刻まれ続ける。と言うか、最初から意識せずに使っていたらしいまあ、そうでもない限り、素人が最初から狩りに成功する訳が無いのだけど。『ぬら孫』の様な事が出来ないのは残念だが、狩りの時には大助かり。ビバ能力。

それに対し、『肯定と否定を操る程度の能力』は全く分からん。効果も、使用方法も未だに研究中だ。

そして、最近気にしているのが

『狼つて、五十年も生きるっけ？』

と言う事だ。

さつきのクルミとの会話もそこに繋がる。

運動機能の低下も、感覚の衰えも全く無い。つまり、まだまだ老いていないのだ。五十年でまだ老いない？そんな狼いるかッ！と言う話である。

俺ですら、最近まで自分が狼である事を知らなかったのだ。なんとも言い様が無い、と言う事で考えても仕方ない事は保留。

「……腹減ったな」

考え事を終えると、空腹を感じたためのっそりと起き上がり、身を震わせる。

『お供するツスよ、大将』

そう言いながら俺の首元の上ってくるクルミ。

僕しもへって言うなら俺の上に乗るのはおかしくないか？ と、毎回思っているのだが、まあ、別に良いか、とも毎回思い、放っている。

『今日は何が出るツスかね』

「それこそ運だろ。得物を選び好みなんて出来ないんだから」

『まあ、そうツスけどね』

「後、俺が狩りしてる間にお前も餌探してこい」

『さり気なく俺の心配までしてくれるんスね！そこに痺れる憧れるう！！』

お前、本当にリスか？ 俺と同じ境遇の人間だと言われても信じるぞ。

『でも大丈夫ツス。木の実は大將の巣に貯蔵してるツスから』

「いつの間に……」

『リス舐めんなツス』

と、こんな会話を最高速で山を駆け下りながらしているのだが、そんな中で平然と俺の背に乗っていられるコイツは本当に何なんだろう、と思わなくもない。

既に山から出て林に入っている。近くにいる狙い目の獲物の群れは……三つか。

『相変わらず嗅覚おかしいツスよね』

「これぐらいは普通だろ」

『普通の狼は嗅覚だけで林の中の全てを把握しないツス』

そんなもんじゃないか？ と首を傾げるも、俺以外の狼になんて会った事が無いし、便利である事は変わりないから問題ないと自己完結し、近くにいた三つの群れの内の一つへと足を向ける。

『今日は何にしたんスか？』

「多分子鹿だな。まあ、そこまで飢えてる訳じゃないし、小さくていい」

『おいだけで判断できるのは普通なんスかね……』

「知らん。取り敢えず気配隠せ」

『了解ツス』

コイツ、何だかんだ言つてハイスペックだから困る。俺の見よう見真似の癖に野生動物すら騙す程気配の隠し方が上手くなっている。俺も出来る様になるまで半年以上掛かったのに……。
手頃な木の下で立ち止まり。

「舌嚙むなよ」

思……い……っ……切……り……跳……ぶ……。

そして木の半ばにある枝に着地、また別の木の枝に跳び移り、着地すればまた別の木の枝へ、と繰り返して、獲物の狙いやすい場所を探す。

「ここら辺かな……?」

ちょうど真下に鹿の群が集まっている場所を見つけたので、そこで止まり様子を窺う。

『……やっぱり大将普通じゃないツスよ。普通の狼は木と木の間を飛び回らないツス』

……クルミ、俺も少しおかしいと思ってるから言っな。

「取り敢えず、ゴー!!」

乗っている木の枝を蹴り、地面に 狙っている子鹿に弾丸の様に跳ぶ。このやり方は意識して『畏れを抱かせる程度の能力』を使い出す前に始めた。そもそも、従来の方法じゃ成功率が低いのだ。鹿などの草食獣の視界はほぼ全方向。そのため、肉食獣は基本的に群で、更に弱い獲物を狙うのだが、生憎と俺は一人だ。つまり、狩りが上手くいかない。そこで、俺は体のスペックをフルに使い、木の上から襲う奇襲作戦を考え、実行。

それ程のスペックがあれば普通に追い掛けても捕まえられるんじゃないかと思うだろう。確かに、追い付けはする。だが、追い付けても急激な方向転換される上に、そもそもハンドェがあり、捕まえられない。今でも、余程切羽詰まった状況じゃない限り、これを使っている。

グシャリッ。

「ん……？」

仕留めた小鹿を啜えて、ゆっくりと歩いていると、珍しい、狼になつて初めて嗅いだにおいに気づいた。

『どうしたんスカ大将。小鹿じゃ足りないって今頃気付いたんスカ？ 大体、大将でかいんだからそれぐらいじゃ』

まあ、確かに俺はデカイ。人なら二、三人は乗せて走れるんじゃないかと思うが、自分の食う量ぐらいはしつかり分かつている。まあ、アレだ。分からない奴は『も のけ姫』のモロ 君の真つ黒になつた奴を想像すれば良い。尻尾は一本だがな……って、話がずれたな。これもクルミの所為だ。

『痛い、痛いツスよ！！ ちょ、大将の尻尾は下手すりゃ木も切り倒すんスカから、そんなもんで俺を突かないで！！』

腹いせになんか最近妙に長くなった、俺の全長と同じぐらいの尻尾でクルミを突きまくり、ある程度満足したので本当の用件を話す。

「……妙なもんを見つけた」

『へ？ みよんなもん、ツスカ？』

つつこまない。つつこまないぞ、俺は。

「まあ、行けば分かるか……」

『Let's goッス!!』

……もう無理だ。何で英語知ってんだよ!! 何で発音がネイティブなんだよ!! お前ホントは俺と同じ転生者だろ!! ……いや、違うのは分かっているんだけどな。取り敢えず、つつこんで気が済んだので、おいのする方へ向おう。

はぁ……、何でこんなに疲れるんだろう。

狼と人外達（前書き）

取り敢えず、人の形になれる所までは連続投稿したい目だまです。
今回は前よりも出番が増えるあの人の登場。

狼と人外達

青天の霹靂

確か、酷く驚くとか、そんな感じの意味だったと思う。いきなり何を言い出すんだと思うだろうが、今の俺を表

す言葉が正しくそんな感じだ。

『何なんスカねー、これ』

地面に落ちているモノの周りをクルミが突っつきながらうるちよろしているが、そんな事はどうでもいい。問題は落ちているモノだ。特徴的な自在に物を掴むための手、退化し短くなった爪、体を被^{おお}っているのは毛ではなく白く柔らかそうな布、頭部からのみ生えている長い毛、僅かに見える肌は日に当たってないのではないかと思う程白い。それはつまり。

「……人間だ」

『ニンゲン……ッスか？』

そう、落ちている……と言つか、倒れているのは人なのだ。しかも子供。身長は推定だが、百三十程度だろう。うつ伏せに倒れている所為で顔は分からないが、地面に広がっている金髪（日本人じゃねえ）の長さ。足元ぐらいまで。から、十中八九、女の子。上質な白い布を重ねて形を整えた様な服（イメージとしては古代ヨーロッパ）に靴は皮製のサンダル。一体何処の時代から飛び出して来たんだろうか、この子は……。

そもそも、どうやってここまで来たんだ、この子。俺はあの山を中心としたかなり広い範囲を縄張りとしている。それこそ、最初は人がいないものかと探索を繰り返した物だ。それでも、人は見つけられなかった。だが、この子はここにいる。服やサンダルに特に汚

れは無い。この位置から俺の縄張りの外に出るまで、普通の人間の速さなら半日は掛かるだろう。そんな距離を、こんな子供が歩いて、靴にも服にも汚れが無い……余りにも不自然すぎるな。

「取り敢えず、連れて帰るか」

一度、口の小鹿を放し、今度は地面に倒れている子の服の襟の辺りを啜え、軽く放って背中に乗せ、再び小鹿を啜える。

『連れて帰るって……喰うんスか？』

「喰うかアホ」

そこまで腹が減ってないから小鹿を捕らえたんだろうが。目を覚まして、話が聞ければ御の字。そもそも、言葉が通じるかどうかの問題だが……。

「まあ、何とかなるだろ」

いざとなれば後を付けて人里探す事も出来るし、と楽観的にも程がある事を考えながら、住処へ歩き出した俺が、言葉とかその思考が根本的に意味を為さない事が分かったのは、この子が起きてからの事だった。

結局、その子が目を覚ましたのは、俺が先程捕らえた小鹿をむしやむしやとよく考えたらこれはこれでかなりのスプラッタなんじゃないかと、ここ五十年で結構な頻度で思う、ある意味いつも通りの食事を終え、一眠り（NEETさいこー）した後の、もうすぐ日が暮れると言つ逢魔ヶ時の事だった。

目を覚ました少女（幼女？）は、上半身を起こし、無表情に俺の住処を寝起き特有のボーっとした様子で見渡していたが、寝そべっている俺と俺の上で未だに眠っているクルミを見て、コテンと首を傾げた。

「……………誰？」

少女は起きた時と同じく無表情でそう尋ねてくるが……………どうしたものか。

少なくとも色合いとサイズ以外は比較的肉食獣おおかみな俺に普通に声を掛ける事とか、肌は白いし、髪は金髪だし、今初めて気づいたけど目も碧みどりの見た目完全な外人さんが日本語を話した事は、まあ置いておいても良い。

こちらとしても五十年間まともな話し相手が存在せず、最近は何がいたとは言え、話に飢えていると言えば飢えている。飢えているのだが、その、何と言つか……………名前かあ……………名前ねえ……………。

俺もほんの五十年前までは人間だったのだ。当然、名前ぐらいは持っている。だが、何と言つか、その時の名前は余り使いたくないと言つか、字が女っぽい所為で嫌いと言つか……………。

クルミの時はどうしたかって？あいつは最初っから俺の事は大将って呼んでたから名乗ってないんだよ。つまり、狼モドキになつてから初めての名乗りである。……………本当にどうしよう。

「いや、なんだ。俺は兎も角、そう言う君は誰なんだ？ 人……………じゃないけど、名前を尋ねる時は自分からだつて最近言われたんだぜ

「？」

結局、どうするか決まらずに苦し紛れにお茶を濁す俺。

まともに言葉が話せる奴が殆ど存在しない中で誰に言われたんだとか言う突っ込みは無した。と言うか、五十年前の事なのにどこぞの最強の悪魔憑きのパクリの様な言葉がすらすらと出てくる俺はどうなんだろう。ああ、アレって次で最終巻だったのに読み損ねたんだよなあ……いや、それよりもゲームの方が先だったか。どっちにしろ、もう今じゃ、どちらも手にする事が無い物だ。

だが、そうは分かってはいるが、五十年経った今でも諦めきれない訳で……って、今はそんな事はどうでも良い。

壮大に獣道にぶれまくった思考をブツ千切って寝そべったまま、少女に目を向ける。

「……ラファ」

「らふあ？」

「ラファ」

らふあ、ねえ。……ラファ、だよな？ カタカナ、と言う事は欧米系統のはず。ますます日本語を話す事に違和感を感じるな。いや、カタカナ？ ……おお、その手があったか。

「じゃあ、取り敢えず俺の事はアヤシとでも呼んでくれ」

「ん……」

俺がそう言うのと僅かに顎を引き、頷くラファ。因みに、俺の人間の時の名前は緋月^{ひつき}絢^{あやし}詩と言う。字だけ見た奴らは揃って女だと勘違いしやがったよ。

取り敢えず、読みは兎も角、漢字は絶対に変える。意地でも。と、俺の決意表明は置いといて、それよりもまずはラファの事だ。

「幾つか聞かせてもらうが、お前、何であそこにいた」
「あそこ……？」

コイツ、もしかして自分がいた場所が分かってないのか？

「ここがどこだか、分かってるか？」

俺がそう言つと、ラファは目を覚ました時の様に住処の中をキョロキョロと見渡し始め、

「……どっ？」

相も変わらずの無表情で、首を傾げる。

「……まずはそこから説明が必要か」

そう呟いて、俺は溜め息を吐いた。

— 先ず、俺がラファを見付けた時の事をザックリと説明し、俺の疑問に答えさせていたのだが

Q・竹林にいたのは何故？

「家出した」

Q・どうして？

「喧嘩した」

Q・気絶してたのは？

「滑った」

Q・何処から？

「ん（指で空を指す）」

この通り話になりません。

何この子、電波さん？ 空でも飛んでたのか？ いや、それでも滑ったって言う表現はおかしくないか？

その他にも幾つか質問したのだが、無表情がデフォだから何考えているのが全く分からない上に、例に漏れず全て回答は一言。せめてもの救いは質問に素直に答えてくれる事ぐらいだ。それでも、結局殆ど分からなかったと言うのは、変わらないんだけどな。

そして、現在

「スー……スー……」

「どうしてこうなった……」

日もどっぴりと沈み、完全に夜になり、ラファが俺に寄り掛かって寝てしまった。しかも、掛け布団代わりに俺の尻尾を離さない。何故だ、何故ここまで懐かれた。アレか？ 取り敢えず食える物って事で木の実とかを探して来たからか？ それとも沈黙を嫌がって、色々と人間の頃の 宗一の修羅場とかその他の話をしたからか？

『両方だと思っツス』

……全く否定できない。いや、する必要もないんだけど。別に懐かれて困る事も無いんだし。だが、このままと言っツス訳にも行かないだろう。狼おれが子供を育てるとか、それ何て狼少年おれって言っツス話である。今の段階でも十分に可愛い（俺はロリコンじゃないぞ）将来有望な子を、栄養失調で死なせる訳にもいかんし、それに、その内家族が恋しくなって自分から帰るだろうしな……。

それで、だ。

「おい、チートリス。ラファの事だが、どう思っツス」

俺の首の上に乗っかっているクルミに声を掛ける。

『チートリスって……』

うるせえ。お前なら俺が気付かなかった事でも気付くかと思っツス期待してるんだ。さっさと答える。

『そっツスねえ……。大将の質問への答え、アレは嘘を吐いてないと思っツス』

「……ふむ」

クルミがそっツス言うのなら、まず間違いなく嘘は吐いてないだろう。こいつの勘や洞察力って言っツスのは全く持ってバカにならない。何度も言っツすが、こいつはこいつでおかしい。

だが、だとすれば、少なくともラファは本気で空から落ちて来たと言っツス事になる。それも足を滑らせて……。クルミの事は信賴しているが、だからと言っツスそんな荒唐無稽な話をポンポン信じられる程、思考が柔軟な訳でもない。まあ、俺の存在の方がよっぽど荒唐

無稽と言えない事も無いが、少なくとも、俺は実際に目で見たもの以外は信じる事は出来ない性質だ。

『それと……』

考えを纏めていると、クルミが何か言い掛けるが、すぐに口を噤む。その後の言葉が続かないのは、言うべきか迷っている、と言うよりも、言葉を選んでいいる、と言う感じだろう。実際に、クルミが再び口を開くまで、そう時間は掛からなかった。

『何となく、俺や大将に近い様な……正反対な気が……』
「……………」

狼にも表情と言う物があるならば、今の俺は酷く難しい顔をしているだろう。

俺と似ている、と言うのは分からなくも無い。五十年で獣の生き方が染み付いてはいるが俺だって元は人間だ。だが、クルミとも似ていて、更には正反対？正直訳が分からない。と言うか矛盾してるだろうが。

『でも、俺達と同じで普通の生き物っぽくないのは確かッス』
「普通の生き物っぽくない、か……」

ラファは俺の体を枕代わりにしてスヤスヤと穏やかな寝息を立てている。

やっぱり、色々と事情があったりするんだらうか。まあ、その事情に俺自身から進んで関わる事はないし、嫌がる事をするつもりは尚の事ない。ただ、こんな小さな子でも、それなりの事情があったりするんだと思うと、何とも言い難い気分になるだけで

って、一寸待て。

「おい。今の言い方だと俺とお前もまともじゃない事になるぞ」

『気付いてなかったんすか？』

「えっ」

『えっ』

「何それ怖い」

どうやら、俺は狼ですらないらしい。俺の正体はいずこへ……。

詳しく聞けば、俺自身は、クルミと初めて会った時から動物とも違う何かであり、クルミもここ数ヶ月共に行動した結果、質の違いはあるが俺と同種に為ったらしい。で、そんな俺らとラファは似ているが、正反対の存在の様な気がする、と。なるほどなるほど。

『何か分かったんすか？』

「分からん」

『……………』

おいこら、まず自分の正体も分かってないのにラファの事が分かる訳ないだろ。だからそのジトツとした視線を引つ込めろ。

まあ、実際の所、別に自分の正体が何かなんて言うのは、どうでもよかつたりする。別に正体が分かったからと言って、今までと生活が変わる訳じゃないし。変化があるとすれば、ラファの存在だろうけど、まあ、それも二、三日で元に戻るだろう。そうなればほら、今までの五十年と何ら変わりなく天寿を全うできるだろうさ。

取り敢えずではあるが、今回の事を結論付けて、俺は目を閉じた。

「そう思っていた時期が俺にもありました……」
「……どうかした？」

今日も今日とて山の中を跳び回っている途中で漏らした咳きが聞こえてしまったのか、首にしがみ付いているラファが首を傾げているのを、適当に何でもないと誤魔化しておく。実際に大した事じゃないし、人に話す様な事でもないし。ラファも、そんな俺の雰囲気を感じたのか、それ以上は何も言っただけでこなかった。

さて、ラファを拾ったあの日から太陽が昇って沈んでを繰り返す事三十回、未だにラファは俺達と共にいた。……と言うよりも、むしろ前よりも懐かれた？

「ラファ、何度も言うツスけどね、大将の上は俺の特等席なんス！
！そこを退くツス！！」

「いや」

「大体、何でラファが狩りに付いて来るんスか！！役に立たないのにつ！！！」

「役に立ってないのはクルミも一緒」

「ラファ、お前は今言っただけなら事言っただツス……！！！」

直接見えないが、取り敢えず二人が険悪な雰囲気真っ只中なのは分かる。と言うか、俺の上で喧嘩するな。首にしがみ付いてる所為で声が五月蠅いんだよ。クルミ、おまえじゃラファには絶対に勝てないから止めとけ。燃やされるぞ。

「それでも引けない戦いが、ここにはあるツス……！！！」

格好良く言ってもただの背中ポジション取りじゃねーか。そして、ラファ。頼むから戦闘態勢に入らないでくれ。力を集中させるなそこでやられると俺にまで被害がくるんだよおい！！
そんな俺の願いは届かず。
ドンツ、と言う爆音と共に、汚い花火が、山に咲いた。

「テメエら、いい加減にしろよ……？」

所変わっていつもの住処。だが、そこにいつもの平穩はない。濃厚にして純正の怒気殺気狂気畏れ。それら全てが、たった一人と一匹に向けられていた。直接向けられていないにも関わらず、山の動物どころかそれら周囲の竹林や森に住むものすら逃げ出している。そんなモノを直接向けられている彼等の心中は推して知るべし。クルミはカタカタと震え、ラファもいつもの無表情ながら、顔にはダラダラと冷や汗を掻いている。

「なあ……」

『「（ビクウツー！）」「』

いつもより低い、明らかに怒気をはらんだ声に過剰に反応する。

「今まで散々言ってきたよなあ？ 仲良くしろって。なのに何で喧嘩すんのお前ら」

言葉を吐き出す度に場の空気が更に重くなっていく。嫌な緊張感フレッシェンが巢穴に満ちていく。

「特にラファ。お前のアレは使う場所を考えろって言ったよなあ。

今回は怪我ですんだから良いものの、死んじまったら俺でもどうしようもねえんだぞ。猛省しろ」

「……ごめんなさい」

「すいませんツス……」

そう言っただけで頭を下げる二人を見て、感情の放出を解いた。まあ、二人ともしっかり反省しているみたいだし、もういいだろう。

「ん……」

するとすぐにラファが首にしがみついて顔を埋めて来る。怒られたすぐ後に、相手の感情を読み取ってそれが出来るなら、お前は大物になるだろうよ。

「て言うか、大将、『恐れ』まで使ったツスよね……」

そう呟くクルミの方は未だに少し顔色が悪い様に見える。いや、リスだから顔色なんて分からないんだけども。

「当たり前だ。それぐらいしなきゃ分からんだろうが」

「やり過ぎツスよ!!」

「もう一遍いってみるか？」

「すんませんでしたっ!!」

分かればいい。クルミがボソッと、鬼畜だ、とか呟いてたが、知

ったこつぢゃない。

それよりも、ラファの事や、何故二人（？）があれ程の爆発に巻き込まれて、傷一つ無いのか、について説明しよう。

まず、どうしてラファに爆発あんなことが出来たか、だが、俺達は勿論、ラファ本人にも具体的な原理は何一つ分かってない。ただ、感覚的に使っているが、ずっと昔から当然の様に使えたそうさ。

俺とクルミがその事実を知ったのは出会った次の日の事。ラファの食事に、と魚を取って来たはいい物の、幾らなんでも生のまま食わせる訳にもいかん、と悩んでいた時、もうやけくそでラファに「火、持っていないか？」と聞いたのだが、ラファはただ「ん」と頷き、集めておいた小枝の中に手を突っ込んで、それを燃やしたのだ。もう呆然としたね。クルミの奴は初めて見る火にはしゃいでいたが（本当に獣か？）……。

この時、クルミが言った様にラファが人外であると判明したのだ。因みに、火だけでなく、それこそ死者甦生以外の殆どが出来るらしい。

で、もう一つ。ならば、どこまで出来るか試してみよう、と思いつき、やらせてみたのだが……見事にぶち壊してくれたよ、巣穴をあれにはさすがのクルミもポカンとした。だが、こつちの話はこれからだ。その時、俺はあまりの状況に現実から目を背けようと、一言呟いた。

『……いや、ねーよ』

その瞬間、崩れた巣穴が
崩れな筈の巣穴が、元の姿で、
そこにあつた。

出来る可能性があるとするればラファだが、そのラファがいつもの無表情を崩し驚愕していたから違う。クルミは初めから論外。ならば俺か？と考えた所で、ある単語が頭に思い浮ぶ。

『肯定と否定を操る程度の能力』

この時、俺は初めてこの能力を使った。

その後の実験によって明らかになった能力の本質は『世界の書き換え』。『肯定』により創り、『否定』により抹消する。有無を問わず、俺の是非一つで世界を変える事が出来る能力。『魂へ不干涉』と言う制限もあるが、十分だろう。

つまり、爆発したのに誰にも傷がないのは、俺がその事実を『否定』したから。

まあ、死んだら魂が無くなる所為で能力が発動しないから、今回はきっちり説教させてもらったのだが。

「で、そろそろ出てこないか？」

巢穴の入り口の方にらみ付ける様な視線を送る。

クルミやラファは気付いてない様だが、舐めてもらっちゃ困る。

この山は俺の庭だ。なわばり異物のおいが混じってりゃ、気付くに決まってるだろ。

「へえ、いつから気付いとった？」

そう言いながら、一人の男が巢穴に入ってきた。

その男は、身長は百八十半ばで体の線は細く、ラファと同じく古代西洋から来たかのような様な服装に革のサンダル、瞳は混じりっ気のない青、髪は鮮やかな短めの金髪をオールバック風に軽く上げている。そして何より、一番目を引くのは、絶えず今でも軽い笑みを浮かべているその顔である。

イケメン。そう、イケメンである。モテない男の敵、人生勝ち組、差別の象徴。イケメンである。

「ラファが爆発起こした辺りだよ」

吐き捨てる様に答える俺は相手がイケメンと言う時点で敵意丸出しだ。イケメンなんぞ滅んでしまえばいいのだ。

「何や、初めから気付いとったんかいな。随分鋭いんやねえ」

「隠れるつもりなんか無かった癖に、よく言う」

確かに、隠れてはいたが、それはあくまで姿だけだ。視線も気配も隠す気なぞ微塵も感じなかった。ただ単に舐められていたのか、それとも何か理由があったのか……服装や髪からして、十中八九ラファの関係者だろうが、それはイケメンである事を別にしても警戒を解く理由にはならない。今問題なのはラファとどう言う関係か、だ。

と言うか、ラファと言い、この腐れイケメンと言い、何で外人の癖に日本語ぺらぺらなんだよ。しかもコイツに至っては似非関西弁だぞ？ 畜生、どうせその胡散臭い上に似合っていない喋り方もイケメンだからって理由で許されるんだろ？ 死ねよ、ホントに。

「で、何の用だ」

「いやな、その子を連れ戻しに来たんやけど……」

その子 確かにラファの事だろう。コイツとどう言う関係かは知らないし、知らなくていいならそれでいい。それこそ、ラファに一言聞けば済む話だ。

だが、たったそれだけの事が出来なかった。

アイツがそこで言葉を切った瞬間、全神経全感覚を目の前の存在

に集中させる。いや、否応なしにさせられる。脳が、俺の五十年で培ってきた洞察力が、野生の勘が、その全てが警報を鳴らす。全身の毛が逆立つのを感じる。注意信号^{イェロー}通り越して危険信号^{レッド}だ。

「キミ、随分面白そうやねえ」

俺を指さしてそう言うか否かと言う時、俺の意志に関係なく既に体は動き出していた。全身の筋肉を使った停止^{ゼロ}から最高速^{トップ}への瞬間的な加速。普通なら反応すら出来ない筈の、必殺の一撃で無防備に晒された首に喰らい付く。

グシャリと。

肉を砕く音が響いた。

狼と人外達（後書き）

えー、急展開過ぎてワロタ、とかは言われるかもしれないとビクビクの目だまです。と言うか、書き直してるけど、前より少しは向上してるのか？もういつその事、一度削除した方が良かったのかな？と、思わなくもないですが、まあ、それはそう言う意見があった時に、と言う事で。

誤字脱字報告や感想があれば、下さい。特に感想は作者が狂喜乱舞します。批判は心が折れない程度にお願いします。

ではまた次話で。

狼と『神』と新天地（前書き）

この物語はフィクションであり、作者の妄想から滲み出た物です。ある事柄へ明らかにイメージを壊す物が描かれていますが、事実無根の妄想ですので、笑って済ませてください。お願いします。

狼と『神』と新天地

ただし、噛み砕いたのは、相手の左腕だった。

「ッ!？」

あり得ない。今の、俺に出せる最高速だぞ？それに反応する所か、きつちり防御しやがった。どんな化け物だコイツは。

実の所、この巣穴の入り口はそこまで広くない。俺が入れる程度だ。つまり、最初から回避は不可能。少しでも避け様とすれば間違い無く殺せていた。さっき、俺を指さしたのが右腕だったのを考えると、コイツの利き腕は右。と言う事は、とっさに左腕を出したんじゃないくて、きつちり見てから反応したと言う事になる。奇襲を受けたにも関わらず、この状況でコイツはほぼ満点の対応をしゃがった。

「ハア　　ッ!！」

そこまで思考を巡らせ、左腕に喰らい付いたまま、さらに地を蹴る。攻撃自体は防げて、そもそもその大きさが違うのだ。勢いまでは殺せない。

「うおっ!？」

結果、俺に押される様な形で山を強制的に下ろされる。途中にある木々をへし折りながら麓まで一直線。止めにその勢いそのまま相手を投げ飛ばす様に体ごと振るい、左腕を千切る。投げ出された相手は、麓の森の木を数本折った所で止まったらしく、砂埃が立ち込めている。

「……クッ」

砂埃が晴れていく。そこに、ソイツは立っていた。二の腕から先が無くなり、血をダラダラと流してはいるが、最初と同じ様に平然と、笑みを浮かべて立っていた。いや、その顔に浮かんでいるのはむしろ最初よりもずっと愉しそうな笑みだ。

「クックックッ……アーハッハッハッハッ！　ええで！！　最高や

！！！」

「……………」

片腕を失くしたにも拘らず突如笑い出したソイツを見て、俺は何も言えなかった。と言うか、ぶつちやけ引いていた。ドン引きである。だってアイツの左腕、見事に失くなってているんだぞ？　傷口の周りの服は真っ赤に染まってるし、傷口からは白い骨が見えてるんだぞ？　そんな状況であんな風に笑っている奴がいた普通に引くだる。

一頻り笑って落ち着いたのか、フウ、と静かに息を吐き、そして、急に空気が重くなった。

「　　ッ！？」

何だよ、これ。俺がさっきまで放っていたアレとは比べ物にならない。まるで深海の中にいるみたいだ。重圧に潰されそうになる。周りの木々までが悲鳴を上げるかの様に軋む。

だが、瞬時に自らに掛かる重圧を否定し、いつもの状態まで戻す。筋肉も縮まってない。視界も良好。思考も平常。大丈夫だ。まだいける。

「その姿になつてたつた五十年程度でよくもまあ、ここまで容赦無く殺そうと出来るもんやねえ。ほんま感心するわ」

「テメエ相手に余裕が持てるなんざ思つてねーよ。俺は分を弁える性質なんだ」

「ええねえ、その態度。ますます気に入つた……わッ!!」

そう言い切ると同時に一気に距離を詰めてくる。少なくとも五メートルは離れていた筈なのに、その距離を一瞬で潰された。おまけに相手からはラファが使うのと同じ様な力を感じる。だが、密度も量もラファとは桁違い。この山一帯消し飛ぶんじゃないか？

「チイツ!!」

真正面から右拳が振り抜かれる。フェイントも何も無い真つ正直で力任せの一撃。

思考は刹那。俺はその一撃を横に跳んで回避する。再び距離を取つた時に、その判断が正解だつた事を理解した。

「げっ……」

抉れてやがる。何が？地面がだよ。拳の軌道に合わせて振り抜かれた位置から見事に一直線に深い溝が出来、その延長線上にあつた木など言うに及ばず見事に粉碎されてやがる。……これ、掠るだけでもアウトじゃないか？

拳を振り抜いた状態で止まっていたイケメンがゆっくりとこつちに体を向ける。

その顔は相変わらず笑つたままだが、何と云うか、笑顔の質が変わつた気がする。今までののが大人が浮かべる微笑の様な感じだとすると、今は新しい玩具を見つけた子供の様な無邪気な、だが、愉悦に染まつた様な笑みだ。それを踏まえた上での結論。

バトルジャンキー
(こいつ、戦闘狂かよ……!!)

「今のをかわすか……なら、次は
「そこまでです」

イケメンが喋っている最中に凜とした、芯の強そうな声が割り込む。

それと同時にどう言う理屈か、俺にすら見えない速さ、と言うよりも瞬間移動でもしたかの様に、数十にも及ぼうかと言う外人が手に剣や槍を持ってイケメンと俺を取り囲む。

……えっと、これ、今どういう状況？

「主、それ以上はここら一帯が消し飛びます。やめて下さい」

俺が今日は千客万来だなあ、と状況に付いて行けず現実逃避していると、二人の女性と一人の男が人垣の中から一歩前に出てくる。

一人は銀髪をポニーテールにした、吊り目で気の強そうな美人。背は女性ではそれなりに高く、どこか、とは言わないが一部の所為でスラリとしている様に見える。さっき、あのイケメンを止めてくれたのは彼女の様だ。

「いや、せやかてこんな面ろそうな相手やったら全力でやらな……」

止めてくれ。一撃で死なない限りは『否定』で治せるが、お前の場合は一撃で消滅させられそうなんだよ。と言うか、本当に面白そうってだけで俺と戦ったのか。真正の戦闘狂じゃねーか。

「ダメですよ。あるじの後片付けは私達の仕事なんですからね？」

さっき前に出て来た内のもう一人の女性の方が口を挟む。

赤味が掛かった髪を肩に掛かる程度で切り揃えており、一目見ただけでどこかのんびりとした雰囲気を感じ取れる。さっきの女性とは色んな意味で正反対だ。どこが、とは言わないが。と言うか、俺って結構余裕があるんだな。こんなしょうもない事考えられるってそれにしても、この人の言葉に俺らを困んでいる奴らが全員頷いているんだが……アイツどれだけ暴れたんだよ。

「と言う訳で、あるじには私とガブちゃんからのお説教ですよ？」

そう言う横でガブちゃんと呼ばれた女性が頷いている。それを見て見る間に顔が青褪めていくイケメン。

どんな説教かは知らないが、出来るだけきっちりやっておいて欲しい。もう二度と俺に近付かない程度に。

「フツ、ボクが大人しく拷問せつきょうを受けると思ったら大間違い

「我、汝の動きを禁ずる事を告げる」

イケメンが逃げようと身を翻すが、その動きはガブちゃんさんの一言によって止められた。と言うか、今拷問せつきょうって書いて説教せきごうって読まなかったか？……まあ、いいか。既に経験ありそうだし、大丈夫だろう。ほら、左腕もいつの間にか治ってるんだよ、おい。 何で治って

「さあ、行きますよ。あ、皆さんもお疲れ様でした」

「ウリ、事情の説明はよろしくね」

そう言うって、動けなくなっていたイケメンにどこからか取り出した鎖

で縛り上げ、余った鎖の端を掴み、颯爽とにこやかに飛び去って行った。……マジかよ。人が飛んだぞ？ どう言う理屈で飛んでるんだよ。重力仕事しろよ。しかも、いつの間にか周りの奴らも消えている。本当にどうなってるんだ……。

そして、状況にも場所的にも取り残されている俺と、俺に説明してくれるらしいウリと呼ばれた茶髪の青年。身長は百七十後半つて所、目付きが若干悪いが、顔の作り自体は良いからワイルドで済む程度だろう。

「おい。説明は後でさせるから、取り敢えずラファの奴連れて帰って良いか？」

若干、口調は荒いが、話分かる常識人と言った所であろうか。少なくとも、アイツみたいに関答無用で喧嘩売ってくると言う訳ではないらしい。と言うか、ウリくんの顔にも疲労の色が浮かんでいる。

「まあ、俺は説明してくれるなら文句は無いけど……」

そこまで言うと、前足に何か引つ張られる様な感覚を覚えた。

「ん」

そちらを見れば、いつの間に来ていたのか、肩にクルミを乗せたラファが俺のすぐ横にいた。しかも、俺の前足の毛を握り締めている。その様子を見て、ウリくんは嘆息し。

「あんたらも一緒でいいから」

と、そう付け足した。

「さて、ようこそ。ボクの城に」

イケメンの突然の襲撃から十数分後。例のイケメンがそう言った。その姿がさつきよりもボロボロになっているのは気のせいではないだろう。

それにしても、城、ねえ。周りを見渡せば、俺とクルミの正面には豪華な机と椅子、そしてそれに座るイケメン。そして、ここから少し離れた位置には規則正しく並んだビジネスデスクと、そこを慌しく動き回る外人っぽい人々。……どう見てもただのオフィスです。本当にありがとうございました。とは言っても、それは地上にある場合であって、雲の上にある場合はただの、と言う表現は正しくないが……少なくとも城ではないと思う。

「さて、そうやねえ。まずはぼっそりとボクの正体からいこか」

もう何でも良いから早くしてくれ。俺はもう疲れたんだ。今日一日でどれだけ精神すり減らしたと思ってるんだ。早く巣穴に帰って眠りたいんだよこっちは。

「狼君に分かる様に言えば『神』、『この星の意思』、『修正力』
つてどこかいな」

「……は？」

おい、今こいつは何と言った？ 『神』？ まだいいだろう。ただ確認は出来ていないが、この世界が能力名通りに東方の世界だとすれば、妖怪や魔法使いまでいるんだ。神様ぐらいいてもいいだろう。だが、他の二つは違う。明らかに桁がおかしい。それはこの星その物と言う事じゃないか。

「ああ、今君が思つとる通りで間違いないで？ ボクはそう言う存在や」

何てこつた。俺はそんなもとやりあつたのか……。いや、それなら尚の事、星の意思が似非関西弁つて言うのはどうなんだよ。……うん？ 待てよ、だとするとラファ達は

「おつ、気付いた？ まあ、さすがに『神』『ラファ』『ウリ』『ガブ』と並べられて分からん程君は鈍くあらへんもんなあ。ついでに、もう一人の愛称は『ミカ』やで？」

「マジかよ……」

今度こそ頭を抱えた。いや、あくまで狼だから出来ないけども、出来る事ならそうしたい気分だ。

これだけ名前並べられて気付かない奴はいないだろう。さっきから驚いてばかりの様な気もするが、それも仕方が無いだろう？ だって、あのどう見ても見た目子供以外の何者でもないラファが『大天使』だって言われたんだぞ？ と言うか、俄か知識しかなかったけど、色々と宗教観が崩れた。

「まあ、色々としヨック受け取る所悪いけど、もう一つお知らせがあるで？」

「……何だよ」

もうどうとでもなってしまう。今更何言われたって驚くものか。人間（？）、驚きすぎると平常心に戻る物だ。

「狼君とリス君の事やけどね、君達の正体は『妖怪』。『妖獣』『魑魅魍魎』なんて言い方もありやね」

「一寸待て」

確かに自分が妖怪だつて言うのには驚いたが、それは今更だし、思い当たる節もいくつかある。それに、俺自身が変わらなければ俺の正体を知る事に意味は無いと思う。だが、それ以上に気になる事がある。

「何故、お前がそんな事まで知っている」

俺の当然の疑問を、ソイツはニヤリと笑って答えた。

「言ったやろ？ 歴史の修正力や、と。アカシックレコードぐらいには繋がつとるんやで？」

……もう嫌だコイツ。色々と規格外すぎるだろう、本当に。

「で、や。実の所、君達をこのまま帰すわけにはいかんや」

神 何かイラつくので暫くはイケメンでいいだろう
がいきなりそんな事を言い出した。

「『は？』」

その言葉に、俺と今まで空気もいいたかったクルミの疑問の声

重なる。込められた思いはただ一つ。

何言ってるんだ、コイツ……？

「ああ、別に殺すとかやないから安心してええで？ 君達にはここで強くなってもらおうで。歴史がそう言う風になつとる」

つまり、これから先、俺達が強くなっていないと歴史的に不都合になる、と言う事だろう。そのために、俺達をここに残す、と。

「それに、ラファも懐いとるし、ボクは遊び相手が出る。君達は強うなれる、と。ほら、一石三鳥や。それに、正直皆ボクが出た時点で強化フラグやて分かつとつたやろうし」

一体何の話だ。が、確かに俺たちに不利益は無い。と言うか、選択肢が無い。拒否権とかないだろうし。つまり、俺達には頷くしかないのだ。これ、絶対脅しだよ。だってアイツ、しっかり拳握ってるんだもの……。

そして、俺達の天国じごくの生活が始まる事になった。

「で、何でお前喋らなかつたの？」

『『神』とか『妖怪』とか、正直何言ってるか分からなかつたッス

……』

「あー……」

さすがのチートリスも知らない言葉はどっしよっもないらしい。
この後きっちり説明しておいた。

狼と『神』と新天地（後書き）

主人公のキャラが大分変わった様に思う目だまです。でも殺伐とした世界を殆ど一人で五十年生きていけばこんな感じになると思うんだ。時代とシナリオが一寸変わる程度でここまで変わるんだねwww

誤字脱字や感想があればよろしくお願いします。例によって批判はお手柔らかに……。

狼と千年（前書き）

取り敢えず、連投はこれで最後です。

狼と千年

「『第一回 ドキドキ 神様と学ぼう 狼君の存在の非常識さ編』
〜！ イエ〜イ〜！ ドンドンパフパフ〜！」
「『……………』」

さて、神様（失笑）の襲撃プラス衝撃の事実の大暴露大会から一夜明けた今日。

どう言う訳か、昨晚こいつらの家と言う名を借りた宮殿モドキの豪華な部屋の一室を宛がわれ、朝起きたらいつの間にかラファが俺を枕にして寝ていた、というハプニングはあった物の、それ以外に特に問題も無く快適に過ごしたのだが、部屋を出た途端、神様（爆笑）に拉致され、気が付けば昨日と同じ場所に座らされており、昨日、豪華な椅子や机があった場所には、何故かマジックボードと水性のマジックペン（黒と青の二色）を持った神様（苦笑）がいた、と。うん、取り敢えず目の前の存在が諸悪の根源の様だ。噛み付けばいいのだろうか？ と言うか、さすがに星その物な奴に非常識とか言われたくない。

「何や、テンション低いでえ二人とも」

「朝っぱらから拉致られてテンション上がる奴が居たらそいつはおかしい」

「まだ眠いッス……………」

「さて、取り敢えず狼君には自分の事をしっかりと理解してもらわなあかん」

ばつさり無視しやがった。

そしてラファを含む大天使の四人が後ろの方に控えてるんだが、大天使って暇なのか？ しかもその内ラファとミカさんは舟漕いで

るぞ、おい。

「まず、力の説明からいこか。能力とはまた別の、種族によって変わる潜在的な力やね。種類としては四つ。まあ、今は月における連中合わせて三つしかあらへんけど」

そう言っつてホワイトボードにペンを走らせ、「霊力」「妖力」「神力」「魔力」の四つの単語を書き込んでいく。何故漢字なのかとかは今更特に突っ込む様な事でもないんだらう。だってこいつだし。

「字面で大体分かるやろうけど、それぞれ『人間』、『妖怪』、『神』、『魔法使い』が持つ力やね。尤も、『魔法使い』はまだおらへんから除外、つと」

更に四つの力の下に矢印を書き、対応する種族をホワイトボードに付け足すと、最後に『魔力』と『魔法使い』の上から纏めて×を記した。

そう言えば、『魔法使い』がまだいない、と言っ事はここは俺からすると過去と言っ事なんだろうか。可能性としては、人類が滅んだ後の世界も考えていたんだが……後で確認しておかないとな。

「普通、これらの力を複数持つのはありえへん。ありえへんのやけど、狼君はちやう。妖怪として生まれた事で『妖力』、更に人としての魂を持つとる所為で微かにやけど『霊力』まで持つとる」

微かにつて……役に立つのか、それ。

「今のままじゃ役に立たへんよ？ でも『霊力』は修行で、『妖力』は生きればそれだけで向上していく様になつとる。どうせ、ここに

おっいたらいつかは神格化するやろつし教えとくけど、『神力』は信仰を受ければ上がるで」

おい、どうせって何だ、どうせって。

「使い方の違いとかもつと細かいところもあるけど、まあそれは実際にやる時でええやる。さて、力についてある程度理解してもらえたところで、次は能力についてやね」

そこで一度、ホワイトボードに書かれている言葉をどこからか取り出したクリーナーで消すと、デフォルメした自分と吹き出しを書き、その中に能力と書き込んだかと思うと、デフォルメした絵が思いの外上手くいったのか、それを少しの間ニヤニヤしながら眺め、それからようやくこちらを向いた。……何やってんだよ。

「さて、リス君の能力も後で解説せなあかんけど、まずはこっちやね。『畏れを抱かせる程度の能力』」

「『肯定と否定を操る程度の能力』はいいのか？」

「うん？ ああ、そっちは後でひたすら練習するだけでええんよ。まだ甘いけど、使い方自体は間違っへんから」

……つまり『畏れを抱かせる程度の能力』は使い方が間違っっている、と？ ……あれ以上どう使えばいいんだよ。

『と言うか、俺が能力持ちって言うのはスルーツスか、大将……』

まあ、むしろ納得したな。お前は能力持ちじゃないとありえないだろ、逆に。じゃないとお前のハイスペックぶりは理解できない。

「さて、『畏れを抱かせる程度の能力』やけど、別に使い方が間違

つとる訳やない。ただ、能力の意味合いがちゃうんや。さて、こゝで問題やー！」

ビシツと音がするぐらいの勢いで俺達にペンを向け、相変わらずのイケメンスマイルで、その問題とやらを口にした。

「『妖怪』や『神』はどうやって生まれるでしょ〜かつ？」

えっと、普通に生まれるんじゃないか？ と言うか、その二つは同系列なのか。むしろ正反対の様な気がするが……。と、頭を働かせていたのだが、少しすると神様（馬）がブツブツ、とか言い出した。

「ハア〜イ、時間切れえ！！ 正解は、『人の想像』からやー！」

「『人の想像？』」

ちょっと予想外の答えに俺とクルミがそろって疑問の声を上げると、ホワイトボードに新たな書き込みをしていく。

「せや。『幽霊の正体見たり枯れ尾花』『鯛の頭も信者から』。『妖怪』は人の恐怖から、『神』は人の信仰から、それぞれ生み出される」

そう言って、まあ、ボクや狼君みたいな例外もあるんやけど、と付け足し、更に解説を続ける。

「そして、ここからが重要なんやけど、『妖怪』や『神』が死ぬ事は殆どあらへん。でも、消えることはある」

「……………」

それは、まあ分からない話でもない。

そもそも、東方はそうやって消え掛かった者達が集まった幻想脚が舞台だったはずだ。まあ、明言されてないし証拠もないが、この期に及んで、東方の世界じゃありませんでした、なんて展開はないだろう。そんな展開は誰も望んでないだろうし。

「『妖怪』や『神』言うんは、結局はよう分からんもんの総称や。それが人の想像で脚色され肉付けされていき、形を得る。せやけど、科学が発達してまうと怪異は現象に成り下がる。そして、忘れ去られ、幻想になる。そうならへんために、『妖怪』は人を恐怖させ、『神』は信仰を集めようとする。でも、キミの能力はそう言った連中に真つ向から喧嘩売っとる」

スツと目を細め、今までのどこかお茶らけた雰囲気消し真面目な表情で俺を見据える神。絶対的強者としての風格を身に纏うソイツは、確かに神と言うに相応しいだろう。

「キミはその能力を持つ限り、何もせずともどれだけ時代が進もうとも、決して幻想になる事はない。その時、『妖怪』であろうと『神』であろうと関係なく、そう言った存在としてあり続ける」

……確かに、それが本当ならば、いや、アカシックレコードとすら繋がっているコイツが嘘を吐く事はあっても間違える事はないだろう。

だとすると、『畏れを抱かせる程度の能力』は間違い無くとんでもない能力だ。たったワンアクション起こすだけで、『畏れ』を集め続ける。人外に限った話ではあるが、それはある意味、どんな能力よりも便利な能力じゃないか……？

「まっ、そーゆー事や。理解してるのとしてへんのじゃ、大分違う

からね。しつかり覚えとき」

そう言う神の雰囲気は、いつの間にかいつもの胡散臭い物に戻っていた。普段からあの状態でいたらしいのに。

「疲れるからイヤヤ」

そうかよ。後ろでガブちゃんさん残念そうに溜め息吐いてんぞ？

「じゃ、次はリス君の能力を発表しよか」

流してやるなよ。部下だろ？ 後もうホワイトボードある意味ないよな？使ってないし。

「だってイラスト消したくないんやもん！！」

「ダメだこいつ早く何とかしないと……」

もん、とか言ってるじゃねえよ。気持ち悪い。イケメンだからって何でも許されると思ってんじゃねえぞゴラァ！！

「まあ、それは置いといて、リス君の能力名は『あらゆるものの本質を理解する程度の能力』や。ぶつちゃけ特に説明いらへんやろ、これ」

そこでぶつちゃけてやるなよ。見ろ、クルミの奴自分の扱いの悪さに涙目になってんぞ？

「ん〜、そう言ってもなあ……あ、そや」

神が顎に手を当て考えていると、何か思い出したのか、指をパチンとならした。畜生、サマになってやがるな、これだからイケメンは……。まあ、人間だった頃はジミメンの代表だった俺が言っても、ただの僻みにしか聞こえない、と言うか純百パーセントの僻みだ。

『何かあるんスか！？』

急な叫ぶなよ。驚いたじゃねえか。と言うか、久々にしゃべったなお前。

『正直未だに大将達の会話には付いて行けないッス』

……うん、悪かった。後でちゃんと解説してやるから、取り敢えずその泣きそうな顔をどうにかしろ。

『……グスッ』

「うん、もうええかな？リス君の能力は今はまだ理解するだけやけど、妖力が使えるようになれば殆ど何でも出来るで？」

『え、そうなんスか？』

「細かい理屈もあるけど、取り敢えず本質が理解出来て、さらに活用出来る力があるんやったら出来ん訳がないやろ？」

「なるほど。本質が分かれば応用も利く、と」

そー言う事やね、と神は俺の言葉に頷く。

クルミは自分の能力がそれなりに凄いと分かったのか、嬉しそうに俺の横ではしゃいでいる。はしゃいでいるんだが

「でも今は使い物にならないよな」

「そやね」

『分かってるッスよそれぐらい！！』

俺の言葉に当社比三割り増しのぐらいの笑顔で頷く神。そして今度は普通に泣き始めるクルミ。……おおう、カオスだ。かく言う俺も、泣くクルミを見て若干顔がニヤけてる。どうも俺はいじめっ子体質の様だ。獣になって気付くとは……。

「さて、じゃ、こっからは修行の時間やで？まずは妖力と能力の使い方覚えて、あつ、狼君は霊力もやな。そっからはひたすら実践や」
「『え？』」

「狼君はボクとラファ、リス君はウリとミカが面倒見るから。スパルタで行くでえ？取り敢えずの目標は妖術マスターして人型になる事やな」

「『え？え、どう言う事？』」

神の奴は嬉々としてこれからの予定を楽しそうに話しているが、俺とクルミは状況に付いて行けず完全に混乱している。と言うか、コイツに教わるとか完全に死亡フラグじゃねえか。

「じゃ、二人ともそっちは任せたで？ 逝こか、狼君」

おい、止める引つ張るな！ 字が違うんだよ字が！！ 完全に死ぬよなあ、俺！！

「大丈夫やて。致命傷でもラファが治してくれるから。ラファ、あらゆるものを癒す程度の能力」って言うの持ってんねん」

な、と呼び掛ける神にラファが「ん」と頷く。

なるほど、その能力はラファエルっぽい……じゃなくて、それは

俺が死に掛けること前提だよな!?

「『死に掛ける事なくして成長はありえへん』バアイ『神』」

「違う、それは野菜人達だけで他の生き物は普通に死ぬから!」

普通はまずさつきみたいに座学から始めるもんだろ!? 何一つ分からないままやつても一緒だから!!

「手取り足取り教えられた事は身に付かへん!! 実践あるのみ!!」
「それは人斬り抜刀斎の流派だけだ!!」

そしてやっぱり字が違つんだよ!! 実践じゃなくて実践だろうが!!

「頑張つて」

「ラファ!?!」

あれ? ラファにまで見捨てられた? いや、多分だけど本人は普通に応援しようとしてるんだろう。だが、今の俺には死刑宣告以外の何者でもないと言つ……。

「じゃ、まずはボクが攻撃するからそれを避ける修行からや。能力使おうが、ボクに攻撃しようが何でもありや」

そう言つて宙に浮かび、両手を広げる。……おい、掌辺りから漏れだしてバチバチ言つてるそれは電流じゃないよな? 頼むから違つと言つてくれ!!

「時間制限は今から昼間までにしよか。それじゃ、よおい

」

現在の大凡の時刻、午前八時。昼までの時間、約四時間。

「＼(^0^)/」

「スタートツ!!」

「いや、ちよまつ……ギャアアアアアツ!!!!!!」

それから約四時間、辺り一帯に俺の断末魔の音が響き続けたとさ。

ここからはひたすらに修行の日々。正確に言えば、俺が生と死の境を行ったり来たりを繰り返す普通に考えれば天国にいるはずなのに地獄の日々。

神式ネタ修行によりボロボロにされ、瀕死になったらラファが回復させると言う死にたくても死ねない無間地獄。何度アカシックレコードをネタ探しに使うんじゃないかと声を大にしたことか。

しかも神の野郎、普通に戦ってもバカみたいに強いくせに、その上『あらゆることを為す程度の能力』とか言う正しく全能の能力を持ってやがった。欠点としては、自分にしか使えないとか、同時に複数の事は為せないとかあるにはあるが、切り替えにタイムラグはないし、発動に予備動作がない為欠点が欠点になっていない。アカシックレコードも足して全知全能とか誰が上手い事言えと……。

そんな神との修行風景の例を挙げると

。

胡坐を掻いている俺の足の間に座っているラファが心配そうに俺を見上げた。

「いや、よく今まで生きてたなって思ってた……」

そう答える俺の疲れきった表情を見て納得したのか、黙って頷きそのまま体重を俺に預けてきた。

まあ、もう分かっていると思うが、今の俺は人の形を取っている。出来る様になったのは、もう大分前の話だ。

普通、こう言う転生物では、イケメンに生まれ変わるのがテンプレなんだろうが、残念ながら俺にそんな幸運が訪れる訳も無く、人間として生きていた頃と殆ど変わらず、特徴の無い地味な顔立ちと身長は百七十行か行かないか程度で中背中肉の日本人として平均的な体格。昔と違うと言えば、髪が膝裏に届くぐらいに伸びた事と目付きが若干悪くなった事ぐらいだ。

髪は後で一つに縛っているが、邪魔だ。正直、切りたいんだが、ラファが切らせてくれない。何でも、綺麗だから勿体ないとか。男の髪が綺麗でもなあ……と、ここから出たら切ろうと隠れて決意していたりする。

まあ、目付きは地味な顔に特徴が出来た、とポジティブに考えているから気にはしていない。と言うか、主に修行の所為で気にする暇が無かった。

人の形を取れる様になった事を筆頭に、幾つか修行の成果と呼べる物が出来たから、修行も無駄ではなかったのかもしれないが、神のお蔭かと思うといまいち釈然としないものがある。

さっき言っていた「俺がもう死なない」と言うのも、修行によりある程度だが「肯定と否定を操る程度の能力」を使いこなせる様になり、俺の肉体から「死」と「老い」の概念を「否定」している。塵一つすら残さず消え去ったとしても、妖力さえあれば再生するの

は、主に神との修行で経験積みだ。

なんか、思い出して鬱になってきた……、と、トラウマスイッチが入る直前に、神がこっちをニヤニヤしながら見ているのに気付いた。

「……何だよ」

「いやあ、ふと思ったけど、アヤシ君ってロリコン？」

こ、こいつ、今の状況で言っではならない一言を……！！

ラファを足の上に乗せ、頭に手を置いている状況で言っても全く説得力は無いが、俺は断じてロリコンではない。そう、断じて違う！！これはあれだ、年の離れた妹を可愛がるとかそんな感じだ。

「確かに全く説得力がないツスね」

と、後から聞きなれた声がある。

「……いつからそこにいた」

「さつきからツス」

そこにいたのは、人に化ける事によって、今まで万人受けする見た目だったのが、ごく一部のお姉さまとかそら辺の人達に大人気だろっ見た目にクラスチェンジしたクルミだった。

癖っ毛混じりの栗色の髪、クリクリとした黒い瞳に童顔、小柄な、と言うか普通に小学生ぐらいに見える体格、と。まあ、簡単に言えばシヨタコンの人に狙われまくるであろう見た目になっていた。

どうも、クルミの方は今日の修行は終わったのでこちらに来たらしい。ミカさんことミカエルとウリくんことウリエルが修行を見ているので、無理なくこなせるメニューなんだと。

まあ、ミカさんは天然でウリくんは口悪いけど、二人とも常識弁

えてるからな。……羨ましい。

「じゃ、そろそろ修行再開しよか」

そう言つて、神が立ち上がるのを見て、俺はゲツソリした。

ああ、また地獄の扉が開くのか、と。あ、因みに地獄の主ことルシファーはシスコンだったが、基本的にいい人だった。神にはヤンデレだったがな。是非ともN?ce Boatな展開になる様に頑張つて欲しい。

「スターライト、ブレイカーアーーーーー!!!」

ああ、今日はリリカルな魔法少女か、と既に回避を諦めた俺は、そんな事を考えながら原作の数十倍の太さはある光の奔流に飲まれていった。

と言うか、ネタ技に『否定』を無効化する様に細工するのは卑怯だと思ふんだ。

この時、俺達がここに来てから約千年。俺が元いた時代から六千
万年程前の話である。原作は、まだまだ先の様だ。

狼と千年（後書き）

今回は独自解釈満載の話でした。次からは一気に時間を飛ばすつもりです。紀元前数百年ぐらいます。ついでに、ここでの生活は番外編かなんかで書きます、多分。神とその仲間達の出番はまだありますし。さて、次は何だろうな……。

ああ、ゴールデンウィークが終わる……。

感想や誤字脱字報告があればお気軽にどうぞ。それが作者の糧となります。

狼と死合と恋愛？（前書き）

さあ、毎度お馴染みの前言撤回だ！！今回もオリキャラしか出てこないよ！！

勝ってしまったのだ。それがどれだけ異常な行為かは想像に難くないだろう。そして武器を弾かれ完全に無防備になってしまっている妖始に、追い討ちの拳が放たれる。

「うおっと!!」

だが、妖始もまともではなかった。

武器を弾かれ、体が硬直している状態で放たれた避けられるはずのない一撃。それを、妖始はその場で掻き消える様に更に上へ跳ねた。

この二人、何だかんだ言って十分人外である。

「火^{ほのすそり}闌降!!」

神の宣言に従い、無数の火柱が発生する。触れるどころか、近づくだけでも焼け焦げてしまいそうな高熱が空間を支配する。

だが、そんな中でも妖始の動きが制限される事はない。『肯定と否定を操る程度の能力』により火柱の影響を全て『否定』、悪くない視界は嗅覚によりカバーし三次元的な空間を跳び回る。まるで足場があるかの様なその動きは飛ぶ、と言うよりも跳ぶと言う方が正しい。

超高速で動き回りながら斧剣を振るい続けるが、それを神は衝^{ソニック}撃^{ピュム}波すら読み取り、未来予知の様な精度で全ての攻撃を紙一重で回避し、タイミングを狙ってカウンターを叩き込んでいく。

「ッ!!」

神の拳が妖始の頬を掠め、その余波により頬に口の中まで届く切り傷が出るが、妖力を使い一瞬で再生させる。だが、たった一瞬ではあるが、そこに出来た明らかな隙を神が見逃すはずも無い。

「顯齋しゅうさい」

至近距離にいた神と妖始の間に見えない壁が発生し、妖始を吹き飛ばす。そして、そこで攻撃の手を緩めるほど神は甘くもなく、当然更に追撃が加えられる。

「解除はらい!!」

前に突き出された右腕から巨大な衝撃波が無数に打ち出され、その全てが高速で妖始へと飛翔する。吹き飛ばされた直後で体勢が整っていないかった妖始は、なす術も無く全弾に命中。弾幕の余波により辺り一面に爆煙が舞い。

「射殺す百頭!!」

止めを刺そうと接近していた神に、全方向から九つの斬撃が襲う。

「ハハッ!!」

だが、それすらも紙一重で避け切ってしまう。神から漏れる笑い
は自らの予想を超えた相手への喜び。神は殺し合う度にさまざま
な策を考え、強くなり続ける妖始とのこの時間を明らかに楽しんで
いた。それ故の笑み。

そして、全力で技を放ち、今度こそ動けない状態の妖始に、止め
となる技を放つ。

「混まろ」

一瞬の閃光。そして、その後には、ボロボロになり地に伏した妖
始と、それを見下ろす無傷の神が残っていた。

否月妖始連敗記録七桁の大台に乗った瞬間だった。

「あの野郎、しこたま当てやがって……」

最近ではお決まりになってきた午前中の全力での殺し合い

もとい、一方的な虐めから数分後、体を再生し、次の殺し合
いに向けて策を考える。

今回の射殺す百頭はかなり自信があつたんだが、あれで当たらな
いとなると……つうか完全に不意を付いた筈の攻撃すら完全に避け
切るって、それ何て最強の悪魔憑きだよ。……本当にパロってない
よな？ あれの精神構造を神が真似するのは洒落にならない。

「大丈夫、だよな……？」

あれ？ かなり不安になってきた。実際、あいつは未来予知に近
い形で俺の攻撃に反応してくるからな……別に一秒先の地獄を想っ
ていても何ら不思議じゃない。万が一、そうだった場合はますます
俺の目標　一撃ブチ当てる、が遠くなってしまう。

「ん、次はどうするかなあ」

目標は高い方がいい、なんてよく言うが、俺の場合は一番低い所で既にエベレスト並だ。登る方の事も考えて欲しい。

妖怪の肉体と、それなりに生きた事で大きくなった妖力のお陰で大抵の事なら再現出来る様になってきたが、それでも神に一撃当てる事すらままならない。

そんな事を心の中で愚痴りながら、傍らに置いてある自分の得物ふけんに目を向ける。

この斧剣、この倉庫で発掘して以来、概念操作と言う改造に改造を重ねた自重無しのかなりヤバい物だったりするのだが、それを持ってしても当たらないのは、流石に理不尽じゃなかるうかと思わないでもない。『必中』とかの概念も付けてる筈なんだけどなあ……。

「いつその事、避け様とする意思を『否定』する様にするか？ ……でもなあ、普通に無視して動きそうだし……時間停止 ……は駄目だな。あいつは無視して動く。ならキングクリムゾンに多重次元屈折現象で射殺す百頭をブチ込むか……？」

ブツブツと新たな神対策を考えていく。

普通に考えればオーバークルどころではないが、残念ながらここには常識人はいても普通の奴はいない。全員漏れなく人外だ

つと、誰か来たな。

「まったく、よくやるぜ。毎回ボコられてまだ懲りねえのかよ」

そう言いながら、俺の隣に腰掛けるウリ君ことウリエル。

「違うな。毎回ボコられてるから、次こそボコる為にやるんだ」

そう反論すると、ウリ君は理解できねえ、と肩を竦めた。
ウリエル。

『神の光』や『神の炎』を意味する名を持つ大天使の一人。作家と教師にインスピレーションを与え、裁きと予言の解説者と言う役割を持つと言われている。

その実体は目付きも口調も荒いが、天国で最も常識と良識を兼ね備え、裁きやら予言やらの他の奴らが面倒臭がってしない仕事が回される苦勞人。

『あらゆるものを燃やす程度の能力』を持ち、よく神を火炙りにしているのを見掛ける。ここに来たばかりの頃、修行中に神の奴が力加減を間違えて俺を宮殿にぶつけ、怒ったウリエルに存在ごと燃やされ掛けたのは今はいい思い出だ。当時はマジで死ぬかと思ったが。

ついでに、クルミの師匠であり、俺が暇潰しで始めた絵を偶に助言を呉れたりもする。まあ、俗に言うヤンデレ。病んでる方じゃなくてヤンキーの方の。病んでる方はルシファーだけで間に合ってる。

「で？　どうかした？」

「んだよ。何か用事がなきゃここにいちやいけねえのか？」

俺としては、そう言う台詞は女の子に言っただけなのだが……そんな女の子はいない？友人のハーレムにはいたぞ？ヤンキーなのに可愛い子が。その子関係で友人がゴタゴタに巻き込まれて、その後処理を俺がやらされたのはある意味テンプレ。地味キャラのだけどまあ、それは置いておくとして、ウリエルが俺のどこに来るのって用事がある時だけだった気がするんだが……。

「何だよ。別に修行中にガブリエルの奴が来たからコッチに来た訳じゃねえからな」

しばらくジトつとした目線を向けていると、相も変わらない不機嫌そうな顔のままあっさりと自白しやがった。ちなみに、こちら辺が俺や神にヤンデレ、もしくはツンデレ扱いされる原因だったりする。だって、なあ？

で、何故ガブリエル 通称、ガブちゃんさんがウリエルとミカさんことミカエルがやっているクルミの修行に参加するとウリエルがこちらに来るのか、それは全て「ウリエルがツンデレだから」の一言で片が付く。まあ、詰まりはそう言う事だ。

まあ、天然ジゴロ、鈍感、一級フラグ建築士など（現実にいる奴のみ）を嫌悪する俺としては、こんな風に誰か一人に惚れている奴は見ていると微笑ましいのだが、残念な事にこの関係を数千年以上続けていると言うのだから呆れた物だ。ぶっちゃけ、相思相愛な筈なだけでどなあ……。

「……そろそろ戻るわ。じゃあな」

取り留めもない世間話や愚痴に花を咲かせ、それなりに時間が経つとウリエルはそう言って、そそくさとクルミの修行に戻っていった。多分、途中で抜け出したのを気にしてたんだろなあ。何となく落ち着かない様子だったし。

「ん〜、どうするかなあ」

俺としては、もういつその事くっ付いてしまえばいいと思うのだが、こう言う事に部外者が口を出しても碌な事にならないのは経験済みだし。

本来なら、遠くから眺めてニヤニヤする筈なんだが、ぶっちゃけあの二人は見ていて面白くない。とは言え、弄るぐらいなら兎も角、仲を取り持つのは専門外。

「呼ばれず飛び出すジャジャジャーン!!」
「うおおおっ?!」

どっかで聞いた様な台詞と共に地面から何かが　　と言っか
こんな事する奴一人しかいねえよ!!　今時漫画でもない様な登場
の仕方しやがって!!　地面　　いや、雲だけど、突き破って
くんなよ!!　何だそのやり切ったみたいな顔は!?

「ふう……さて、あなたの願い、叶えてしんぜよ」
「はあ?」

地面から飛び出したかと思えば、何を言ってるんだコイツは。俺
の願い?　強いて言えばお前に死んで欲しいって事ぐらいだが。

「うん、素で言われると結構来るもんやね……」
「何しに来たんだよ」
「スルー!?!」

知った事か。とつとと用件を話せよ。ルシファーにお前が別の天
使に手を出したって言うぞ。

「あ、勘弁して下さい。いやマジで」

マジで頭を下げる神。……標準語になるぐらいヤバいのか。色々
と気にはなるが、知ったら戻ってこれなくなりそうな気がする。と
言っか、ホントに何しに来たんだ。

「うん、ぶっちゃけあの二人見ててイライラするやる?」

あの二人　　ウリエルとガブリエルの事か。って、ちょっと待て。お前まさか……！？

「と言う訳で、あの二人をいい加減くっ付けよう思うてな？」

「おい、やめるバカ！！　　そう言う風に茶々入れるのが一番ヤバいんだぞ?!」

「……経験、あるん？」

「……察してくれ」

強いて言うなら若気の至りだ。

「でもなあ」

「

何かを言おうとして口を閉じる神。コイツにしては随分と歯切れが悪い。何やらかしやがった。

「　　もうガブちゃん焚き付けちゃった」

テヘッ、と自分で頭を小突いて舌を出す神。……このアホ、殺してやるうか。

「て言うかマジ?」

「マジマジ。部屋に待機してもらっとる」

ホントに何やってんのコイツ!?!　　これもうあれじゃん、完全にウリエルに燃やされるフラグじゃん!!

「じゃ、出来る限りやってみよか」

「もう好きに　　おい、この手は何だ」

好きにしるよ、と言う前に俺の肩を掴む神。……ぶっちゃけ嫌な予感しかない。と言うか良い予感なんてした事がない。

「いやあ、やっぱこーゆー時は人が多い方がええやん？」

神は笑顔でそう言うが……

「本音は？」

「ウリくんからお仕置きされる時の道連れ」

ヤッパリかよ!! 予想はしてたよ畜生!!

「離せ!! 俺は関係ねえ!!」

「ハッハッハ。だが 断る!!」

まあ、本気の神に俺が勝てる訳もなく、強制的に参加させられる事に……。

俺、今回の話が終わったら旅にでるんだ……。

「で、どうするつもりなんだ？」

所変わって、俺とクルミ（殆どラファも）も使っている部屋がある宮殿の中の一室 神の部屋。そこの扉を開けると畳や日本

庭園、ついでに鹿脅しがあったりする屋敷だった事には今更ツツコミを入れたりしない。殆どは神だからで説明出来る。

集まっているメンバーは俺、神、ガブリエル。
ガブリエル。

「神の人」「神は力強い」などの意味を名に持つウリエルと同じく大天使の一人。神の言葉を伝える天使であり、処女マリアにキリストの誕生を伝えた受胎告知は余りにも有名だ。

絵では基本的に優美な青年として描かれる事が多いが、この世界では女性。銀髪ポニーテールに吊り目の気の強そうな　と言うか、気の強い美人さん。ある一部が少々アレかもしれないが、あれだ、モデル体型って奴にしておこう。もし、それが原因で青年として描かれたのなら不憫過ぎる。本人も気にしてるのに……。

能力は『言葉を支配する程度の能力』。簡単に言えば言霊の強化版。運命や現実まで捻曲げる絶対的な暗示。最初に神の動きを止めたのもこの能力らしい。当時の俺の命の恩人。

「そやねえ……ボクと妖始君が出していくアイデアをガブちゃん
が実行する言っんはどーや？」

まあ、確かにガブリエルじゃ思い付かないから神の怪しすぎる口車に乗ったんだろっし、コイツにしてはなかなかマトモな案だと思っ。思っけど……逆にマトモ過ぎて怪しい。

「……けど、それぐらいしかないか……」

だが、いくら怪しかろうと死亡系統のフラグが立っていようと、他に案もない。……取り敢えず、コイツが何か仕出かそうとしたら止める事にしよう。

「……そうね、デミュウルの言う通りでいいわ」

神の奴の案に乗る事に物凄い葛藤があったのか、俺が頷くのを
見てガブリエルはその整った顔を顰めながら、賛同した。と言う事で、
神の悪ふざけ 　　もとい、恋愛相談が始まった。……と、そ
の前に一つ。

「デミュウルクって誰？」

「えっ」

「あれ、言うてへんやったっけ？」

……神の本名はデミュウルク（自称）だった。

プランその一。発案者、俺。

「一緒に飯でも食いに行くってのはどうだ？仕事はもう終わってる
だろうし、酒でも飲ませたら変化あるかもしれないし」

と言う事で、ガブリエルにウリエルを食事に誘わせてみた。

『あ、ウリ。えっと、ご飯でも一緒に食べない……？』

『いや、俺もう食ってきたから』

……ドンマイ。そしてすまない。その可能性は考えてなかった。
ついでに勇気を出して誘ったのに断られて落ち込むガブリエルを慰
めるのが大変だった……。

プランその二。発案者、神 ことデミユウル。

「ハツハツハ、アホやなあ妖始クン。ええか？こう言っんは本能に訴えかけるんがええんやで？」

そう言ってデミユ 何か格好良くてムカつくから今まで通り神でいこう。神が取り出したのは。

『……………』

ガブリエルに先程の服を着せ、ウリエルの部屋に待機させる事数分。その間、俺と神はずっと部屋の天井裏に潜んでいるのだが……いい加減帰ってもいいだろうか。

ガチャ、と。

真面目にこの企画から逃げ出そうかと考えていた時、扉が開かれ、部屋の中で顔を真っ赤にしたガブリエルの全力の一言。

『お、お帰りなさいませご主人様！！』

キィ、パタン。

……多分、ウリエルには部屋の中の状況が理解出来なかったんだろうな。俺も、部屋の中にメイド服を着た知り合いがいたら同じ事をすると思う。

そう、メイド服だ。黒い服に白いエプロンドレス、更にミニスカート。頭の上にはフリルのついたカチューシャ。そんなもん着た知り合いがいたら誰だって扉閉めるわ！！

おい、神。お前この状況予想してただろ。声我慢して笑い転げてんじゃねえ。最初っからこれが狙いだっただのかよ……。

ガチャ……。

『お、お帰りなさいませ

』

ボタン……！

そしてウリエル、いい加減に認める。現実だから、それ。

『……何してんだよ、お前』

ウリエルは僅かに扉を開き、中を確認する様にそこから顔を覗かせている。

『えっと、これは……その……』

「チイツ、煮え切らへんな。もういつそ告白してまえばええのに」

おい、サポート云々言ってたのはどこのどいつだよ。こんな状況に投げ込みやがって。と言うか、プランその二で終わっちまうじゃねえか？この流れは……。

『上のお前らもだ』

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

ばれてる？ え？ 何で？少なくとも気配を誤魔化して結界まで張ってたのに……。

「あっ、この宮殿の部屋は持ち主には侵入者が分かる様にしとるん

やった」

「そんな大事な事忘れるんじゃないやねえ!!」

しもた、なんて呟きながら眉間に皺を寄せる神を、ばれてるならわざわざ声を潜める必要も無いだろうと思いつ切り怒鳴り付けた。本当に何考えてやがるんだよ、こいつ　　って、一寸待て。

「俺、そんな機能聞いてないぞ」

「ああ。うん、君の部屋には付いてへんよ？ラファがちよくちよく行くやろうと思つて」

ありがた迷惑だこの野郎。と、見方によつては、と言うか、どう見てもいつもの漫才をしながら二人して天井から下りる。そこにいたのは、錯覚でも何でもなく、マジで炎を背負ったウリエルだった。……ジーザス。

「で？ ガブリエルの奴は今日は一日、何か様子が可笑しかったが、手前が原因か」

そう言いながら神との距離を徐々に詰めて行くウリエル。手前ら、ではなく手前、と言う所に普段の行いの差が出ていると言つても過言ではないだろう。普段から人に迷惑ばかり掛けてるから、こつ言つ、少しは巫山戯ふざけていたにしろ、ガブリエルのために行動しようとした時にまで原因扱いされるんだよ。疑問系じゃなくて断言したからな。

「いや、えつと……その、な……」

流石に告白だの云々だのを言う訳にはいかないと思ったのか、神も事情を言つに言えず、シリシリと後ずさる。

さて、その状況で俺はと言えば

「実は、俺達神の奴に脅されて……!!」

「ちょ!?!? そこはガブちゃん説得してボクを助けるゆー流れちゃうんかい!?!」

「ハッ」

「鼻で笑われた!?!」

俺が神を助ける? バカ言っちゃいけない。俺はコイツに怨みは有っても借りは殆ど無い。全く、とは言い切れないのがアレだが、その割合は俺の個人的な換算で言えば「怨み：借り〃百：一」程度だ。まあ、どうせ死ぬ事もないんだし、別に見ていても構わないだろう。

「ウリ、待って!!」

と、俺が完全に傍観体勢に入った辺りで、今にも神を火炙りにせんとするウリエルをガブリエルの声が止めた。

「今回は……今回に関しては、主が悪い訳じゃないの」

多分、無意識だろうが『今回だけ』と言う部分を強調して言うガブリエルを見て、神は安堵と悲しみが混ざり合った、何とも言えない表情を作り上げていた。まあ、無意識に、って言うのが尚の事傷付いたんだろう。

「なら、何でお前はそんな格好してんだよ。神に唆コイツされたんじゃないねえなら、何だっつてそんなもんを……」

「そ、それは……私が、私が……」

顔を赤らめて俯いてしまったガブリエルを前に、訝しげな表情をするウリエル。と言うか、何だこの展開。何でいつの間にかイベント発生してるんだよ。

この展開はアカシックレコードを使っていない神には予想外だったのか、状況に付いていけないと言う風な顔をしている。かく言う俺も似たような表情をしているだろうと思う。

だって昨今漫画でも見ない様な流れだぞ？この流れに見事に付いて行ける奴がいるなら出て来い。

未だに少しばかり俺の脳が暴走している間に、ガブリエルは決意が固まったのか、キツと顔を上げた。

「私が、ウリエルに嫌われてると思って!!!」

『（日和ひよりった!!!）』

内心で愕然としている俺と神を余所に、二人の会話は加速していく。

「……別に嫌っちゃいねえよ。つうか、そんな事のためにそんな格好したのかよ」

「ち、違うの!!!い、今の間違い!!!」

「はあ？」

「わ、私は……私は!!!」

と、俺達が聞いたのはここまで。流石に、これ以上聞くのは野暮だろうと思い、神にアイコンタクトで意思の疎通を図ると神も同じ事を考えていたのか、浅く頷き返した。そして、俺達は二人が会話に集中している間に、そつと部屋を後にした。

結局、ガブリエルが告白出来たかどうかだが

「ねえ、今日一緒にご飯食べない？」

「別に構わんが……」

「エへへ〜」

と、嬉しそうに笑いながら腕を絡めているガブリエルと、鬱陶しそうに、でもどこか満更でもない様な態度で返事をするウリエルノ様子を見れば、結果がどうなったかは一目瞭然だろう。

そんな様子をポーっと、いつもの様にラファを胡坐を掻いた足の上に乗せたまま、遠目で眺めていると、隣に背中に黒髪の、どことなくミカエルさんに似た雰囲気を持った巨乳の女性　ルシファアを背中に貼り付けた神が座ってきた。互いに何を言うでもなく、暫し、何をするでもない時間が流れていく。そして、仕事をしているウリエルの背中に抱きついているガブリエルを見ながら、俺と神は全く同じタイミングで一言呟いた。

『人前でいちやついてんじゃねーよ』

『アンタらが言うな!!』

働いている天使達は総ツツコミだったそうなの……。

狼と死合と恋愛？（後書き）

はい、本当にすいません。今回の話、本当は冒頭の戦闘描写をメインにする予定だったんですが、それだけだとどうしても字数が足らず、それでふと思い付いたオリキャラについての話でもやるうかと。そんな話が今まで出一番字数が多いのは秘密ww

そしてしれっと神の本名登場。付けつもりは無かったです、某会議室の流れでいつの間にか……。ついでに神が使った技は皆大好きK Fやm genの『地 意思』さんから。でも、規模はダンチww

ちよつとした神の設定補足。神々全並行世界の地球。取り敢えず、どこかに無事な地球があれば死なないとか。当然アカシックレコードの閲覧も可能。何を思ってこんな設定にしたし……………。

誤字脱字や感想があれば是非！！それが作者の糧となる！！

次回こそ、次回こそ原作キャラ出しますから！！

狼と崇り神。実は幼女（前書き）

先に言っておきます。作者は西尾維新と奈須きのこが大好きです。

七月二十日、幾つか表現方法を改変。

八月二日、烏氏の活動報告を見て髪の写真について確認した所、書き忘れていた事を発見。急遽追記。

狼と祟り神。実は幼女

日が高く昇り、燦々と温かい日差しが降り注ぐ今日この頃。

そんな中を、黒髪の、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ目付きは悪い、中背中肉の地味と言つても過言ではない少年　　俺、

こと否月妖始ひしつきあやしは、バツサリと髪を切つた事で頭が随分と軽くなったのを感じつつ、数千万年ぶりに踏む大地の感触を下駄越しに味わつていながら、襟元を緩くした白い袖広の着物に、それとは対照的な黒の袴と言つ出で立ちで風を切つて悠々と歩いて行く。

この着物は人型になった時に新調？と言つか能力で仕立ててみた……のはいいが、この時代にこんな服ねえよつて事に気付いたのはもつと後だったとき。それから開き直つて着続けている。

今は紀元前十数年と言つた所。人も多くなつてきたし、と言つ事で神の野郎から旅をする許可を得たのがつい一週間ほど前の話。それからは、風の向くまま気の向くまま行く先々で絵を書いて回ると言つ宛のない旅に興じていた、と。

まあ、絵とは言つても天国にいた頃に暇潰しで始めた物で、ウリエルからは一生二流との評価を頂いた程度の物だ。流星に芸術を司るウリエルから言われてしまつて大分落ち込みはしたが、今はどうでもいい話だろう。

兎も角、そんな旅をしていた折、道中知り合つた人間の男からなかなか興味深い話を聞いた。

俺が今歩いている道は周りにはそれなりではあるが人通りがあり、この時代では十分賑わつていると言える。そして、この道が続く先にある物は一つ。その物こそ、男が一見の価値あり、とわざわざ俺に勧める程の物であり今の時代、この地域では知らぬ者はいない建築物。

その名を

『洩矢神社』と言つ。

今回は、しがない旅の絵描きとなった俺と、現在において最大の勢力を誇るミシャグジを一手に率いる少女との話だったりする。

「とは言え、どうしたものか」

あれから十数分後、俺は件の洩矢神社に到着していた。してはいたが……。

「入る訳にはいかんよなあ……」

そう、未だに俺は境内には入ってなかったりするのだ。

実を言うと、大昔にあのバカが言った通り、今の俺は訳あって半ば神格化してしまっている。半分は神になっているとは言え、いや、むしろ半神半妖と言う何とも言い難い種族になっているが故に、神社の敷地内にズカズカと入る訳にはいかないのだなあ、これが。

流石に神力の方は能力で隠しているが、中に入れば感知されるだろう違和感からただの妖怪じゃない事ぐらいはバレるだろうし、神って奴は基本的に縄張り意識が強い。妖怪なんぞが境内に入れば「ヒヤッハ―汚物は消毒だー!」と、世紀末のモヒカンの如く飛んできるとさ。同じ神だろうと他文化の神であれば扱いについては大して変わらない。強いて言えば一方的な消毒から「よるしい、な

らば戦争だ」へ変化する程度だ。まあ、民から信仰を集め、それを守る為には多少排他的になるのも仕方ないのかもしれないが……。

何が言いたいのかと言えば、そんな所に妖怪でもあり神でもある俺が入るのは争いの種を蒔くだけで、平和で長閑のろまな旅を望む俺としてはそんなものはごめんである。まあ尤も、この神社、石段なんかがある訳でもないの、敷地に入らなくても絵が描けるんだが。

「じゃ、始めるか」

能力で空間に穴をこじ開け、大分前だいぶんから倉庫代わりに活用している空間からカンバスや筆なんかの道具一式を取り出す。

この空間、あらゆる概念が存在せず、あのバカデミウルですら干渉出来ないビツクリな空間だ。どんなに物を入れても問題ないし、概念がなただけあって入れた物はその状態から全く変化しない。何とも便利極まりない代物だ。何の力も持たない一般人が見ると発狂しかねない、と言うのが欠点と言えば欠点だが……正直、俺も何でこんな空間に繋がられるのが今一つ分かってないのだ。本当に謎の空間である。

まあ、そんな事はおいておくとして、あくまで他人の邪魔にならず、尚且つ鳥居の前と言う場所を探して、能力で周りからの認識を『否定』すると地べたに座り込む。

最初にやるのは下絵作り。下絵から始めるのは些ちか時間じかんが掛かるが、これ以外のやり方じゃ書けないんだから仕方がない。

取り敢えず、今日は下絵を完成させたら宿を探そう。この分だと完成までに何度か通う事になるだろうし、その期間中泊めてくれる所を探さなくきゃな。……いや、待て。そんな所あるか？ もしかして野宿？ まあ、それでも困らないし、どうとでもなるか……。

なんて、アバウトにも程がある今後の予定とも言えない様な物を立てつつ、改めて神社に目を向ける。

それだと思ったのだがこの洩矢神社、今の時代にしては立派な建物

だ。二十世紀の神社に勝るとも劣らない規模、何も無い普通の日に集まっている人数を考えると、未来よりもずっと栄えていると言えるが……。

いや、そりゃ当然か、と。

俺は先程までの考えを自分で否定した。

未来の、特に日本では神なんかは迷信とされ、神社には全くと言っていいほど人が集まらない。集まるとすれば正月や冠婚葬祭の時ぐらい、か。

当時は気にしなかったが、今思うとなかなか寂しい物がある。しばらくはそんな取り留めのない事を考えながら筆を動かしていたのだが、ふと何やら視線を感じ顔を上げてみればいつからそこにいたのか、一人の少女が鳥居の向こう側にしゃがみ込んで俺の方を眺めていた。

金の髪を肩に掛かる程度で切り揃え、白い襦袢の様な袖口が広くなっている白い着物と、その上に袖の無い紫の衣を重ね着し、下は上と同じく紫色の、何故かミニスカートの様なヒラヒラした造り……時代に合わせていないと言うか奇妙と言うか、何とも言えない独特な服装である。更によく見れば、紫の衣には蛙の様な刺繍まで施されている。

金髪に蛙の刺繍が施された服装……神社関係の渡来人か何かだろうか？

俺にとってはラファエルやデミウルの奴で見慣れた物ではあるが、金髪は今の日本ではそんなに見られる物じゃないし、少なくとも純粋な日本人では金髪はありえない筈だ。

とまあ、そんな風に観察していれば当然なのだが、少女と目が合ってしまった。それも、そらせない程バツチリと。

「……………」

交差する視線。そして何とも言えない気まずい沈黙。……どうし

よう。

「ねえ」

「ん？」

どうやってこの状況を打破しようかと頭を働かせていると、ありがたい事に少女の方から声を掛けてきてくれた。

年下に気を使わせた様でいろいろと情けない様な気もするが、改めて考えると、残念な事に俺は元々こう言うヘタレキャラだったので気にしない事にする。

「そんな所で何してるの？」

何って、そんな事見れば……ああ、そう言えばこの時代にこんな道具はないんだっけ。今まで聞かれた事なかったけど……そりゃ、流石にカンバスの方を見れば分かるか。今まで皆物珍しそうに覗き込んでたし。

「絵だよ」

「絵？」

「ああ。大陸の向こうの道具でな。これで絵を描くんだよ」

未来のだけど、と言う言葉は、会ったばかりでそんな事言っても残念な奴だと思われるだけだと思って心の中に留めて置く事にするとして、筆をクルクルと回しながらそう返すと、少女はへへ、と物珍しそうに俺の道具を眺め始めた。

まあ布に絵を描くなんて発想はないよなあ。何より勿体無いし。

「何を描いてるの？」

と、聞かれたので何も言わずに筆で神社を差しながら、今まで書いていた下絵に目を通す。

……構図がずれたか。線も歪んじまったし、書き直す……いや、いつその事スケッチからやった方がいいかも知れない。

途中まで書き上げた所為で多少勿体無い気もするが、ウリエル曰く、こう言う物は妥協してはいけならしい。

まあ時間もあるし、俺としては別にどちらでも構わない。と、言う事で絵の師匠の言葉ぐらいいは聞こうと思ひ、先程取り出しておいた道具の中から鉛筆とスケッチブックを引っ張り出し、再び作業に取り掛かる。

「上手いもんだね」

「失敗だけだな」

トテトテと俺に近付き、地面に置いたカンバスを覗き込みながらそんな事を言う少女に苦笑いしながらそう返す。

近付かれて思ったのだが、この少女、思ったよりも小さい。未来で言うならば小学生、どう頑張っても中学生……いや、中学生も無理だな。表現としては少女、と言うよりも童わいや幼女こなんかの方がシツクリ来る。

ラファエルと言ひ、どうも俺は幼い金髪の少女とは縁があるらしいが……どうせならもう少しばかり大人っぽい女性とも出会ってみたい物である。

昔から子供には好かれていたが、まさかこっちに來てからも継続とは思わなかった。これはこれで一種のフラグ体質なのかもしれないが、俺はロリコンじゃないのでありがたみはない。皆無と言つてもいい。

「ふん。でも何でこんな所で書いてるの？」

中に入ればいいのに、と少女は顔を絵から俺に目を向け、不思議そうな顔でそんな事を尋ねてくるが……それは流石に白々し過ぎないか？ それとも本当に俺が境内に入る事の意味が分かってないのだろうか？

「まあ、ちよつとした事情があつてな。神様に嫌われてるんだよ」

尤も、これぐらいの子供なら神と妖怪の確執を知らなくても不思議はない。ならば、わざわざ俺が教える必要もないだろ。だが、だとするとこれ程の力を持つた子に何も教育しないとは、洩矢の神はどう言つつもりなのだろうか。

俺は別に力を誇示している訳ではない。むしろ妖力や霊力、神力は隠している。だが、少なくとも能力で種族を弄らなければその類の関係者には俺が妖怪だと言つ事ぐらいは普通に感知されるだろう。洩矢神社にいて、僅かにだが力を持つているなら十中八九巫女か、はたまたその親族か。どちらにせよそんな子供が妖怪である俺に警戒もなく近付くとは……。

巫女の教育は神や神職の仕事だろうに。そんな子供、妖怪からすればいい力モだ。いや、それとも自分に喧嘩売る様な奴はいないとか言つ自信か？ もしそうなら尚の事境内に入りたくない。絶対に面倒な事になる。

「喧嘩でもしたの？」

首を傾げる少女の、何も知らない純粹な言葉に思わず苦笑いが漏れる。

大陸側の神には大抵喧嘩売つた　　いや、主おもに売らされたが、

日本の神にそう言つた事はしていない。単純に妖怪だと言っただけだ。尤も、それでも妖怪なんぞ受け入れる物好きな神なんぞいないだろうが。

「大丈夫だよ！　ここの神様は優しいから！！」

だと言うのに、少女はそう言って朗らかな笑顔を浮かべると、俺の絵描きの道具を纏めて抱えて鳥居の中に入って行ってしまった。

「……は？」

流石に予想外の展開に呆然。鳥居の向こうには笑顔を浮かべて「早く早く〜」なんて言っている少女。

「……え？　マジで？」

別に道具は能力で作り直せるが、どこか別の所に行こうものなら絶対追って来るよなあ、あの子。

「……仕方ないか」

神様が優しいのは基本的に人間だけだ、と言うのは口に出さないでおく。

わざわざ子供の夢を壊す事もないだろう。それに、あの子に会ってしまったのが運の尽きだと思い、諦めの感情から来る溜め息を一つ吐いて、ゆっくりと立ち上がる。

そして俺は鳥居へ　　ずっと俺を見てニコニコと笑みを浮かべている少女の方へ向け、足を動かし始めた。

取り敢えずは　　。

「話の分かる神だといいなあ……」

鳥居を潜った瞬間に襲われる事が無い様に祈っておこう。勿論、

デミユウレ
神ではなくお世話になった閻魔様に。

そんな事を考えながら、俺はもう一つ溜め息を吐いた。

「ちよつと待つててね」

数分後、少女は俺を神社の裏手にある生活スペース　母屋
とでも言えばいいだろうか　に連れて行くと、そう言つて縁
側から中に入つてしまった。……俺と先程まで抱えていた道具を置
いて。

取り敢えず、境内に入った瞬間に攻撃を受けなかつた事に安堵し
つつも、俺一人きりと言う神からすれば絶好の好機になつてしまつ
ている今の状況に冷や汗を流す。

何が怖いって、ここで逃げ仰せても日本にいる限り狙われ続けそ
うなのが怖い。

神つて奴は大概敵には容赦がない。もしそんな事態になれば俺の
周りにいる奴らすら巻き込むだろう。だとすると、あの少女には悪
いが洩矢をここで殺しておくべきかも、なんて物騒な事を考えなが
ら思考を入れ替えていく。

話は変わるが、俺には長い間生きた恩恵の一つに、マルチタスク分割思考と言
う物がある。その名の通り、同時にいくつかの思考をこなすスキル
だが、俺は普段、このスキルによって三つ程に思考を分けている。

一つ目は今の、所謂日常的な思考。二つ目は物事に対して是か否
かを選び、創造の為の設計図を作る能力専用の思考。そして、最後

に。

ドンッ。

……言つ奇襲すらも想定した、戦闘用の思考。

見れば、つい先程　一秒前まで俺がいた場所には、見上げる程の、白くしなやかな印象を受ける大蛇が地面に喰らい付いていた。

恐らくは、この大蛇が自然を依り代とした土着神　ミシヤグジ。

やはり、あの子がいない時を狙って来たか。余程あの子の事が大事　いや、違うのか？　ああなるほど、そう言う事か。

うわあ、やってられねえ……。

「あー、言葉は通じるか？取り敢えず、俺に交戦の意志はないから引いて欲しいんだが……」

事の真相に気づき、元から少なかったやる気がゼロ通り越してマイナスになるのを感じながら交渉に打って出るも、返ってきたのは当然の如く大口開けた大蛇の巨大な牙。

「聞く耳持たず、か……」

凄まじい勢いで飛び掛かって来る大蛇を、溜め息一つと共に地面を蹴って回避。それと同時に第二思考で頭きぶくの中から設計図を引っ張り出し、地面に着地するのに合わせて能力を発動する。

「『創造・存在肯定』」

創造は決してドイツ語とかじゃないからな。コレは能力であつて聖遺物ではありません、と。

さて、戯れ言は置いておくとして、俺の前には先程の大蛇が蜷局とくらを巻いている。ただし、葛籠くわらご型の鋼鉄の檻の中で、だ。

「
」

檻に閉じ込められた大蛇は不気味な程に大人しく、見方によっては戸惑っている様にも見える。まあ、それもこの檻にはそう言う仕掛けをしているから当然なんだが、その前に。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

檻に閉じ込められている大蛇、その奥の母屋の陰に向けて声を掛ける。そこからヒョッコリと顔を出したのはさっきまで一緒にいた少女。だが、その頭には先程まではなかった藁か何かで編み込まれた奇妙な形の　　デフォルメした蛙の様にも見える帽子を被っていた。……マジで何だアレ。いや、本当に帽子？

「あーうー、いつ気付いた？」

「……コイツが出てきた時から」

声を掛けられた事をキツカケに意識を帽子から外し、コイツの部分でミシャグジに親指を向けながら少女に答える。

まったく、と今日何度目になるか分からない溜め息を吐いてしまふ。だが、それも仕方ないだろ。まさか　　。

「お前がここの神とは……なあ、洩矢サマ？」

俺の言葉に童姿の祟り神は、まるで悪戯に気付かれた子供の様な、

実に愉しげな笑顔を浮かべた。

「そもそも、私の国に入ってくる妖怪って珍しいんだよね。十把一絡げの連中はまず近寄らないし、たまに来るのは力を過信して国で暴れようとする奴だしさ。でも、貴方は違うでしょ？とんでもない力を持っているのに何をするでもなく、ただ絵を書いているだけなんてさ」

「それで興味を持って観察していた、と？」

「そつだよ？」

あつけらかんと言いつつ少女
洩矢諏訪子もじやすわこを前に、俺は呆れた表情を浮かべてしまう。

今、俺達がいるのは、つい先程俺がミシャグジに襲われた庭にある縁側。そこで、俺は洩矢もじやについて先程まで行われていた茶番についての説明をさせていた。

簡単に事の顛末を纏めれば、洩矢が王を務める国
諏訪王
国に妖怪おれが入り込んだのを感知、その後監視していたが、その今までの妖怪とは違う行動に興味を引かれ、神社の近くに来たのを期に自ら接触。更にミシャグジに襲わせて実力を試した、と。

結局の所、最初から仕組まれていたと言う訳だ。まさか、一つの国全てに力が届くとは思わなかったが……流石は洩矢と言ったかね。

「じゃ、次は私の番ね。私も貴方には聞きたい事があるんだ」

「……まあ、ある程度ならな」

一通り説明させたんだ、こっちの事も説明すべきだろう。……聞かれた事だけ、な。

「貴方は何？」

「……………」

おいおい……随分と直球に聞いてくるじゃないか。まさか一番初めの質問でそう来るとは思わなかったぞ。まったく、洩矢には驚かされてばかりだ。

「妖怪……正確に言うなら妖獣だよ。分かってるだろうに」

「嘘だね。さっきのミシヤグジ閉じ込めたアレ、能力でしょ？ アレを出す時に僅かだけど神力を感じた。……それはどう説明するの？」

……能力を使うと神力が漏れるなんて、俺も知らなかったぞ？ アレか、普段力を隠す事に能力を使っているから別の対象に能力を使おうとすると力を隠している方から幾つか力が割さかれてる、とかか？ ……今後の課題だな、コレ。

それよりも、どうするかなあ。神力がばれてる時点で下手な言い訳や誤魔化しの類は使えなくなったなが……いや、もうどうでもいいか。何と言うか、隠すのが面倒になってきたし。

「まあ、半分ほど神だからな」

「ふーん……………」

と、言う訳であっさりカミングアウトするが、洩矢にそこまで驚いた様子は無い。

神力を使うと言う時点である程度予想を立てていたんだろう。この見た目に反して聡い中身を持っている神様ならそれぐらいはやるだろうな。一時とは言え、俺を掌で玩んだんだから。

と言うか、天国うえに居た弊害うへだな、俺が力の察知が苦手なのは。あそこに居た奴らの力は地上こちに居る連中とは比べ物にならない所為で、地上に降りてからは感覚が狂いつ放した。コレもその内調整しておかねえと……。

と言うか、絶対気付いてやがったよな、神デミュウルの野郎は。むしろアイツが気付かない訳がない。教えなかった理由は……そっちの方が楽しそう、とかなんだろうなあ。

「まっ、そうなった経緯とかも気になるけど、どうせ話してくれないんでしょ？」

話さないな、絶対に。長いし面倒臭いし、何よりデミュウルの事を伝えるのがダルい。あんな奴の事をどうやって説明しろと言うんだ。聞かれたら困る知人ナンバーワンだぞ、アレは。

「ああ」

まあ、などと言う事は心の内のみに収めて、ただ領けば、それを見て洩矢は笑う。懐が広いと言うか、何と言うか……。

「あの檻は？ ただの檻じゃないんでしょ？」

能力の内容は兎も角、檻の仕掛けぐらいなら別に構わないか……と言うか、質問にはしっかり答えておかないと引き下がりそうにもないし。

「あの檻には、それを壊そうとする意思や、抜け出そうとする意思

を否定する様になつてゐるんだよ」

まあ簡単な能力の使い方だ。だが、簡単に単純故に破りがたい物でもある。それこそ、俺の能力を無視出来る様な実力、もしくはは能力がないとどうにも出来ない。洩矢にもそれが分かっている様で、得心したとばかりに頷いた。そして

「じゃあ、次だね。ねえ、どうして避けられたの？」

恐らくは一番気になつていたのであろう疑問を口にした。

「……………」
「最初の攻撃、アレは間違いなく私に出来る最高の奇襲だった。私ですら避けられない位の……。貴方がどれだけ強くても、アレを避けるのは考えられない」

……………さてどうしたものか。半分神だった事はある程度予想をつけていたんだろうが、こればかりは本当に分からない様でさっきまでとは打って変わって洩矢の顔は真剣だ。

どう考えても、適当な答えは許されそうにない。とは言つても、これは別に答える訳にはいかない類の質問ではない。仕掛けを答えた所で、対処出来る様物ではないからだ。

だが、これは何と云うか、説明し辛い。何よりもそれぞれの物が……いや、そうだな。本家の、ある小説に登場する、灼熱の揺り籠フォーマルハウントの説明をそのまま流用させてもらうとしよう。正常な人間に近い体であつてすら、不死を謳うたう事が出来る、その理屈を。

「まあ……………なんだ、要はスピードなんだよ。何かとんでもない事を経験した後、体や気分が高揚した事はないか？ 俺はそれを常に維

持しているだけだ」

常に最悪を想定し、殺戮を夢想する。一度陥った地獄に居座り続ける。これが戦闘用の第三の思考の正体。

実の所、俺の妖怪としての性能^{スペック}事態、脚力や体力は兎も角として、それ以外は精々中級と上級の間地点、その他は能力で誤魔化しているの過ぎない。

あの化け物^{デモユール}と殺り合う為には猿真似もいい所だが、こう言うのに手を出すしかなかったのだ。

「例えばさ、一撃で山を砕く様な拳が回避不可な速度で迫ってくる状況の危険度を十だとする。それに比べると、ミシヤクジに襲われるのは、俺にとって三か四程度。そりゃ避けられるさ」

行動に移す前の準備運動、弛緩した精神を引き締める心の初動。それらを常に思考においておく。一度も止まる事無く、常に最高速。相手が最高速に達する前に、自らの性能限界で迎え撃つ。だからこそ、奇襲など通じる訳が無い。常に俺自身が奇襲を行っているのだから。

「それがあの攻撃を回避出来た仕掛け。窮地を駆け抜ける為の速さ。まあ、ちよつとした精神論だよ」

「……無茶苦茶じゃない」

絞り出す様な声でそう言う洩矢の顔は、理解出来ないと言う感情で占められている。

まあ、正直言つて俺もそう思う。俺にこんな事が可能なのは、偏^{マルチタスク}に分割思考と六千万年生きてきた経験のお蔭だろう。普通の人間がやれば間違いなく発狂物だ。

実践してこそ思うが、こんな事を元ネタでは人間がやっていると

言うつから驚きを通り越して呆れる。そして、それを考えた作者がすごい。普通は考えねえよ、こんな事。

ともあれ、洩矢の質問とやらもお終いだらう。他に聞かれる様な事は俺自身にも覚えが無い、と言う訳で洩矢に声を掛けてみる。

「なあ、もういいか？俺、今日の宿とかも探さなくちゃいけないんだが……」

「……………」

が、反応が無い。何をしているのかと、思い視線を庭先から横にずらしてみれば

「……………」

腕を組み、眉間に皺を寄せ何かをジツと考え込んでいる洩矢がいた。

一体何を考え込んでいるかは知らないが、どうにも声が聞こえない程集中しているらしい。少々短慮かもしれないが、早めに行動に移らせてもらおう。と、言う事で、

バシッ。

「あつっ！？」

「おお……………」

額を軽めに叩いたつもりだったが、加減を間違えた様で中々いい音が……いや、悪かった。悪かったから俺を睨むな。

「つつか、話し掛けても返事をしないお前が悪い」

「つつ……………あ〜っ」

俺にそう言われると、洩矢は考え後とに集中し過ぎていた自覚はあったのか、所在無さ気に視線を彷徨わせた。まあ、別に怒っている訳でもないのだから以上何も言うつもりはないが。

それより、寢床なり何なりを探しに行く方が先決だ。今の時代、辺りが暗くなるのは早い。暗くなっても困りはしないが、獣類の相手は些か面倒ではある。

「で、俺はもう行っていいか？」

縁側から下りて、地面に立つ。暫く座りっぱなしだった所為か、腰を伸ばすとパキパキと小気味良い骨の音が聞こえた。俺も歳かなあ。……あ、俺六千万歳じゃん。

「あれ？ 何か用事でもあるの？」

若干赤くなってしまった額を摩りながら、洩矢は不思議そうな顔を俺に向けてくる。

「寢床探したよ。もう暫くもすれば暗くなるからな」

「あゝ、そっか。そうだね……」

と、俺の答えを聞いてまた洩矢が俯いて何やら考え始めてしまった。良からぬ事じゃなければいいが……どうも、期待は出来そうにない。

「……ねえ、また絵は書きに来るんでしょ？」

今度は早めに結論が出た様で、顔を上げた洩矢が俺にそう尋ねてくる。まあ確かに、そう言う予定ではあったが……それがどうかし

たんだろつか。

「なら、うちに泊ればいいよ!!」

「……………」

満面の笑顔でそれがいい、それがいいと言っている少女を前に、俺は完全に動きを停止していた。

……今、コイツは何て言った？　うちに泊める？　俺を？　と言うか妖怪を？　神社に？　コイツ、正気か？

疑問符が飛び交う思考を放棄し、新たな思考を打ち立てる。

洩矢の提案は、確かに俺としては願ったり叶ったりだ。一々寝床を探す必要も無ければ、すぐに神社を書く事も出来る。だが。

「俺、妖怪だぞ？　ミシャグジから文句は出ないのか？」

そう、それが唯一の懸念だ。

流石に俺を泊めた所為で内輪揉めなんて言うのは気分が悪い。洩矢が神らしくないのは、まあ、俺を境内に自ら招いた事で十分分かっているし、コイツが良いと言えば、神社に泊まるぐらいはいいのだろう。だが、コイツに従っているミシャグジ共は違う。そう思っ
ての心配だったのだが……。

「私が出させる訳無いでしょ？」

その心配を、洩矢はたった一言でぶった切りやがった。

どうやら、洩矢は結構な暴君の様だ。ミシャグジが泣いてないといいけど……まあ、そこまで自信満々に言うのなら、

「……………暫く、厄介になります」

そう言って、家主に頭を下げた。……どうやら、暫くは寢床の心配はしなくて済みそうだ。

「でも、結局俺を泊めようと思ったのって暇潰しだろ？」

「ギクッ」

「そんなに暇なら信者の方に時間掛けるよ……」

「あ〜う〜……あつ！でも、息抜く必要でしょ？」

「あつ、て何だよ、あつ、て。つつか、お前今日一日ずっと俺とい
たじゃん」

「あつ！……いいの！！ 神様なんだから！！」

「………そうですか」

その後、二人の間でこんなやり取りがあったとか無かったとか。ついでに、会話の中で妖始が名乗っておらず、それについてまた一悶着あったのは別の話だったり、そうでなかったり。

狼と祟り神。実は幼女（後書き）

OK。何も言うな。分かっている。その冷めた視線だけで読者諸君が何を言いたいかはよく分かっている。だけど自重はしない！！さて、という事で原作キャラ一発目。洩矢諏訪子さんでした。この洩矢つてのが一発じゃ変換できなくて面倒極まりない。じゃ、今回の簡単な解説を。

・何か妖始が絵を描き始めた。

まあ、そりゃウリエルとかもいるしやり始めてもおかしくないでしょう。まあ、作者がそこまで詳しい訳じゃないんで細かい描写は出てきませんが。

・神格化してる

これは今度説明。具体的に言えば諏訪大戦辺り。

・DDDネタ

作者が好きだから。特に日守秋星が好き。火鉈も好きだけど。2巻の「待たせたな、シンカー」の部分で毎回泣きそうになる。

・「文句は出させない」

ミシヤクジ涙目（笑）

他に質問疑問誤字脱字、感想がありましたら是非とも。いや、正直感想とかがないとどう思われてるかが不安で不安で。あ、アドヴァイスとかも是非。でも叩きは止めて欲しかったり。

ではまた次回。

狼と祟り神。その日常（前書き）

更新遅れてすいません!!

約二ヶ月放置か……何やってんだ俺……。

あ、後書きでちよつと報告が。

七月二十日、幾つか表現方法を改変。

狼と祟り神。その日常

朝、小鳥の囀りなげと部屋に流れ込む冷気で目が覚めた。

季節は既に冬。この時代では珍しく木造であるこの『洩矢神社』だが、むしろ木造である為に非常に寒い。

一応、獣の皮で作られた布団もあるのだが、それでも寒い。保温性とかもあるはずなのに……。

生地が薄い所為か？ まさかこんな所で羽毛布団の有り難味を感じるとは思わなかったが、今度能力で作ってみるのもいいかもしれない。普通の作り方？ そんなもん知る訳無いだろう。

とは言え、それでも布団に包まったまま出る気が全く起きないのは、獣の皮だとはしても布団の魔力は健在だと言う事か。冬場の布団、炬燵ほど恐ろしい物はないな……。

だが、俺は時代が違えばN E E Tと呼ばれる男、布団の魔力なんぞ恐るるに足らず！！

と言う訳でもう一眠り

「何バカな事考えてんのさ。朝ご飯出来たから起きなよ」

……しようとした所で、部屋の横開きの扉を開けて、奇妙な帽子を被った金髪の少女が入ってきた。

「……こんな事に神通力なんぞ使うなよ」

と、言いつつ布団の中に頭ごと潜り込むが、起きろ起きろー、と言う少女に布団を持って行かれてしまう。

この少女、名を洩矢諏訪子もじやすわこと言い、この神社に祀られている神にして現在の日本において最大の信仰を誇るミシヤグジ 岩や木を依り代とする白蛇の姿をした神 の支配者である。

見た目はただの金髪の少女だが、実際には既に数百はとうに越している合法ロリ。おっきなお友達の夢が今ここに……！！

「……寒い」

そして何よりも下らない。何だよ、おっきなお友達つて。……布団も引き剥がされてしまった事だし、いい加減起きるとしよう。

正直言えばまだ眠いんだが……と、そんな事を心の中でぼやきながらも、むくりと体を起こしガリガリ頭を搔あぐひいて欠伸を一つ。

「……おはよう」

「うん、おはよう」

そして日本人にとって馴染み深い挨拶を交わして、今日も一日が始まる。

俺が洩矢諏訪子と出会い、『洩矢神社』の世話に為り始めてから十数年。

そう、十数年だ。どう考えても俺みたいな奴が絵を描くのに掛ける時間じゃないし、俺もこんなに長い事世話になる積もりは欠片もなかった。

なのに、何故かまだここにいる。ここに馴染んでしまった、と言

うのも無い事もないが、それは、あくまで最近になって出来た理由だ。

最初の頃は絵を描いたらまたすぐに旅に出るつもりだったのだが、それを事ある毎に諏訪子の奴は邪魔してきやがったのだ。絵を描き始めれば暇だの何だのと理由を付けて俺に相手させたり、逆に忙しいからと言ってこの巫女

風祝の手伝いをさせたり……。

今思えば、諏訪子の奴はただ単純に神としての生活に退屈していたんだろう。少なくとも数百年は同じ事を続けていたんだ、幾ら神とは言え飽きてしまっても可笑しくはない。そんな中に、色々と訳ありの俺が来れば、そりゃ退屈凌ぎとしては上等だ。

まあ、その後はずるずると惰性で居座って、現在に至る、と。

「つまり全部お前の所為じゃねえか」

「あいたっ!？」

客観的に今までの事を思い返してみても、取り敢えず前を歩く少女が悪いと言う結論に至った為、感情のままに頭を引っ叩いてみた。

……された側からすれば理不尽以外の何物でもねえな。

「いきなり何すんのよ!!」

「いや、俺がここに来た時からの事を思い出したらつい……」

「つい!？」

「さて、今日の朝飯は何だろうな」

「うわ、普通に無視した」

まあ、こんなやり取りも初めて所か、立場が逆になったりで結構頻繁に起こっているので互いに一々気にしちやいない。諏訪子の方は内心結構根に持っていたりするのもかもしれないが……祟り神だし、いや、祟り神云々は完全に偏見だけだ。

「はあ……、妖始つて偶に訳分かんないよね……」

心外だ！！　と言いたいが、ここでの行動を鑑みると結構思い当たる節がある所為で反論できない。と言うか、さっきの事も諏訪子にとつては十分「訳分かんない」事に分類されるだろうしなあ……うん？　俺つてもしかして変人扱い？

「つつか、何度も言うが俺の朝飯は用意しなくてもいいんだぞ？　別に飯食わんでも死なないんだし」

「そう言う問題じゃないよ。家族なんだから一緒にご飯食べるのは当たり前でしょ？」

俺の言葉にこつちを見もせず答える諏訪子に苦笑いが零れる。これも事ある毎に　　具体的に言えば冬や凶作の時によくやるやり取りだ。

今は年代で言えば弥生時代。

大陸から稲作が伝わり作物の保存が利く様になったとは言っても、未来に比べれば技術も未熟でその時の気候に左右され易く凶作の場合にはマジで死活問題。しかも、野菜の栽培方法は未だに伝わってない為、山や森にある木の実をそのまま食べている。

つまり、冬には食糧不足に為り易い。そんな時にまで食う必要がない俺は食わなくていいと何度も主張しているのだが、来たばかりの頃には「客人なんだから気にするな」、数年経つて居着いた頃には「家族なんだから」と言つて首を縦に振つた例ためしがない。

家族だと言つてくれるのはありがたいんだが、妖怪を家族だと言う神様がどこにいるんだよ。

「おはようございます、妖始さん」

その後も特に意味も無い様な話をしながら居間へ向つた俺達を迎

えてくれたのは、今の時代には珍しく長い髪をそのままストレートで伸ばした少女だった。

彼女の名はを穂波^{ほなみ}。顔立ちにはまだ幼さが残る物の、年の割りに落ち着いた少女であり、現在の風祝　この神社での巫女である。

因みに、彼女の両親は健在で、この『洩矢神社』とはまた別の所で生活している。穂波の母親も風祝だったのだが穂波に風祝の役割を受け継がせて引退、今は旦那と二人でゆったりとした生活を送っており、此方に来るのは祭事などで忙しくなる時ぐらいだ。

「おはよ」

いつもの様に明るく穂波に、気だるげな表情のまま挨拶を返す。

まあ、諏訪子が基本的に笑ってる事が多い様に、俺も普段からダルそうな表情だから別段可笑しな事もないんだがな。

少し前から気になっていたんだが、諏訪子。お前、何で偶に笑い声がケロケロに変わるんだ？あれか、洩矢神が蛙つてのはそこから来てるのか？

「？　どうかした？」

俺の視線に目敏く気付いた諏訪子が疑問符を浮かべて首を傾げているが、何でもねえよと簡単に返す。

実際、気になったただけだし、別にわざわざ本人に問い質す様な類の疑問でもないだろ。別に諏訪子の笑い方がケロケロになったって何かが変わる訳でもないし。

「まさか私に惚れ

「それはない」

「いくらなんでも即答過ぎるよね!？」

何か諏訪子がふざけた事を口に出そうとしたので、言い切る前に諏訪子の言葉を遮る。

何かジツトリとした視線を感じるが、そんな事は気にしない。気にしないっいたら気にしない。無視していたら諏訪子が穂波に泣き付き始めたが、それも気にしない。むしろ気にすべきは諏訪子の方だろう。主に威厳的な意味合いで。

「はいはい、そろそろ頂きましょう。折角のご飯が冷めてしまいますよ？」

だが、すぐに穂波がパンパンと手を叩きながらそう言う事によってあっさり場は沈静化。

まあいつもの悪ふざけだし、諏訪子も「そうだね」なんて言いながら平然と丸ちゃぶ台に着く。当然、さっきまでの嘘泣き。コイツがそんな事で泣く様なタマか。と言うか、さっきの会話じゃ泣く様な要素がないしな。

「じゃ、頂きます」

『頂きます』

手を合わせて言う諏訪子に倣い、俺と穂波も唱和して、箸を手に取り朝食に手を伸ばす。

本日のメニューは白米と木の実（十中八九どんぐり）の中身を簡単に燻った物。

俺がここに来た当初は白米はそのまま出されていたんだが、流石に俺が耐えられなかったので青銅器を使った簡単な飯盒はたごうで炊き方を教える事に。

何でも、諏訪子の治める地域一帯では既に広まってしまっているとか。……米の炊き方が出来るのって、いつ位からだろう。

歴史、変えちまったかもなあ。他にこのちやぶ台とか箸とか茶碗とかも全部俺が能力で出したもんなんだが……働いているのか？
歴史デミウルの修正力の奴。……いや、アイツの事は敢えて気にすまい。そもそもアイツの存在自体、俺でも把握把握し切れてないんだ。地球の化身としての役割もちゃんと聞いたわけじゃないし。と言うか、アイツの事は気にするだけでHPガンガン削られていく気がするし……。

「今日って何か予定あったっけ？」

「いえ、特には……。参拝の方も、こんなに寒いと来ないでしょうね」

「だろうね。妖始は？ 絵でも描くの？」

「いや、今日はやらねえよ。お前が暇だと邪魔しに来るだろうし」

「何よ、それじゃいつも私が邪魔してるみたいじゃない！」

『……………』

その通りだろうが！！ と叫びたくなった気持ちを堪えているのは、どうやら俺だけでなく穂波も同じ様で、その表情は何とも言い難く歪んでいる。いや、よく耐えたと思うよ、お互いに……。

パチ……パチ、パチ……………。

朝食の後の居間に広がる静寂。そして不意に起こる僅かな駒を打

っ音。

こう言う空間は、個人的にはだが中々居心地がいい。相手に気遣う事なく自然体でいられる空間。まあ尤も、それももう少し盤面がマシな状態であれば、だが。

最近　　とは言っても既に十年近く前の話だが、俺は能力を修行がてらに無駄にフル活用し、幾つか記憶に残っていた玩具を作り出していた事があるのだが、殆どは独楽こまや竹馬、縄跳びなどの懐かしく、尚且つ自然の物でも代用可能な外で遊ぶ為の物で、それらは既に諏訪子が統括する地域内の人里で子供達に使われており、現在『洩矢神社』に残っているのは当時俺が作った玩具　　いや、これについては玩具と言っているのはいいか不明だが、その中で、諏訪子の奴が偉く気に入ったソレだけだ。

パチ。

「むっ……」

諏訪子の放つ一手に、思わず動きが止まる。全体を睨む様にして頭の中で幾つものパターンを試すが、どれも僅か数手生き長らえるだけか……。と、言う事は、

「また俺の負けかよ……」

「アハハハ、私の勝ち……!!」

まあ、そう言う事だ。

「それにしても、面白いね。この将棋って奴」

まっ、散々引つ張った挙句意外性も何もなく順当に将棋な訳だが、ここで軍人将棋辺りだと意外性があつたのか？ まあ、そんなもん狙つても仕方がないんだが。

言つておくが、俺が弱い訳ではないぞ？ 単純に諏訪子が強いだけだ。最低でも数百年単位でやってきた俺に対して、教えてからたつたの一、二年で勝ち星を奪うとかどんな化け物だよ、つたく……。しかも最近は連敗気味。完全に打つ時の癖やら思考を読まれまくつて嫌になる。もう打つの止めようか、と思わないでもないんだが、俺自身将棋を打つのがそれなりに好きなので負けると分かつていてもやってしまう、と。

いっその事、新しいゲームでも出そうかと思わないでもないが、残念な事に俺には囲碁のルールが分からない。ぶっちゃけ、自由度が高すぎてどうすればいいのか分かんねえんだよなあ、アレ。

そんな訳で、囲碁は除外するとして今度はチェスでも出してみようか、と考えてみたものの、結局似た様なボードゲームだと、その内連敗しだすのは目に見えているので自重。と言つかむしる自嘲。

「さっ、もう一回やろ、もう一回」
「うへえ……」

満面の笑みで次を催促してくる諏訪子にげんなりする。

何だ、そんなに俺を負かしたいのか？ 普段の恨みか？ もうやらねえよ、ちくしょー……。なんて考えていても、負けず嫌いが祟り結局もう一局打つ羽目になるのは目に見えている。……まあ、そ

れに、

「
」

笑顔で何かのリズムを鼻歌で奏でながら駒を列べる諏訪子を見て
いると、どうにも断れないんだよなあ……。まあ、断れないなら仕
方がない。次は精々勝たせてもらえる様に頑張らせてもらおうか…
…負けたくねえからな!!

「一日将棋に使っちゃまった……」

いや、一日中将棋指してた事は別にいいんだけどな、二桁やって
勝てたのが僅か一、二回つてのが何ともなあ……。

多分、この先将棋でアイツの優位に立てる事はないだろうなあ。こ
れが才能の　　と言うか、性能の差かねえ……。

そう考えて徳利とくじ　　居酒屋の熱爛で出てくる奴じゃなくて、
壺に細い口が付いた様な持ち運び出きる奴　　の酒を煽る。

嫉妬だの何だのなんて感情は微塵もない。そこら辺の感情とは、
まだ人間だった遠い昔に折り合いを付けている。それに、少なくとも
も見た目は子供である諏訪子に嫉妬するのもバカらしい話だ。

「今夜は明るいなあ……」

空を見上げれば既に月が高くまで昇り、影を照らしている。その月を眺めつつ、また徳利から酒を一口。

何やってるのかと言えば、ただの月見酒だ。酒は能力で少しでも残っていれば増やせるし、うむ、便利便利。

母屋の縁側でやっている所為で、流石に少々寒いが……まあそれも風流って奴にしておこう。実際にはそんなもんを解する程の学は無いがな。

「誰に言つとるんだ俺は……」

自分の考えている事に自分でツッコミを入れると言う、普通のボツチよりも寂しい事をしている自分に苦笑いしつつ

「もう寝たんじゃなかったのか？」

俺の隣に腰掛けた諏訪子へと声を掛けた。

「アハハ、妙に目が冴えちゃって……ちょっと付き合わせて」

コイツ、最初っから酒が目的かよ。まっ別にいいんだけどな。

ほれ、と徳利を渡してやり、徳利に口を付け中の酒を呷る諏訪子を横目に月を眺める。

交互に徳利を呷り、月を眺め、たまに一口で飲み過ぎだの何だのと騒がしくならない程度に口論して、またうだうだと文句を言い合いながら徳利を呷る様な、そんな穏やかな、俺の好きな時間。

「だから飲み過ぎなんだよ、お前は」

「幾らでも造れるんだからケチケチしないで

……クシ

ユンツ」

と、もう数回目になる言い合いを諏訪子としていたのだが、いつもの紫の衣じゃなく寝巻き用の白い単衣の着物を着ている所為で冷えたのだらう。俺はむしろ酒で火照っている所為で涼しいぐらいなんだが、諏訪子が小さくくしゃみをした。

寒くなっただんならいい加減寝ればいいと思うんだが、それでも諏訪子が立つ様子は無い。

「まったく、仕方ねえなあ……」

「おっ？」

ズルリ、と徐々に尾を出し、それを諏訪子に巻いてやる。

皆忘れているかもしれないが、一応はこれでも狼。体の一部だけを妖怪化する事なんてお茶の子さいさいですよ、ハツハツハ。

と言うか、最近ご無沙汰だった所為で言い忘れていたかもしれないが、この尻尾、かなり使い勝手がいい。

まだ狼の姿のみだった頃には単純に長く、木でも切り倒す様な強度を持つと言っただけだったのだが、人型になってからは、長さは自由自在、更には籠めた力によって刺突や斬撃まで繰り出せる様になったり、と非常に便利な武器の一つになっているのだが……うん、武器無しだと尻尾の攻撃力が一番高いつて言うのも我ながら中々おかしな事になってるなあ。

「あ〜う〜、妖始の尻尾温かいね〜」

「よかったな、そりゃ」

俺の尾に頬擦りしながら顔を綻ばせる諏訪子に適当に返事をしながら、また徳利に口を付ける。

まあ、たまにはこんな風に終わる日もあっていいだらう。どうせ、すぐに忙しくなるんだし……。

そう思いながら空を見上げると、綺麗な満月が、相変わらず俺達を優しく照らしていた。そしてこれから僅か数年後、本当に危機が訪れるのだが、今の俺はそんな事を知る由もない事である。

狼と祟り神。その日常（後書き）

ほのぼのって言うよりもダラダラって感じがする妖始と諏訪子の日常編でしたwww
諏訪子フラグは立ってないよー。間接キスとか気にしてないよー。

それと報告。

暫く小説の更新が今以上に遅くなります。
理由としては、現在作者は高校三年生です。いい加減勉強しなきゃならんやー、と。現実逃避にチヨコチヨコと書いていく予定です
が、それでもこれ以上遅筆になるのは目に見えていたんで、報告を。

感想、誤字脱字、批評批判、アドバイスなど、どんどんお寄せ下さい。それが作者の糧になります。
それでは、また次回〜ノシ

狼と祟り神。対峙するは軍神（前書き）

一ヶ月オーバー……うわぁ……。

おわび

約二話ほど前で主人公のスキルの一つとしてDDDの日守秋星の精神論を使いましたが、不愉快に感じたDDDファンの方もいます。申し訳ありません。作者もDDDファンとして使った事を後悔しております。

ですが、かなり重要な設定として使ってしまったのでいまさら変更する訳にもいかなくなり……。

ですが、せめてもの償いとして、今後この作品にDDDの設定が使われていた事が汚点にならないよう、さらに読者様が不愉快を感じない様精進させていただきますので、どうかご容赦ください。

狼と祟り神。対峙するは軍神

『高天原の神が信仰を広げている』

そんな話を聞いたのは、つい最近の事だった。それを聞いた時、最初に「やはり来たか」と顔を顰め、そして「こんなに長居するつもり無かったのにな」と苦笑い。

高天原の神が日本で広がりだしたと言う事はそろそろ三世紀、つまりは古墳時代。そして『倭国の王』を中心とした『ヤマト王権』の始まり。

高天原の神 言うならば、それは『日本神話』に登場する神々だ。

五柱の神からなる別天津神、その名の通り七代の神、神世七代、最後に伊弉諾尊と伊弉冉尊。それらの神が高天原で生まれたとされる『天地開闢』。そして伊弉諾尊と伊弉冉尊による『国産み』と『神産み』。

大凡、この二つの出来事から始まったとされる神話。それが『古事記』、『日本書紀』に掲載されている『日本神話』だ。

中でも、天照大神、月読命、素戔嗚尊の三柱の名や、天照大神が引き籠もった『天岩戸』は未来でも知らない奴は中々ないだろう。厨二病患者なんかは特に。

そして、未来で言う所の奈良県から『ヤマト王権』の支配と共に広まりだした新たな神の信仰は爆発的な勢いで勢力を広げていき、俺達のいる諏訪地方 長野県まで迫ってくるのに然程時間は掛からなかった。

そもそも、俺の知る限り諏訪の地に祀られているのは軍神、農耕神、狩猟神、さらには風神として信仰されていた『建御名方神』だった。それに臆気にはあるが、どこかの伝承でも諏訪の洩矢神は侵略を受けて敗北した、と書かれていると聞いた覚えがある。

と言う事は、遅かれ早かれ、諏訪の地に攻め込んでくる事になるだろう。

「で？ わざわざ何の用だ、洩矢」

と言うか、今日の前にその神の内の一柱がいたりするんだが……それも物凄く特徴的な奴が。

紫がかったショートボブ（にしては豪くボリュームがある）の髪と言い、首元に掛けたれた鏡と言葉では表現し辛い装飾が施された半袖の赤い衣とその下に着ているらしい長袖の白い着物？と言い、さらには赤みを帯びた黒色の袴と言い、今まであった事のある人外主に悪魔や諏訪子を含めた神々はどういつもこいつも時代にあつていない奇妙な格好をしていたが、目の前にいる人物はその中でも格別だ。今まで言葉に困る事はあつても、表現出来ないなんて事はなかったと言うのに……。

「そんなの聞かなくても分かるでしょ、八坂^{やまか}」

現在の状況説明。

広間の様な所の真ん中で座る諏訪子。

その諏訪子の左斜め後に控える様に座っている俺。

そして俺達の前で偉そうに頬杖突きながら胡坐を掻いている奇妙

な格好の女性、『八坂』 『八坂神奈子^{かなこ}』。

さらに壁際には俺達を取り囲む様に数十の神々がズラリ。

簡単に言えば敵陣と真ん中。戦力は俺と諏訪子。向こうは『八坂』

+その他大勢の神の皆さん。

……普通に考えると無理ゲーじゃね？ いや、ここからならいつでも逃げ出せる自信ならあるぞ？ それでも、せめてミシヤグジは連れて来いや。

そう思っただけでここに来る前に聞いた所、「妖始がいればどうにかな

るでしょ、壁とか」なんてありがたい言葉を頂き、お礼に引つ叩いたのは完全な余談。

さて、何で俺達がそんな敵陣真っ只中にいるのか。その理由は別に難しい事でも何でもなく、とうとう諏訪の地にまで信仰を広げようとする動きを見せ始めた高天原の神々と不可侵条約の様な物を結びにきたのだ。様な、って言うのは単純にこの時代にはまだ条約なんて言葉が無いからで、特に深い意味は無い。

と言うか、『建御名方神』たけみなかたのかみじゃないんだな、名前。まあ、女って言うのは予想してたよ。洩矢も女だったし。

「私達は貴方には手を出さない。だから私達にも手を出さないで」

俺達　　と言うか、諏訪子の言い分はただこれだけ。諏訪子の奴もこれ以上信仰を広げるつもりは無いらしく、それ以上に神々の争いに信者達を巻き込む訳にはいかない、だそうだ。

まあ、諏訪子クラスの神同士がマジでぶつかれば、その被害は計り知れない。故に、諏訪子の判断は一土着神としては決して間違った物では無いし、むしろ正しい物だと思う。

「断る」

それを、八坂はにべも無く切り捨てた。

「何故……!!」

「何故？　そんな事も分からないか洩矢。そんな物、こちらに利点が無いからに決まっているだろうに」

諏訪子がいきり立つのも気にせず、八坂は呆れた様に言い放った。だが、それこそ何故だ。

少なくとも、諏訪子の勢力は今の日本では間違いなくトップクラ

ス。そんな諏訪子との不可侵条約。それを呑みさえすれば、一番厄介な相手と敵対する事無く日本全土に信仰を広げられる事になる。普通ならば、これは十分な利点となるはずだと言うのに、それを断つて諏訪子の率いるミシャグジ信仰と争う利点……ダメだ、思い付かん。

そもそも、俺はこう言う交渉事に関しては素人もいい所、思い付かなくても仕方ないだろう。だが、それなりの場数を踏んで来たはずの諏訪子までもが俺と同じ様に露骨に顔を顰めてしまっているとは……八坂の奴、一体どう言った見だ？

「ふん、高^{たか}が知れるな洩矢。いや、妖怪とつるんでいる時点で既にか？」

ニヤリと口の端を上げた八坂の言葉に、周りの神々から嘲笑が漏れるが、諏訪子にそれを気にした様子はない。あくまでも冷静に、八坂の真意を読み取るうとしている。

一応、俺がここにいるのは高天原の情報収集^{おこな}を行っていた穂波に、諏訪子のストッパーの役割を任されたって言うのもあるんだが、この分なら必要なかったんじゃないかなと思う。と言うか、むしろ付いて来た事で挑発の材料を与えてしまっている気がするんだが……。

俺がそんな事を考えていると、再び口を開いた八坂は、とんでもない事を言いやがった。

「第一、貢物も無しに攻め込むな、だつて？ 随分と都合のいい事を言うじゃないか、洩矢」

「……は？」

予想だにしなかった言葉に、俺と諏訪子から間の抜けた声がかかる。今、八坂は何と言った？ 貢物？ 不可侵条約で、貢物だと？

「私達には洩矢を避ける理由なんてないんだ、貢物ぐらいは当然だろっ?」

極当たり前の事を、極当たり前に口にしたのだと、八坂の表情はそう物語っていた。

つまりはアレか、八坂は洩矢やミシャグジ信仰なんかは眼中にないと、そう言っているのか?

なるほど、分からねえ訳だ……。

そもその前提からして間違っている。

今回の談合、諏訪子は八坂を、穂波の集めた情報から同格、ないし僅差で自らが上だと判断して臨んでいた。

信者の量やその信仰心の密度、そして単純な戦力。それらの差はほんの些細な事で入れ替わる程僅差。戦争が長引くのは、基本的に互いの戦力が拮抗している時だと決まっている。

諏訪子のミシャグジと八坂の神の軍勢、それらが長期間ぶつかり合えばどうなるか。少なくとも、土地も民も只では済まないだろう。そう判断したからこそ、諏訪子は八坂の元へと赴いた。不可侵条約を結ぶ為に。

だが、八坂達は違う。彼女等は諏訪子は取るに足らない格下と判断した。その判断が調査した上でのものなのか、それとも今まで土着神を侵略し、下してきたが故の慢心なのか……いずれにせよ、八坂達は完全にこちらを嘗めているのは間違い無い。

ブチリ。

その時、何かが切れる音がした。それも、俺からじゃなく、諏訪子から。

いや、そもそも諏訪子が今まで八坂の言葉に何の反応も示さなかったのは、それが挑発だと思っていたからと言う部分が多い。それ

が自分を怒らせる為の言葉だと、そう思っていたからこそ、諏訪子は冷静に耐えていた。

だが、それが全て本心で、本気で虚仮こぼにされていたのなら、そしてそれを理解したとしたら。 。
ソワリ、と諏訪子を中心に不可視の力が広がっていく。

そりゃブチ切れるよなあ！！ 恨むぞ八坂、面倒な事してくれやがって……！！

心の中で舌打ちする俺を余所に、深海にいる様な重苦しい空気が蔓延し、静かに、だが明確な怒りを伴った祟り神の禍々しい神力が場を侵食していく。

いや、神力の方はあくまでも意識している訳じゃなく無意識に漏れ出しているだけ 　　って、それどころじゃねえな。

壁際に座っていた奴等の殆どは諏訪子から漏れ出した力に完全に腰を抜かす、もしくは気を失いかけている始末。その点、僅かに瞳みしただけの八坂は流石と言えるが……と言うか、こんな中で平然としてる奴の方がよっぽどおかしい。

俺？ どう考えてもまともじゃねえだろ。それ位は自覚してるって。

と、それはさて置き、そろそろ止めないと不味いな。ここでやり合つのは色々と面倒な事に……なるか？

諏訪子の神気に中てられて殆どの神がダウンしてるからまともに動けるのはほんの数人。その程度なら一度に相手出来るし、一番の脅威だった数の暴力もなくなっているんだが……いや、それ以前にここじゃ駄目か。諏訪子の奴、今回はあくまでも会談だって言ってる奥の手も持って来てない。

少なくとも、俺は最初からこの一件の回避は無理だろうと思ってた。そりゃそうだ、俺が洩矢神社にいたこと以外は何一つ世界に変化が無いんだから。

幾ら諏訪子が家族同然に扱ってくれたとしても、元々部外者であり妖怪である俺は今回の一件が戦争になっても諏訪子の陣営として

参加出来ないし、するべきではないと思う。そもそも、本来なら俺はここに在るべきでないと思っっているのに。

だが、だからと言ってこのままなら負けると分かっている諏訪子を放っておける程物分りもよくない。だから、せめてイーブン。それぐらいまでは、勝率を調整させてもらう。だから、ここでやり合ってもらっちゃ困るのだ。

パン、と拍手を一つ。それで諏訪子の怒りを『否定』する。

あくまでも変化しやすい一時的な感情だ、その程度なら簡単に能力で干渉出来る。……それでもあまりに感情がデカ過ぎて若干厳しかったが、取り敢えず、これで諏訪子の方は問題無い。冷静さを取り戻したからか、既に部屋に蔓延していた神力も引っ込めている。さて、ここからは少しばかり俺の仕事だ。

素人がどこまでやれるかは分からんが、八坂が乗ってきてくれる事を祈ろう。勿論、デミュウルなんかの他称神自称地球意志なんかじゃなく、以前会った閻魔様辺りに。

「八坂サマ」

「……何だ妖怪」

今まで黙っていた俺が口を開いたからか、八坂の表情に僅かな猜疑心が宿る。

だがまあ、一言目から黙れなんかの言葉が無くてよかったって所か。少なくとも、話を聞く気はある様だ。

「今を見ても、洩矢サマの評価は変わりませんか？」

俺の言葉にピクリと、僅かにだが確かに八坂の眉が動いた。

「分かっているでしょうが、洩矢サマはまだ本気じゃない。先程のはあくまで抑えていた力が漏れ出しただけ。それだけで、洩矢サマ

はアナタの部下の殆どを行動不能にしましたが……それでも、洩矢サマは今までアナタ達が侵略してきた十把一絡げの神々と変わりませんか？」

八坂は俺の言葉に露骨に顔を顰め、壁際でグロッキー状態になっている自分の部下達を一瞥してフンと鼻を鳴らすと、

「そつだな……確かに、今までの輩とは違うようだ」
「……………」

「どうした、こう言う答えが聞きたかったのではないのか妖怪」

その言葉に面食ってしまった俺に八坂がニヤリと笑うが、正直、こつもあつさりと諏訪子への評価を覆すとは思ってなかつた。

部下の名譽を守るためか、それとも冷静に公平な判断を下せるからか……どちらにしても、ただの傲慢で相手を見下す訳じゃない様だ。と言う事は、今までの諏訪子への態度については戦ってきた土着神を鑑みての評価だったのか。

……実はいい奴なのかも知れない、と言うも可能性が頭に浮かんだが、それ以上に性格が悪そうだ。それに、もつと別の思惑だの何だがあるだけかもしれないし、いくら考えてもあくまで可能性でしかないので保留、今は俺のすべき事をしよう。

「だが、諏訪の地を奪う事を撤回しない、これは決定だ」

撤回してくれれば楽なのに、と毅然とした態度の八坂に溜め息を吐く。まあ、流石にそつちは最初から期待してなかつたが。

「では……こつしませんか？ 戦闘は八坂サマと洩矢サマの一对一。勿論、規定は無し。場所は諏訪の地。互いの神に被害が出ず、どちらが上かを決めるのには、ちようどいいと思います」

これが予め俺が考えていた策とも言えない様な策。愚策の中の愚作とも言っていい代物だ。

「話にならんな」

当然、八坂からは鼻で笑われた上に切り捨てられる。だが、それは予想済み。と言うか、諏訪子の要求すら通らなかつたのに、こんな洩矢陣営にしか利点がない様な要求が通るだなんて思っちゃいない。

「そうですね？ 八坂サマの部下の神々、こんな状況で戦いになりますかね？ 元から攻め込むつもりだったんですから諏訪の地で、と言つのも可笑しな話じゃないじゃないですか。こちらとしては、ただ悪戯いたづらに地を荒されるのを避けたいだけです。それに……」

「……………何だ」
「これぐらい受け入れる度量を見せてみるよ、この程度の不利、覆くつがえしてみろよ、軍神・八坂神奈子」

口八丁手八丁、戯言にすらならない屁理屈。挑発になっているかも怪しい言葉の羅列。

むちゃくちゃ言っているのは自覚しているが……悲しいかな、俺にはこの程度しか吐ける言葉がない。この時ばかりは自らの言語力の低さを憾うらやまむぞ。

「安いな」

と、俺の言葉に八坂はそう答えた。あまりにも安い挑発だ、と。やはり俺じゃ力不足だったか、と内心舌打ちしたい気分になりながらも、次善の策をいくつか頭の中で用意していく。

「それと、有利な状況を作り出すのも軍神の勤めだ。覚えておけ阿呆。だが」

八坂はふん、と詰まらなさに鼻を鳴らしたかと思えば、にやりと口の端を上げて、

「いいだろう。乗ってやるよ、その話」

俺が予想もしていなかった事を口にした。

周囲の神々が『八坂様!』と声を上げるのも耳に入らず、俺はただ、考えを張り巡らせていた思考が停止しさせていた。それはもう見事に。

「いいじゃないか、望み通り真正面から潰してあげるよ」

神様は願いを叶えるものだろう? と。

八坂はそう言って、さらに深い笑みを作る。

その言葉は、自らの力への絶対的な自信か、はたまた先ほどの一件から諏訪子の力を推測した上での判断故か……。

いや、どんな理由であれ、話を呑んだ事には変わらない。

ああ認めよう、確かにアンタは諏訪子と同じで並じゃねえよ、八坂……。

今はただ、明らかに自分が不利になると分かっている尚、話を呑んでくれた八坂に心の中で敬意を表しつつ、最後に、

「三日後、洩矢神社だ。そこにアンタと諏訪子の戦場を用意しておく」

「いいだろう、精々回りに被害が出ない様に神様にでも祈っておきな、妖怪」

そう言葉を交わし、俺と、それに合わせた諏訪子は席を立ち、その場を後にするのだった。

狼と祟り神。対峙するは軍神（後書き）

超難産www原作キャラとの会話超キツイすwww

神奈子様のはきは風神録魔理沙ルートを参考にしました。と言うか、カッコよくなりすぎて作者がビツクリwww

そして主人公凡人化。いや、正確には最初から凡人です。戦闘スペックと能力以外は基本的に凡人。作者基準の凡人なので違和感を感じず方はいらつしやるかもしれませんが、こればかりはどうしようも……。以前、感想で弱くなった、と指摘され、そんな事ありませんよと答えたのですが、申し訳ありません。前言撤回、能力などの細かい独自設定でどう考えても改定前より弱体化しております。それらの設定も、また次回あたりで。

そして後半諏訪子様が空気になってしまつて反省。でも次回見せ場あるよ！主に諏訪子様と神奈子様！！主人公？ああ、そのうちあるんじゃないけどwww

と言う事で、謝つてばかりの1話でした。また次回ノシ

狼と崇り神。 決戦前夜の晩餐（前書き）

真面目に書いて一ヶ月オーバーwwwやっぱり会話文は苦手ですw
ww

狼と祟り神。決戦前夜の晩餐

軍神・八坂神奈子との会談から二日間、俺達　　俺、諏訪子、穂波の三人は決戦の準備の為にそれぞれ東奔西走していた。

決戦の当事者である諏訪子は奥の手の準備、その後は力を蓄える為本殿に引き籠もり、穂波は何か考えがあるのか諏訪王国を飛び回っている。

さて、そんな中で俺が何をしているかと言えば　　。

「……これで最後だな」

ふっ、と短く息を吐くと共に手に持っている一本の刃渡り三十七センチ程の小刀を突き立てる。

俺の仕事は諏訪子と八坂が全力でやり合える場所を作る事……：そして、真っ白な、反りが無い諸刃の刀身に、鏝も付けてない質素なデザインのそれ小刀を設置していくのが結界を張る為の準備。

今俺がいる洩矢神社の裏に広がる森には、巨大な円を描く様にして小刀を等間隔に設置されている。

この刀の刀身、大昔に抜けた俺の牙を削り出して加工した物であり、長い時間を経て『固定』と言う概念による概念武装になっている。犬歯から削り出した、小刀の刃渡りをメートル前後まで伸ばした様な剣が『斬る』に特化している辺り、恐らく歯としての役割がそのまま出ているんだと思うが、今回その中でも犬歯を除いた刀

総数三十八本、それら全てを使用して結界を展開する。

結界には霊力を使う……：と言うか、それ以外に結界として活用できる力がねえんだよ、残念な事に。

それぞれの力には特性がある。共通点と言えば精々圧縮してそのまま打ち出せる程度。

妖力はもっぱら五行や四大元素に変換したり幻術などによる妖術、

霊力や妖力の上位交換たる神力なら使い方次第で結界も張れるが、純粋な神と言う訳でも今も尚信仰を受けている訳でもない俺は、一度使ってしまうえば霊力や妖力と違って消費した分を回復する事が無い……それで、他二つと比べると些か密度や量に不安があるが、道具を媒体にして術を発動させる事が出来る霊力を使わざるを得なくなってしまうた。

尤も、刀を設置するのはその密度や量を補う為で、刀の一本一本に前々から 具体的に言えば数千万年前ぐらいから、霊力を溜め込んでいたのだが……まあ、そんな事をしていたのも、大昔にデミュウルが、

『こんな事もあるうかと、って感じでやっくとくとええで！ 備えあれば憂い無しやー！』

なんて事をぬかしてたからなんだが、アイツ絶対にこの事見越してたよな。またか？ またアカシックレコードか？ ……って、今はアイツの事はどうでもいい、先に結界だ。

今回の結界、刀で描いた円を霊力を流すラインとして『固定』、そこに霊力を流し込んで円状の結界として形を『固定』する事により、枠組みである円に沿って外と中を力尽くで物理的、靈的に遮断する仕組みになっている。ついでに、俺の能力による概念操作で結界自体を補強、刀に溜め込んでいる霊力は保険として結界が壊れそうになった場合のブースター役として活用する。ブースターまで出すのは少しばかりやり過ぎ感もあるが、今回はそれぐらいしておかないと本当に結界が崩れかねない。

本当なら、俺の『肯定と否定を操る程度の能力』で結界の『崩壊』の概念だの何だのを『否定』さえすれば保険なんて必要ないんだが、残念な事に能力には限界がある。

いつかも言ったと思うが、俺の能力の本質は『世界の書き換え』。つまり自分の認識で現実を捻じ曲げる事が可能なのだ。例えば、在

るはずの無い物を『在る』と『認識』^{こがてい}する事によって、本当にそれを作り出したり、本来在る物を『無い』と『認識』^{ひてい}する事によって消し去つたりと、本当に便利……なのだが、完璧な物なんぞこの世には無い。

能力つてのは、結局の所単純な力比べだ。どれだけ使いこなせるか 熟練度と言い換えてもいいが、その一点が重要になつてくる。一見万能に見えても、使いこなせなきや意味がないだろ？

そして、相反する力がぶつかり合った時、強い方が勝つのは当然の摂理。もう何度挑戦したかも覚えてないデミュウルへの挑戦の時、どんな概念を使つても当たらなかつたのも単純に能力の絶対値がアイツ自身よりも低かつたと言つのが原因だけあつて、そこらへんは身に染みて実感しているさ。

そして今回、結界の中でやり合うのは八坂と諏訪子……片方ならまだ兎も角、両方同時となると『死』と『老い』に回してる分以外
の能力 約三割強を結界につき込んで防げるかどうか……。

いざとなれば、『死』や『老い』に回してる分も注ぎ込まなきやいけないかもなあ。正直、万が一の可能性として、八坂の部下共が暴れだす可能性もあるから、不死性は解除したくねえんだが。

こっちは八坂に、「部下を犠牲にしないで済む」つて建前で一騎打ちを申し込んでるだけに、向こうに非があつたとしても殺しちゃう訳にゃいかんし、いくら『第三思考』があろうとも肉体のスペックを超えて動けるつて訳じやないからなあ。いや、その為の霊力のブースターなんだし、役に立って貰わなきや困るんだが。

ああ、もう色々と面倒臭い。面倒臭いが

「まっ、何とかなるだろ」

楽観的にも程があるが、いくら考えても未来の事なんぞ俺にゃあ分かん。俺に出来る事と言えば、精々必死こいて裏方に徹する事ぐらいだ。なら、俺はそれをやり切るだけだ。それが、俺がここに

いる理由でもあるんだから……。

俺はそう結論付けてゴチャゴチャと頭に広げていた思考を打ち切りると、最後に設置した小刀に異常がない事を確認すると、諏訪子達がいるであろう母屋の方へと向け、歩き出した。

その日の夕飯は、今までにない程豪勢で、賑やかな物となった。

猪だったが、普段は祭事の時にしか出されない肉が振舞われ、三人共が羽目を外して　それこそ、半ば下戸である穂波ですら酒を呷る程。たった三人ではあつたが、豪く賑やかで楽しく、そのあまりにも楽し過ぎる夕餉ゆづけは、まるで。

「……ハッ、縁起でもねえな」

本当に縁起でもない、と。

口の中で呟いて、徳利を呷った。

いつかの様に縁側で月を眺めながらの月見酒。前と違う所と言えば、酒の肴に周りで鳴く蟋蟀こしむしの音が追加されてる事位か……。

さっきまでの嫌な考えを打ち払うかの様に、もう一度徳利を呷る。

「つと、来たか」

後ろから近付いて来る気配を感じ取った俺がそちらへ視線を向けるのとはほぼ同時に、

「隣、座るよ」

諏訪子はそう言つて、俺の返事も聞かないで俺のすぐ隣に腰掛けたかと思えば縁側から垂らした足をブラブラと揺らし始めた。ついでに、俺の徳利を奪つていくと言つておまけ付き。いつもの帽子は被つてないが、きつと部屋にでも置いてあるんだろう。わざわざ気にする程でもない。

「……おい」

「気にしない気にしない」

俺は半眼で諏訪子を睨み付けるが、諏訪子は何が楽しいのかケロケロと酒を飲みながら笑うばかり。……いや、いいんだけどさ、流石にそこまで傍若無人なのはどうよ。と言つて、穂波はどうした。

「布団に寝かせてきたよ。穂波つてば、相変わらず酒に弱いよねー」
「普段飲まねえからなあ……」

穂波の奴、宴会で賑やかに食事を取っていた時には問題なかったのだが、諏訪子が折角だから、なんて言いながら酒を持ち出すと、早々に酔い潰れてしまった。つて、ちよつと待てよ。

「ひい、ふう、み……」

と、今日だけで消費された酒瓶の数を指折り数えながら、頭の片隅で俺が飲んだ分と諏訪子が飲んだ分を計算して……三升ぐらいか？穂波が飲んだ分は。えつと、一升が約一・八リットル程度だから……五・四リットル？

前言撤回。人間でそれだけ飲みりゃ十分普通じゃねえよ。むしろ、

それ以上飲んだ上で、まだ飲もうとしている俺らもかなり異常だが……まあそこはほら、人外だからって事で一つ。

「って、いい加減返せ。一遍に飲みすぎだ」

笑顔で徳利を傾け続けていた諏訪子から徳利を奪い返してみれば、そこにはもう随分と軽くなってしまった徳利が……。

「って、マジで飲みすぎだろ！！ 満杯だったんだぞ！？」

そう言っても、諏訪子は何が楽しいのか笑ったまま。……何を言っても無駄、か。

そう悟った俺は溜め息を一つと共に能力を発動して能力で徳利の中の酒を元に戻すと、再び重くなった徳利に口を付けた。

諏訪子も一頻り笑うと満足したのか、二人しかいない縁側に沈黙が訪れる。決して重苦しい物ではない、柔らかな、居心地のいい沈黙。聞こえるのは蟋蟀の鳴き声だけ。そんな中で、二人とも何も言わず、ただただ空に浮かぶ中秋の月を見上げていた。

「ごめんね」

どれほど時が経っただろうか。月を見上げたまま、ポツリと諏訪子が口を開いた。

「神わたしたち同士の争いに巻き込んだじゃって。……それと

ありがとう……。

そう言った諏訪子を横目で伺えば、月明かりに照らされたその表情は、どこまでも穏やかで、だからだろうか、どこか不安を覚える

様な　　そんな形容し難い感情を胸に去来させるもので、

「……随分と、らしくねえなあ」

その感情を振り払おうと空に視線を戻しながら茶化す様に言えば、「かもね」なんて本当にらしくない言葉が返って来た所為で、思わず熱でもあるんじゃないだろうな、と疑ってしまった。

「……何？」

「いや熱でもあるのかと」

熱を測ろうと額に手を当ててみたが、俺の言葉を聞いた途端に口を尖らせた諏訪子に払われてしまった。

何だよ、真面目に心配してたつて言うのに……分かった、分かったからそんな目で俺を見るな。

「ふん、何さ。折角私が真面目な話してたつて言うのに……」

諏訪子の奴、どうにも拗ねてしまった様で、俺から徳利を奪い取ると頬を膨らませたまま一気に呷り始めてしまった。

少しばかり悪ふざけが過ぎたかなあと、そう思っただけで、と苦笑いしながら諏訪子の頭をポンポンと軽く叩く。身長差の所為で、俺と諏訪子が横に並ぶと座っただけでも頭が手を乗せるにちょうどいい具合の位置に来るのだ。いつも子供扱いするなとか何とか言っただけで振り払われるんだが、どうにも癖になってしまった様な気がする。何と云うか、柔らかいんだよなあ、諏訪子の髪って。……癖になる？　って言うのかねえ。女の子は皆こんなもんなのか……？

なんて事を考えていたのだが、気付けば今日に限って諏訪子は俺の振り払わず、頭の上に手を乗せられたまま徳利を手に大人しくしている。……マジで大丈夫か、コイツ。

「実はね、私ってあんまり戦った経験ってないのよ」
「……前に一度聞いたな、それ」

いつの祭りだったか、酒に酔った勢いで諏訪子が自分の昔話を披露してた事があったのだ。尤も、そうだった？　なんて言っただけを捻ってる所を見るに、当の本人である諏訪子は覚えてない様だが……。

「あー、今の信仰の大本はミシャグジ信仰であり、洩矢は後からそのミシャグジの統率者として神格化した」、だったけ？」

もう数十年前になるだろう、うる覚えの覚束ない記憶を探り出してみれば、諏訪子がそうそう、と相槌を打つ。

どう言う経緯でそうなったかは知らないが、聞いた話によれば諏訪子はそれなりの信仰を得ていたミシャグジから統率者、と言う形で信仰を乗っ取ったそうだ。血が流れる事か否かの違いはあるだろうが、結局の所、諏訪子も今回の八坂と似た事を　　と言うよりも、神って言う種族は多少の違いはあれどやってる事は変わらな　　いと言う事だろう。いや、もしかしたら諏訪子の場合は今回の件と違って、ミシャグジに抵抗すらさせなかったと言う点においては八坂よりもエグイのかも知れない。

「その後も、信仰は広がっていったけど戦闘になる事は少なかったし、戦闘になった時も対等とは言いが難かった……。それだけミシャグジの信仰って言うのは大きかったのよ」
「へえ……」

それを聞いたのは初めてだな……って、以前話を聞いた時には酔ってたし、俺も話半分に聞いてたっけ。

「だから、私と対等の相手
初めてなんだよ」

負けるかもしれない相手って、

そう言つて、僅かにだが確かに表情を曇らせる諏訪子を、意外だと思つた。

コイツでも、こんな表情をするんだと。

コイツでも、不安を感じる様な事があるんだと。

そんな顔をしている諏訪子を見ていた俺は、気付けば、えいつと言つ気の抜ける掛け声と共に
諏訪子の頭に乗せていた
右手で、その頭を叩いていた。

「あつっ?!」

いきなりの攻撃に虚を突かれた諏訪子は、頭だけでなく上半身毎のめり掛けてしまった様で、手をワタワタと動かしどうにか地面に落ちるのだけは回避して、ホッと一息を吐いたかと思えば、すぐさま俺に向かつて、何するんの!と頬を膨らませて分かり易く怒つてるぞと言つ視線を超越す諏訪子に、そっちの方がらしく見えるのはどうなんだろうなあ、と苦笑いしつつも口を開く。

「何弱気になつてんだ、らしくもない」

「むっ」

フンツと鼻を鳴らしながらそう言つても、諏訪子は口を尖らせるだけで何も言わない。どうも、本人も自覚はしていたらしい。

まあ、今までに経験した事もない様な大一番。それも対等かそれ以上の相手との命のやり取りだし、不安を感じるのも当然の事だろうが……まあ出来る事をやるって言つ方針は変わらないし、そういう不安を取り除くのも友人の役目って事で一つ。あー、こつ言つ頭

使うのは苦手なんだが……。

「諏訪子、お前は何だ。洩矢の祭神、ミシヤグジの支配者だろ。何を弱気になってやがる。自信を持ってよ、お前は間違いなく土着神の頂点なんだからよ。……それに、いざとなれば」

「いざとなれば？」

俺はそこで一度言葉を切ると、手に持っている徳利に口を付て一口。どこか期待している様な視線を俺に向けつつ、言葉の続きを気に掛けている諏訪子に、ニヤリと口角を上げて精一杯の決め顔で、

「いざとなれば、穂波が何とかしてくれるだろ」

「……………」

沈黙は何よりも雄弁である、そんな言葉を今以上に実感した事はないんじゃないかな。と云うか、視線が物凄く冷たく感じるのは気のせいだと思いたいんだが……何だよ、その半眼は。

「いや普通さ、こつこつ時って『俺が何とかしてやる』って言うものじゃないの？」

どこでそんな知識を付けて来たのかは知らんが、
俺だっけ、そう言うの教えたのは。でもそう言う台詞よりも、こつこつ

ちの方が俺らしいと思うんだが。

「駄目な方向で凄く合ってると思うよ」

……あー、不味いな、どうも言葉と視線に棘がある。そんなにお気に召さなかったんだろうか。と言うか、元気付け様として不機嫌にになってしまう辺りにも俺らしさが出ている気がする。全く必要は無いが。

「まあ、最初から妖始なんか頼る気なんてないけど」

諏訪子は軽く溜め息を吐きながらそう言うと、裸足のまま地面に足を付けた。そしてゆっくりと。足元確かめる様に、思わず目を細めてしまう程の月明かりの下で、広く、僅かに花が咲いているだけの殺風景とも言える神社の庭の土に、足跡を残しながら、歩を進めていく。

何となくではあるが、さっきまでとは諏訪子の雰囲気が変わっている気がする。その所為でどうにも声を掛け難かったのだが、ちょうど諏訪子が庭の中程で立ち止まった。

「諏訪子？」

それを皮切りに声を掛けようと名前を呼ぶが、当の諏訪子は何も答えず月を見上げている。

いつの間にか虫の声も止まり、俺達二人　　いや、俺が一方的に感じているだけだろうが、何とも形容し辛い沈黙が流れていく。諏訪子との沈黙程度、普段なら何ともないのだが、今の様に諏訪子が何をしたいのかがわからない様な時なんかには、僅かにだが、どうしても居心地悪さを感じてしまう。

「うん

」

月を見上げたまま、何かを決めた様に
ともしれば、腹
を括った様に一度頷けば、ふわりと短めのスカートを翻しながら振
り返る。

「大丈夫だよ、絶対勝つから」

その時の諏訪子の表情には、陰りなんて物は存在せず、いつもの
様に
否、いつも以上に自信に満ちていて。もはや、何
の憂いもないと言うかの様に、柔らかく微笑んでいた。

月明かりを背に佇む諏訪子は、その夜空に映える金色の髪も合わ
さり、まるで一枚の絵画の様な美しさで。

例え、結果が敗北だと分かっているとしても信じたいと、
そう思わせるには十分で……。

「ああ、信じてるよ」

俺は今度こそ、間違いなく精一杯の決め顔で、そう答えるのだっ
た。

「ふう……」

徳利から口を離して一息吐く。

今、この縁側にいるのは俺一人だけ。諏訪子はいさつき寝ると言つて部屋に戻つたし、今頃は既に床に就いている事だろう。

そして一人になつた今、考える事はやはり明日の事だつた。

今回の一件、万が一がないとも言えないが、恐らくではあるが諏訪子は負けるだろう。俺が関わらない以上、そこに不確定要素は一切ない。一度辿つた道をなぞつて行くだけになるだろうと思う。

頭の片隅にあるのは、昏間に穂波に聞かされたいくつかの保険の中の一つ。敗北を条件とした、諏訪子の生存の為にだけに準備したらしい保険とも言えないお粗末な案。何せ敗北したにも関わらず生存させる為の策だ、上手く行けば多くの利が得られるが、確率は限りなく低い様に思える……つて言つても、協力はするけど。一応、俺にも仕事があるみたいだし。

万が一が起きず、諏訪子が敗北する事になれば　まあ、その時は精々命ぐらい賭けよう……。

本来なら吹けば飛ぶ様な軽い人間の命だが、折角不死の体とセツトなんだ。友人の為に使うのも、悪くないだろ。穂波の策だつて、死に物狂いでお膳立てしてやる。それでも上手く行かなかつたら、諏訪子や穂波を連れて他国に逃げるのもいいだろう。それぐらいはやってのけて見せるさ。

「まあ長い付き合いの友人の為だ、多少の無茶も、偶にはいいだろ……」

縁側に腰掛けたままだが、諏訪子がそうした様に、月を見上げる。腹は括つた。後はなるようになるだろうと、再び徳利に口を付けた。

夜が明ける。さあ、幾度となく繰り返されても結果の変わらない
出来レースの幕開けだ。

狼と祟り神。 決戦前夜の晩餐（後書き）

さて、前回の予告をぶった切ってまたもや丸々一話説明文や会話文だらけでございます。上手い人ならもつと綺麗に説明文を盛り込むんだろーなー、と自分の力量のなさを嘆く羽目になった作者の目だまです。

どうしてこんなに長くなったんだろう、今回でバトル始まつてるはずだったのに……。

<http://3409.mitemin.net/i31310/>

そして友人の描いてくれた妖始くん公開。友人の一存（主に面倒臭いと言う理由）でちよこちよこ変更されてますが、大体こんな感じ。まあ顔は怖すぎるけどwww

次回、と言うか今回の最後辺りから作者の中二病が炸裂。

じゃ、感想や質問、アドヴァイスがあればお気軽にどうぞ。勉強しろっていうツッコミは無粋だー！！

《一度限りの次回予告》

幕を開けよう。それは何度繰り返しても結果の変わらない出来レースだが、それは何よりも心躍る出来レースだ。何度でも見たくなる演劇の様に。何度でも見たくなる小説の様に。

最高の見せ場で最高の殺陣を。脇役は舞台袖へ。並び立つは二人。方や土着神の頂点たる祟り神。方や勢力を爆発的に伸ばしている軍神。

これより先、二人の間に入る者はいない。

ラストに相応しく、華々しく飾って魅せよう。

……あれ、これって逆に自分でハードル上げてないか？
……き、期待せずにお待ちください！！

崇り神と風神。 始まる大戦。 狼は蚊帳の外（前）（前書き）

長くなりそうだったし、もう一ヶ月放置しちゃってるんで投稿。

暇潰しにツイッターとやらを始めたはいいものの、特に使い道が思
い浮かばず。登録その物が暇潰しでした（笑）

URL：<http://twitter.com/#!/media>
ma89135

追記。妖始の服装について一切触れてなかったのをつい忘れており
ました。本編の方へ追加しておきますが、遡るのが面倒な方様にこ
こにも載せておきます。

・ 白い広袖の着物に黒の袴。基本的には着物は襟元を緩ませており、
袖に小さな黄色い羽根の装飾があしらってある。旅人の守護天使で
あるラファエルの加護が施されているが、残念な事に効果は無い。
足は素足に底に鉄板を仕込んだ下駄。

祟り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）

日は既に高く南中に近付き始めた頃、彼女は現れた。数十に及ぶ部下達を引き攀れて飛行し、威風堂々と胸を張りながら、彼女

八坂神奈子は洩矢神社へと現れた。

三日前に会い見えた時と変わらず、俺の貧弱な語彙じゃ説明の仕様が無い奇抜な髪形と服装。そして、以前には無かったはずの、まるで軍艦の砲台かと思紛う様に背負った四本の六角柱。その一本一本を形作っている、あまりにも膨大な神力が触れている訳でもないのにチリチリと俺の肌を焦がす。神力の浄化作用は俺が物ノ怪もののけに属するが故なのだが、それでも離れている相手まで浄化する程の神力なんて言う物は類を見ないの言うまでもない。

本来ならその柱の背負い方などはツツコミ所なのかも知れないが、残念ながら今回は俺の出番もおふざけも無しだ。まあそれでも言わせて貰えるならば、

「遅え！！」
おせ

「それは時間を指定しなかったそちらだろうが。私を知る物が」

はい、全く以ってその通り。全部時間の指定を忘れていた俺の落ち度であるのだが……まさか昼前に来るとは思わなかったんだよ。夜明けから待ち続けてぐったりだぞ畜生。

はあ、と溜め息を一つ吐いて頭を掻きながら気持ちを切り替える。ここからはマジだ。真剣と書いてマジと読むぐらいマジだ。

「洩矢は」

「こつちだ」

案内するのは当然昨日下準備を済ませておいた広大な森。既に諏

訪子も待機している。

普段はそれなりの賑わいを見せているにも拘らず、今日ばかりは静寂に包まれている境内の中、人数分の足音が響く。

俺と諏訪子がよく使っていた縁側を抜けて神社の裏手に出れば、そこにあるのは境界線。結界の、内と外を隔てる俺の線^{ライン}。

「最後に確認しておく。ここより先に進むのは八坂神奈子一人」

「ああ。他の奴等はここで見物させておくさ」

「開始の合図は特に設けない。強いて言うなら、俺が結界を張ってからだ」

「精々頑丈な物を用意しろよ、妖怪」

最後に軽口を叩く八坂に恐れは無く、そこにあるのは絶対的な自信のみ。

さて　　ここからはテメエの仕事だぞ、諏訪子。

願うは諏訪子の勝利。確信するは諏訪子の敗北。その矛盾する二つの思いを抱きながら、俺は八坂が境界の中に入るのを見届け、結界を張る為の霊力を線^{ライン}に流し込んだ。

八坂神奈子が境界を越えるのと、結界が張られるのに殆どタイムラグはなかった。

妖始によって流し込まれた霊力が牙から牙へと駆け巡り、刻まれた術式に従って不可視の壁を形成するまでの間は僅かに一瞬。

その発動速度は勿論の事、三十八の牙によって『固定』される事で強度も申し分無く、それには神奈子も思わず舌を巻く程の物だ。元より神奈子自身も、一大勢力の主神である諏訪子が何の理由も無く妖怪を手元に置くとは微塵も思っただけだ。

それでも、神奈子にとっては、妖始がここまで出来ると言うのが予想外だったのだ。

確かに、妖始が膨大な妖力を隠しているのに気付いてはいた。気付いてはいたが、神奈子が感じたのはそれだけだ。

才を見抜く事は神霊にとって当たり前前の技術ではあるが、その中でも少なからず自負心を持ち、それを武器の一つとしていた神奈子にとって、何の才覚も見受けない妖始は、ただただ膨大な力を持つただけの、それに振り回される、身に合わぬ袈裟を着た凡夫にしか感じられなかった。だと言うのに、いくら補助があるとは言えこのレベルの結界を張って見せる。それは、妖始が神奈子の印象に反して、想像し難い程長い時間の中を生きてきた事を察させるのに、十分な物となりえた。

(少しばかり見誤ったが…… 契約を破る事はあるまい)
今はそんな事を気にしてもしょうがない。そう考えて神奈子は、ならば、目の前の戦いに集中するだけだ、と眼前に広がる森を見据える。

既に神奈子の優先順位は結界を張った妖始から諏訪子へと切り替えられている。今の所、神奈子には諏訪子が何か仕掛けた様には感じられない。

先程までの僅かな間を隙と言えるかは微妙だったが、仕掛ける機会があったのは間違いないだろうに。

(何も仕掛けて来ないのは慎重になっているからか、それとも既に仕掛けられているが私が気付いてないだけか……)

恐らく、前者だろうと神奈子は考える。何か変化があれば、気付かない筈がない、と。

そして更に一步、森へと近付いた時
地面が沈み込んだ。

「なっ
!?」

余りに予想外の事態に神奈子は驚愕する。

泥沼に踏み込んだかの様に、右足が抵抗無くズブズブと音を立てて地面に飲み込まれ、右足を引き抜くより早くそれは瞬く間に広がって左足までも飲み込んでしまう。

八坂神奈子の勘違いはただ一つ　そも、諏訪子には先んじて何かを仕掛けておく必要などないと言う、ただそれだけの事だ。

『坤を創造する程度の能力』。坤とは則ち『地』。無から大地を生み出し、自在に操る　それが洩矢諏訪子の持つ、地に宿り長い間を共にしてきた土着神の頂点足り得るの能力。

彼女にとって大地は一つの例外もなく彼女の支配下であり、更にこの諏訪は彼女の箱庭だ。
仕掛と言うのなら、常に仕掛
けられている。

地を踏む振動は諏訪子に居場所を伝え、神奈子が二歩目を踏み込むと同時に地の密度を低く、そして低くなった所へ上から密度の高い地を流す　察知も回避も出来る筈がない絶対の罫。

既に神奈子の脚は太もも辺りまで飲み込まれ僅かに動かす事すら困難となっている。

「チツ
!!!」

捕らえた獲物を更に深く地の底へと引き摺り込まんとするそれから舌打ち混じりに空へと抜け出す。踏み込みが必要となる跳躍では

なく、浮遊や飛翔の類で、洩矢神社に訪れた時と同じ様に宙へと飛ぶ。

地で身動きが取れないならば空へ。それは空を飛べる者にとって当然の思考であり、地に居座り続けるそれからの唯一の逃げ道である。故に、その考えは至極読み易く。

宙へ飛び上がった神奈子の視界に写ったのは、突き抜ける様な青の中の、シミの様に黒い、間違い無く狙い済みし用意されていた鏃やじりの如き無数の巖いわお。

そして

その全てが雨の様に降り注ぐ！！

巖は矢となり衝撃を撒き散らし、砂の粉塵が辺り一面に立ち上る。巖はどれも必殺の威力を誇る文字通り神技。だがそれでも尚、身を潜めている諏訪子は決着だとは思っていない。

確かに諏訪子の罫と巖、それらはいずれも神掛かった最高のタイミングだったが、忘れること無かれ。神奈子も諏訪子とほぼ同格、それも戦を本領とする軍神と称される神霊である事を……。

「……？」

彼女の見上げる視線の先、未だに立ち上り続けている粉塵に感じた不自然さ。

（あれ、長過ぎない……？）

既に一分近い時間が流れようとしているのに、粉塵は収まらずに宙に浮き続け　その形を、上空で球体へと変え始めた。

「　　」

それと同時に結界内に吹き抜ける突風。砂を巻き上げたそれから、諏訪子は顔を庇う様に袖を翳すかき。その風が収まり、諏訪子が腕を顔

から外して見上げれば、さっきまで球体を作っていた粉塵はなかったかの様に、堂々たる様で。その体に、幾重にも重なり複雑に絡み合う風の衣を纏って。

「……………」

無言。神奈子は何も言わず、ただただ眼下に広がる森を見下ろしに戦える者を見付けたが故か、はたまた別の意味があるのか

それは本人にしか分からず、それ以上理由を推測するよりも先に抑え切れずに零れた笑みはすぐに表情から消えてしまう。

神奈子は右手を無作為に突き出し、指先で小さな円を描き始める。まるで、何かをかき混ぜるかの様にゆつくりと、しかし一周、二周と、徐々に描かれる円は大きく、速くなり　　気付けば、結界の中を風が吹いていた。不可視の壁に覆われているにも関わらず、確かに。

神奈子の指の、手の、腕の動きに合わせて、徐々に激しく、徐々に速く。

葉を揺らすだけだった微風は、木々を揺らす烈風へと姿を変え、土を巻き上げるだけだった旋風は、森を根こそぎ蹂躪する竜巻へと豹変する！！

僅かに十数秒。たったそれだけの時間で、広大な森は一掃された。根こそぎ、草すら残さず　　荒れ地へと変えられてしまった。

『乾を創造する程度の能力』。乾とは則ち『天』。天を支配するその能力は、気流だけに止まらず、天候すらも意のままであり

信仰を侵略で広げてきたが故に軍神と称されるが、その本質は間違い無く風神である八坂神奈子に、これ以上なく相応しい能力だと言える。

そして、その風神の猛威が存分に振るわれ荒れ地となった森のほぼ中心地。周囲のあらゆる物が存在する事を許されず吹き飛ばされた筈のそこには、いくつもの岩を積み上げて造られた酷く目立つドームの様な物体が鎮座していた。

「無茶苦茶ね、まったく……」

次いで、竜巻が消えたのを感じたのかドームを構築している岩が崩れる。中からは現れたのは当然だが、辺りを見渡して呆れた様子の子の諏訪子。そして空に浮かぶ神奈子を一瞥すると、すぐさま予兆無しで創造した新たな岩石を打ち出す。

大地から放たれた神奈子を撃ち抜かんと迫る岩の弾幕を前に、神奈子は動かさず
残像を作り出しながら神奈子へと一直線に疾走する岩が彼女の体を貫く直前、その軌道がぶれた。

神奈子は動けないのではなく、動かない
動く必要が無く、一見すれば先の岩の軌道は物理法則に反した現象だが、その異常には、異常なりの法則が存在する。

確かに、諏訪子はあの攻撃で仕留められるとは微塵も思っていなかった。それでも、回避されようが迎撃されようが、手傷を負わせる程度は可能な攻撃だったはずなのだ。それを無傷でやり過ぎさせた。

ならば、そのタネは早々に見破っておかなければならない。

放った飛礫はその法則を看破する為の
巖を回避した神奈子の仕掛けを解き明かす為の攻撃だったのである。

「ふうん……風で軌道をずらしてるんだ。さっきのを避けたのもその風って訳ね」

「クツクツ……早いな、たった一回で見破るか」

そして、諏訪子の目論見を理解しておきながら、神奈子はあえてそれを回避せずに大人しく受けたのだ。諏訪子を試す為に。何度目でタネに気付く事が出来るか、それを試す為に。

「クツクツク……」

故に神奈子は笑う。諏訪子が自らの予想を裏切って僅か一回でそのタネに気付いた事に。この相手は、全力でやってもよさそうだと。

「フフフ……」

それを受けて諏訪子も笑みを浮かべる。目の前の相手が、何の遠慮手加減もなく全力で叩き潰すべき相手だと。初戦の相手に相応しい相手だと。

戦闘を始めて既に十数分経過して、初めて二人は真正面から対峙する。

天に住まう八坂神奈子と地に根付く洩矢諏訪子。

『乾』と『坤』

『天』と『地』。

『大和の一柱』と『土着神の頂点』

『風神』と『崇り神』

その姿形やあり方、そのいずれをとってもあまりに対照的な二人。場を耳が痛くなる様な静寂が支配する中で、二人は互いに何も言わず、ただただ睨み合う。

双方、通常であれば既に動く所が存在を保つ事すら困難になる様な莫大な力行使したにも関わらず、汗はおるか呼吸すらも乱していない。それはつまり、あれだけの事を為しておいて、それでもこの二人にとってはただの様子見に過ぎないと言う事だ。

だが、それももう終わる。既に先程のやり取りで、二人は自らの中であつたイメージと実際の戦力との誤差修正を終了した。

ならば、これ以上の様子見は不要。後は全力で相手を叩き潰すだけだ。

あまりに異常で、あまりに非常識。人智なんて物が及ぶ範囲を遙かに超える、たった二柱の神による戦争が、始まる。

崇り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）（後書き）

今回のお題は「三人称でどこまでバトルを描写できるか」と「原作キャラを格好良く書きたい」の二つ。

サブタイの（前？）は後どれぐらい掛かるか分からないから。さすがに（中）はないと信じたい。

文章力向上の為、感想や注意点などありましたらドンドンお寄せください。

八坂サマの能力の内容に関しては作者の妄想なのでご注意を。原作で使われた事はないんじゃないかな！。

崇り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（中）（前書き）

本当はね、去年のうちに投稿するつもりだったんですよ……でも終わらなくて……しかも三部構成にまでなっちゃったと言っ……。
まあ、言っなれば作者の全力。

祟り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（中）

人の目には映らず、理解も出来ず。だが確かにそこには二つの膨大な力が存在し、世界を変えていく。侵して、塗り潰して、自らの色へと染め上げて。結界によって区切られた世界を蹂躪して変貌させ、その間にも二つの力は鬨ぎ合い拮抗し、そして静寂が生まれる。

既に結界の中は異界。一切の穢れを浄化し、不要な物を切り捨て、空間その物を楔みそぎ、昇華されたそれは、神がその力を十全に発現させる為の一種の神殿。神が踊る為の舞台。

そして、唐突に。

静寂を打ち破って、打ち合わせたかの様に二人は 洩矢諏訪子、八坂神奈子の両柱は動き出した。

諏訪子が両の手を叩き付ける様にして地に触れば、共鳴するかの如く大地が波打ち、神奈子が右手を空に向け軽く挙げれば、抜ける様な秋晴れの空を暗雲が覆い尽くし 撃ち出される飛礫ぶいてと降り注ぐ霰あられの弾幕。どちらも大きさは人の頭程、一つ一つに込められた力も同量同質、そして無数の弾丸は意のままに操作可能。…… そうなれば当然、互いの弾幕は相殺し合い、相手に届く事はない。

状況を崩そうと神奈子が霰の数を増やせば、お返しとばかりに諏訪子も飛礫の数と込める神力を増加させる。

同等の力を持つが故の拮抗。正攻法では決して広がらない力の差放たれた傍から砕け散る飛礫と霰の欠片が大気を彩る中、埒の明かない鬨ごっごつこに苛立ちを覚えたのは、神奈子の方が先だった。

拮抗を崩す事を決断するまでの思考時間はほぼゼロ秒ノータ임。

神力に形を与える。神奈子の右手に現れたソレは、彼女が背負っている物とほぼ同形の御柱。力の量や質で言えば背負っている物に劣りはするが、それでもやはり膨大であるに違いない神力をあくま

でも霰の弾幕は緩める事なく、御柱として即席で作り上げる技量はもはや『神だから』と言う理由だけで納得出来る物ではない。

空中であるにも関わらずそこに足場があるかの様な、左足の裏全体で宙を踏み締める力強い踏み込み。

足からではなく腰から前へと押し出す事によって生み出されたその力は下半身から上半身へ　腰から肩へ、そして御柱の底を掴んでいる右腕へと加速しながら伝達し集約される。

およそ一秒にも満たない全身運動。右腕を捻りながら思いつ切り前へ突き出す野球の投球フォームのいずれとも違う、『撃ち出す』動作。

捻れから生み出された銃弾の如き高速回転運動によって速度と威力を増幅させ疾走する御柱は、如何なる城壁も打ち崩す防衛不可の破城の槌。

ズンツ！　と御柱が大地を砕く音が響き、朦々と砂埃が立ち籠め、同時に飛礫と霰の弾幕が止まった。

結界の外で観戦している神奈子の部下達から歓声が上がる。その威力の程は彼らが誰よりも分かっているが故に、結界の外で観戦している誰も今の一撃での決着を信じて疑ってはいなかった。勿論ただ一人を除いて、ではあるが。

そして、妖始の他にも今の一合の全てを自らの目で見届け、舌打ちをする者が結界の中にも一人。

忘れるな、此度の戦争に参加している二人の力関係は、ほぼ互角であると言う事を。

砂埃が晴れていく。

攻める側に僅かでも時間が必要なら、逆説的に守りにも同等に備える時間が存在する事を。

そこに現れたのは、土塊つちくれの壁。壁のご真ん中には、見事命中し壁を中程まで貫いている御柱。だが、それでも尚、諏訪子には届いていない。

確かに神奈子の御柱は防御を許さぬ城壁すらも破壊する槌だとすれば、諏訪子の創り出したそれこそは要塞の鉄壁と言つに相応しい代物。

柔らかな土を幾重にも積み重ねられて創り上げる事により御柱の威力を殺し、衝撃を地へと拡散、吸収させる　　これ以上ない程に理にかなった、重厚で強靱な防壁。

硬い岩ほど脆い。それは未来げんだいでこそ当然ではあるが、未だに時代は弥生。そんな事を知る者などいる筈もない。もしも岩の壁を創り出していたならば、衝撃に耐えられず砕け散っていたのは間違いないと言つのにそれでも土を選んだのは純粹な勘か、それとも『坤』を創造する者としての本能か。

「……厄介だな」

神奈子は諏訪子の前に立ち塞がる壁を　　自らが放った御柱を受け止めた壁を見下ろして呟くが、その言葉とは裏腹に彼女の口元は釣り上がり、表情に浮ぶのは堪え切れない歓喜。

面白い。

即興で創った御柱だとは言え、確かに自分の一撃を防いで見せた壁……そしてソレを創り出した諏訪子。やはりこの相手は特別だと今一度認識し直す。

そして、だからこそ、

「全力で叩き潰す……!!」

それこそが諏訪子への最大の礼儀だ。
そう言って神奈子は雲が覆う天へと右手を突き出した。

ポツリ、と。

小さな雫が諏訪子の鼻を濡らす。

「雨………？」

間違え様もない、ついさっきまで霰を撒き散らしていた曇天から今度は雨が降っていた。水滴から僅かに感じる神力からその雨が神奈子による物だと知るが、……諏訪子には、神奈子の意図が掴めない。

確かにこの雨粒一つ一つからは神奈子の神力が発せられている。だが、雨は雨。幾ら神力が込められていようと自分も自分が傷付く訳はなく、ただその体を冷やすだけの筈だ。

（何で雨なんかを……）

一見すれば意味のない行為。だが神奈子がそんな事をする筈がない、と諏訪子が更に警戒を強める中、そんな事お構い無しに雨足は文字通り瞬く間に勢いを増し、水盆をぶちまけたかの様な土砂降り
の豪雨へ。

帽子がなければ目も開けられない程の勢力。それに加え分厚い雲によって日光の殆どが遮られ視界は最悪。風がないのが唯一の救いといった事だが、こうなってしまうえばもう目を開けてようが閉じてようが大差ないだろう。

視覚を塞がれた事に内心舌打ちしつつも、いつでも動きだせる様にと僅かに身動きして。

ズルリ、と足を滑らせた。

足元を見れば地面が泥濘^{ぬか}るみ、泥が溜まっている。

(そっか、この雨で泥に……)

刺す様な勢いも相俟って急速に変化しているのか、とそこまで思考が行き付いて、漸く気付いた。

水分を含んだ土。泥濘^{ぬかるみ}。土は泥へ。そして泥は流水によって削られ流れ出す。

「まさか……!？」

気付いた時には、もう遅い。

彼女は先程、神奈子の御柱をどうやって防いだ？ 答えは簡単、

目の前に立つ土塊の壁

そう、土塊だ。

幾ら積み重ね固めても土は土。水分を含めば泥濘^{ぬか}るみ泥へと変わる。

もし。降っているのが自然の雨だったならばその壁はそれこそ何時間だろうが、雨の中そこに存在し続けるだろう。何せ神霊によって形作られた力の塊だ。爆薬を使っても破壊出来るかどうか怪しい。だが、降っているのは同じ神霊が降らせる力を含んだ雨。いつそ雨の形と性質を持ち合わせた力その物だと言い換えてもいい。ならば、もはや土では壁としての役割を果たす事は不可能だ。

そして諏訪子が能力で神奈子の攻撃に備えるよりも早く。

その意味を失くした壁を突き破り、
の放った御柱が炸裂した。

今度こそ神奈子

雨が止む。

土が吸収し切れなかった雨水が地面を浸すその光景はまるで小さな湖だ。

そんな鉛色を映し出している余りにも巨大なその水溜りの中心地。先程まで諏訪子を守る為に立ち塞がっていた壁は跡形もなく消し飛び、突き立った御柱の周囲は衝撃により十数メートルに亘って半球状に抉れ、地雷でも爆発したのかと言う有様で。そこに、諏訪子の姿はなかった。

死体諸共消し飛ばしてしまっただか？ と疑念が頭を過ぎるが、すぐさま神奈子は頭を振ってそれを否定する。

この程度の小細工で決着が付く様な相手ならば一本目で終わっているだろう、と。

そんな神奈子の推測を裏付ける様に急速に引いて行く水面に眼下に捉えつつ、神奈子は笑みを深める。

今まで幾度となく行ってきた信仰を広める為の侵略戦争。戦ってみて面白いと思える相手は多く存在したが、それでも彼女が満足出来る相手に見えた事はなく。実の所、彼女自身は闘争に悦楽を感じた事はなかったのだ。今までの戦争も、信仰が必要だったから行ってきたに過ぎない。

だが、初めて。

彼女は戦いその物を楽しいと感じた。相手の思考を読み、裏を掻き、小細工を弄し、死力を尽くす戦闘を、楽しいと感じた。

初めて巡り会えた自分と対等の相手の戦闘を、彼女は間違いなく楽しんでる。

（ これで終わりじゃないだろう？）

もつと私を楽しませてみせろ、と。

神奈子が吼えるとはほぼ同時に、乾き切った地が蠢く。

神奈子により泥へと変化した土は諏訪子によって砂へとさらにその姿を変え、間欠泉宛らに膨大な量の砂が一つ二つ三つとその数を爆発的に増加させつつ、或いは直線を描き、或いは弧を描き、或いは大きく螺旋を描き、四方八方、三百六十度縦横無尽に全方向の虫一匹逃がさんとはかりの包囲網　その全てが、神奈子を圧殺せんと殺到する。

当然、砂は八坂の身に纏う風の衣に阻まれ気流の遠心力に弾き飛ばされていたが、そんなものは端から織り込み済みだったのだろう。砂は徐々に流れに沿う様に風の衣に纏わり付き始め、遂には神奈子を外界から完全に遮断し、それでも砂は留まらずその量と密度を増やし続け　気が付けば、神奈子を閉じ込めた砂は、その形を繭の様に変化させていた。

繭から伸びる幾つもの流砂の糸は障壁へと繋がり、外からでは繭の中どころか結界の中すらも殆ど窺い知る事は出来なくなっているが、そんな事は露知らず……もし知ったとしても全く気にしそうにもないがそれは兎も角、繭に閉じ込められた神奈子はどうやって抜け出したものか、と頭を捻る。

とは言え、体の動きの殆どが封じられ、御柱を投擲するどころか、まともに身動きすら出来ないのが現状。頼みの綱である風の衣も砂の圧力で悲鳴を上げている。下手に悩み時間を浪費すれば、風の衣

が砂に押し潰され見るも無惨な状態で死ぬ羽目になるのは間違いない。

(少しばかり動かされている感じがするのは気に入らないが……)

何にせよ、やる事に変わりはない。

轟ッ！！ と新たに創り出される大気が狭い空間で荒れ狂う。

既存の物だけでは絶対量が足りない。ならば、増やせばいいだけだ、と絶え間なく吹き荒れる風を制御し、圧縮し、少しずつ風の衣へと重ねていく。

勿論、こんな事をしてもただの時間稼ぎにしかない。生存している時間が僅かに伸びるだけ……故に、その真意はまた別の所にある。

(成功するかどうかは八：二って事か。意表を付いて洩矢の反応が遅ければ御の字だが……)

成功率が八割以上と言えば高く聞こえるが、命のやり取りである事を考えればやはり低い。だと言うのに、神奈子には全く躊躇がない。あるのは精々『案外ギリ貧に追い込まれている』と言う自覚程度。

通常ならば、彼女の意識の低さは命取りだ。考えが甘い、と言い直してもいい程に彼女の戦闘へ ひいては、殺し合いへと臨む姿勢は、非常に危うい。

だが、その意識の根本にあるのは慢心ではなく、自らの力への純粹な信頼。

緊張する事も気負う事もなく。どの様な状況であろうとも、彼女は最高のパフォーマンスを可能とする。

幾度となく振るってきた力であるが為に、それは、容易く自らの命を賭けるに値するものだ、誰よりも彼女自身が知っている。

自分を守っていた鎧かぜを外す……否、更に小さく圧縮し、止める。

突如出来た空洞へと流れ込んでくる砂が神奈子を押し潰す前に、彼女は尋常ならざる密度を誇る大気の塊の制御を放棄した。

それは、火薬を使わない爆弾だ。能力の枷から放たれた高密度の大気爆弾は周囲との摩擦によって生まれた熱を伴った爆風を撒き散らし、砂を押し退け、外へ外へと突き進み。

全く。やってられない、と諏訪子は神奈子の声を聞いて内心でぼやいた。

何が楽しませろ、だ。確かに彼女は自らの相手に相応しいと認めはしたが、それとこれとは話が別。

はつきり言えば、この戦闘はリスクに対するリターンが少な過ぎる。諏訪子は一度たりとも負けられないと言っのに、それに対して神奈子は死なない限りコンテニューし放題……。これが人間同士の数百数千と数が必要とする戦争なら話は違ったのだろうが、神と神の戦争には兵糧も距離も関係ない。

(やっぱ、勝った時には力尽くにでも不可侵条約でも結ばせなきゃ駄目か。ミシャグジや、いざとなれば妖始もいるし……)

取らぬ狸の皮算用、と言つ言葉もあるが、それ以上に扱き使われる事が決定している狼へ同情の念を覚えざる得ない……が、まあ。基本的に普段からこんな扱いなので気にするような事でもないだろう。ついでに、結界の外で狼がくしゃみをしたのは、今この時ばかりは完全な余談だ。

ズキリ、と僅かに左肩に鈍い痛みが走る。

躲した筈の御柱。だが、その余波までは躲し切れなかった。全く持つて出鱈目な一撃だ。狙いに気付くのがもう少し遅ければ、或いは決着となつていたかもしれないが、……『もしも』に意味はない。考えるべきはこれから仕込むべき策だ、と思考を切り替える。

左肩の痛みは戦闘に支障が出る程ではなく、ついでに衝撃に乗じて姿を眩ます事にも成功した。

彼女は祟り神。信ずる者には恩恵を。反する者には災いを。それこそが本分。

戦を本分とする軍神に真つ向から立ち向かうとすれば、彼女には些か分が悪過ぎる。諏訪子はそれが分からない程に愚かではなく。そして、分かつていて尚正面切つて戦う程、無鉄砲でもない。だからこそ、策を巡らせる。

今までのやり取りから推測した神奈子の性格から考えるに、大量の砂に閉じ込められた場合、こちらの出方を窺う様な受け身ではなく何らかの手段で自らこじ開けてくるだろう。だから。

内から爆風と共に弾け飛ぶ砂の繭と、その爆風に乗り、砂の天井の所為で薄暗くなっている外へ飛び出してきた神奈子。そして、砂の中から伸びる小さな手。

たった今まで自分を拘束し圧殺しようとしていた高密度の砂。その先入観が、神奈子の反応を僅かに遅らせる。

その中に潜んでいた祟り神の手が、軍神の左手を掴み、

「さっきのお返しだよッ！！」

瞬間、腕に奔る激痛。反射的に御柱を放つが、諏訪子は再び砂の中へ。御柱は空を切り、結界を揺らすだけに止まった。

「……なるほど、『祟り』か……！！」

まるで体を内側から焼かれている様な激痛に犯され、左手を押さえて呻く神奈子の額に脂汗が浮かぶ。

その例えは間違えていない。事実、諏訪子の『祟り』が蝕むのは彼女の身体ではなく、神霊としての本質たる存在その物。

神霊の見た目　肉体に意味はない。先も言った通り、獣から物ノ怪へと為ったが故に人と同じ様に肉体に依存する妖獣を例外として、彼女ら神霊は妖怪と同じくその存在は精神に依存している。

神霊は信仰に。

妖怪は畏れに。

だからこそ、彼女らに、肉体の欠損、劣化による自然の『死』が訪れる事は殆どない。多くは人々から忘れ去られる事による『消滅』。それが抛り所を失くし、存在を保つ力さえ失った者の末路だ。だが、決して殺せない訳ではなく。『謂れ』『畏れ』『信仰』　彼ら彼女らが依存する物こそが、彼女ら彼女らを殺す。

だとすれば、『祟り』『呪い』の類……それも日本最大の信仰を

誇る土着神 崇り神『ミシヤグジ』を統括する洩矢の『崇り』となれば、神霊とつて致死の猛毒に他ならない。

自らの神力を消費する事で『崇り』の進行自体は抑えているが、被うまでには至らず。左腕は肘までが紫色に変色し、次いで痛覚以外の感覚も失われた。

「やられたな……」

地に潜れる事を想定していなかった私の落ち度か、と神奈子は齒噛みする。

もうこの戦闘中、左腕は使えまい。御柱の投擲は右手があれば問題ないが、それでも片腕が制限されたのは痛手だ。更には諏訪子に姿を隠す事まで許す始末。『崇り』の事もある。今はまだしも、戦いが長引けば長引く程不利になっていくのは目に見えているが……。

（だからと言って功を焦ればそれこそ思う壺、か……。不味いな、たった一手でここまで戦況を持って行かれるとは……）

正しく八方塞がり、打つ手がない。……だと言うのに、それでも尚今の状況を好ましく思う自分がいる事に、ほとほと呆れ果ててしまふ。いつから私は痛みすらも享樂に変える戦闘狂になったのか、と。

ああ、そう言えば。

こうやって追い込まれるのも、初めてだったか……。

「ハッ……此度は初尽くしだな」

強がって呟いてみるも、状況は変わらない。左腕の激痛は未だに継続。酷くなつてないだけマシだろうかと。そう思ったのは、姿のない諏訪子の声が神力と共に周囲に響くのは、ほぼ同時だった。

降参するなら、今のうちだよ？ 今なら、二度と洩矢の地を踏まないって条件で手打ちにしてもいい。

馬鹿を言つな。ここまでやられておめおめと引き下がれるものか。

……そつか。だったら、私は貴方を……殺す。

上等だ。それぐらい言ってもらわねば、対等と認めた意味がない。元よりこちらから仕掛けた戦。殺されたって文句なんぞ言うものか。だからこそ、お前も命を覚悟しろ。どんなに戦況が不利だろうが、それでも

「勝つのは、私だッ！」

自らを鼓舞する、早過ぎる勝ち鬨。

勝機があるとすれば短期決着。ならば力を温存する事に意味はない、と今までの比ではない程の神力が神奈子の身体中を駆け巡る。左腕の『祟り』も被うには至らないが、それでも痛みは緩和され血色も若干ではあるが戻った。……戦うには、これで十分。

その心意気やよし、と。まるで神奈子に応えるかの様に、天と地が反転した世界で幾つもの円錐状の岩が砂を突き破り、そしてそれを舞う様に躲し続ける神奈子。

躲し、反らし、見極め、そして時に御柱で打ち砕き、最小限の動きで間隙を縫う様にして飛び回る。

時間制限は刻一刻と迫る。だが、諏訪子を見付ける事も、地上へと引き摺り出す事も出来ない。神奈子には砂の中の諏訪子へと干渉する術すべがない。

本来、諏訪子程の神格であれば、いくら姿を隠した所で膨大な力を隠し切れず、そこから居場所を特定する事も可能なのだが……如

何せん、ここは諏訪の地であり諏訪子の神域^{テリトリー}。石や木は言うに及ばず、その砂の一粒にまでも彼女の力が行き渡り、そこかしこから諏訪子の力を発している。

そんな中で諏訪子をピンポイントで探り当てる　その難易度は、砂漠から一粒の宝石を見付ける所の話ではない。

「チイツー!!」

自分を襲う円錐を御柱で相殺していく神奈子の顔に、僅かに焦りの色が見え始めた。

無理もない。何せ、既にこの一方的な展開が始まって数分が経過していると言うのに、未だに何の突破口も見いだせていないのだから。

再び御柱を投擲。自分を狙って放たれた円錐を破壊した御柱は岩を貫いても尚、勢いは衰えず砂の基盤までも吹き飛ばし

神奈子は大地に突き刺さる、僅かな光を反射するそれを見た。

結界の根元に突き立てられた反りのない白刃の短刀。結界が張られる直前にも、あれと同じ物を見ている。恐らくは、この結界を維持する為の祭具の類だろうが……。

「ッ……!!」

短刀に気を取られ、岩の円錐への対応が一瞬遅れる。左肩を掠める岩の感触に冷や汗が流れるのを感じながら、砂に刺さったままの御柱を目で追いながら即座にその場から離脱。

あの妖怪め……!!　と内心でどこをどう考えても完璧に八つ当たりとしか言い様のない罵倒を吐いて、ふと頭の片隅にある考えが掠める。

突破口……とはとてもじゃないが言えない。だが、それでも試すだけの価値はある。

「……行けるか？」

ポツリと呟き、神奈子は思考を加速させる。信じるのは、自分の力と相手自身。

全ては、自らの勝利の為に

(今のは惜しかった、かな……)

大地から伝わってくる微かな手応え。それが自分の攻撃が神奈子へ掠った、と言う事実を諏訪子に知覚させる。

自分の力が満ちた地へ紛れ込むと言う地の利を最大限に生かしたこの戦法においての最大の利点。それは土着神としての性質、そして諏訪子の持つ能力との相乗効果。

身を隠しながらも、『乾』を介し周囲を知覚する事を可能するそれは諏訪子のみには許された業。だが、それは逆説的に『乾』が触れる範囲でなければ知覚出来ないと言う事でもある。

事実、今の諏訪子には神奈子の明確な居場所が分かっていると言う訳ではなく、彼女から発せられている神力から大まかな居場所を割り出しているに過ぎない。無論、ただの一神霊であればそんな状態で攻撃を命中させるのは不可能に近いが、極東の島国最大の信仰を誇る洩矢の主神たる諏訪子にはあり余る神力でその条理を覆す。曰く、『的が小さければ弾を大きくすればいい』と。

僅かな感触を元に続行される目隠しの的中さなかで、『乾』その物が大きく揺れる。それその物に可笑しな所はない。恐らく神奈子の放った御柱だろう類の振動は、既に幾度となく感じ取っているが……今度ばかりは、少し訳が違う。

すぐに第二波、第三波と一定の間隔で断続的に伝わる振動。そこから推測される可能性は二つ。何か策があつての事か、はたまた自暴自棄になつただけか。

無作為にばら撒かれている御柱からでは、神奈子の意図は読み切れないが、

(……『偶然』で負けるのは、御免だね)

御柱の狙いに規則性はないが、威力や衝撃その物はほぼ一定。それを利用して安全圏　更に地中深くへと潜っていく。

この辺りで十分か、と適当な所で見切りを付け、意識を思考へと埋没させる。

考えるべきは、神奈子の思惑。

既に感じ取った振動は十や二十を越えるが、それでも未だに続いている。自暴自棄になつていいるのなら構わない。このまま勝手に自滅してくれるなら諏訪子にとっては万々歳だ。

(……)　もし、策があつたら……)

そして諏訪子の危惧は、最悪の形となつて実現する。

「え？」

思わず、声が漏れた。

大切なナニカを　慣れ親しんだ肉体の一部を失くしたかの様な、今まで感じた事もない喪失感が諏訪子を襲つた。

『乾』が 諏訪子の神域が、崩れた。

「くっ……！！」

事態の急変に暴走し掛けた能力を一度放棄し、現状の把握を最優先に。全ての神経をそれだけに集中させる。

分かったのは、ついさっきまで結界内の『乾』に満ちていた諏訪子の神力が、別の力によって打ち消されたと言う事。それが意味する事は、結界内限定とは言え、諏訪の地を奪われた事に他ならない。諏訪子の力が数百年単位で染み込んでいる土地を、純然たる力尽くで我が物とする そんな事、誰がやったかなど最早もう言うまでもない。

力の発信源は無数に突き立てられた御柱。

恐らくだが、神奈子は御柱を突き立て、空間を『困む』事で土地を自らの神域とするのだろうが それはつまり、理不尽な力による一方的な侵略に他ならない。

だとすれば、相殺し合っただけまだマシか、と結論付け、出来る限り力を抑えつつ移動を始める。

(地の利はなくなっただけど、奪われた訳じゃない……
なら、まだ私の方が有利だ)

それに、まだ手は残している。だからこそ、焦る必要はない。なのに。

頭上で膨れ上がる、今までの御柱がかわいく思える程の桁外れな神力。

どの程度まで衝撃が及ぶかは不明。だが、少なくとも回避は間に合わない。完全に防御する事も同様。ならば、どこまで威力を殺す事が出来るか、と盾代わりとして周囲の砂を岩盤に変える。

頭上に居座る高密度の膨大な砂と諏訪子の周囲を囲む硬い岩の二重構造。防ぐ、とは行かないまでも、被害を最小限に抑えると言う点では、諏訪子にとって、限られた僅かな時間で出来る最良の選択だった。

だがそんな物、理不尽な暴力の前では何の意味も成さない。

衝撃が全身を貫く。直後に感じる浮遊感から周りの土砂と共に巻き上げられ、宙に投げ出された事を知る。

受け身を取り損ねた諏訪子の体はそのまま勢いに流され、漸く止まったのは二度三度と地面を跳ねてからだだった。

「ガッ……ハアッ……!!」

絶息。

地に叩き付けられた衝撃で強制的に酸素を体外へと排出させられた肺が新たに酸素を求めて喘ぐ。荒れた呼吸を無理矢理整えようとして噎せながらも、軋む四肢に力を込めて立ち上がり、

「 会いたかつたぞ、洩矢」

顔を上げた視界の中に、左腕に走っているだろう激痛にも関わらず、悠然と佇む神奈子を見た。

「私は、会いたくもなかったけど、八坂……」

彼女が背負っていた四本の御柱の内一本が消えている。なるほど、つまりはアレが彼女に出せる最高出力と言う訳か、と頭の片隅で考えながら睨む様な視線を寄越せば、返ってきたのは神奈子の獰猛な

笑み。……余裕そんな態度が微妙に勘に障る。
はあ、と溜め息を一つ。周りに目を向ければもう最初の森だったはずの土地は跡形もなく、大部分を占める大量の砂だの幾つも突き出した円錐の岩だの、そこら中に突き刺さっている御柱だの馬鹿みたいなサイズのクレーターだの、もう世紀末も斯くやと言つ有様だ。

「まったく、人の土地だからって滅茶苦茶し過ぎじゃない？ 誰が直すと思ってるのさ」

「……半分以上は貴様の所行だがな。まあ安心しろ。少なくとも、直すのは貴様ではない」

「へえ？ 何？ わざわざ直してくれるの？」

「ああ、直してやろうとも。何せここも私の土地になるのだからな。荒れたままにしておく訳にもいくまい」

「アハツ、おかしな事言っね。ここは昔も今も、そしてこれから私の土地だよ」

「ハツ、戯けが。その形なりで何を言うかと思えば……もう諦めろ、貴様は私には勝てぬよ、年増」

「言っじゃないか、若僧」

会話の最中は笑顔を浮かべていたものの、米神に青筋のおまけ付き。ついでに神奈子も口元が引き攣っている。

負ける訳にはいかないし、負けるつもりもない。……だけど、もし負けたらどうなるだろうかと、言っ疑問が頭を掠める。

穂波は諏訪子の血縁と言っ事が知れば殺されるかもしれないが、それさえ隠し通せれば後は態度次第でどうとでもなるか。

人里の者達は言わずもがな。神々が人々を傷付ける事はない。それについては断言してもいい。それに、人間と言っのは実に賢い。自分達が信仰していた神が敗れたとしても、代わりになる、より強大な力を持った神がいれば喜んで受け入れる。

(妖始は……どうするんだろう)

数百年経っても、未だに彼の事はよく分からない。

負けず嫌いだったり、意地っ張りだったりと妙に子供っぽい癖に、年寄り特有の諦念感ていねんを垣間見せる変わり者。だと言うのに、一緒にいると何故か落ち着く居候。 自分を信じてくれると言った、大切な家族。

でもそれは、たぶん嘘だ。彼には諏訪子が敗北する事が分かっていたのだと思う。本人は隠していたつもりなのかも知れないが

いや、端から見れば、本当に隠せていたのだろうが、数百年と言う付き合いは、諏訪子に彼の嘘を見分けるさせるのに十分な時間だった、と言うだけだ。

(負けられない理由、一つ増えちゃったね……)

後で、信じなかった事にしこたま文句言ってやろう。ついでに、それを理由に一日抜き使うのもいいかも知れない。

そんな事を考えると、こんな状況なのにちよつとだけ可笑しくなる。

この戦いも、もう大詰めだ。仕込みは全て終わっている。なら、後は勝つだけでいい……!!

始まりと同じ様に唐突に、合図らしい合図もなく。

終わりの始まりが、始まる。

崇り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（中）（後書き）

相も変わらずの主人公空気回。未だここまで主人公が喋らない話があっただろうか。

友人に読んでもらった感想では「……これ、妄想諏訪大戦として短編にすりゃよかったんじゃない？」と言われてしまいました（笑）さて、次こそ諏訪大戦完結編。そしてその先まで脳内プロットだけは出来上がっております故、受験が終わり次第投稿の予定。……まあ、予定は未定なんですがね？

感想、誤字脱字報告意見アドバイスなどありましたらお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7842n/>

東方否意狼

2012年1月1日01時51分発行